

新しい家庭科

ウエイ

少年・少女たち

逐次刊行物

昭 59 6.20 刊

国立婦人教育会館  
情報図書室

KORE WA NANNO MI M I DARŌ?  
PAZU RU

1984

7

野の花をたずねて  
あおのつがざくら



七月の月山中腹は夏スキーのシーズンで、若者たちのカラフルな姿と、はじけるような歓声に、うす汚れた雪までが、なぜかまぶしく輝きだすようです。しかし頂上に通じる登山道は信仰の道らしく、六根清浄の声と共に上下山する白い着衣と金剛杖が、あふれる程の花の道へ現れたり消えたりしました。

七合目にかかった頃、土地の人なのか真赤な頬とにつと笑った白い歯のおばさんが、「これからが大変だよ」と、私の手にむりやり杖をにぎらせると、うれしそうに下山して行きました。

晴れてはいても、谷からわき上がった霧が突然視界をうばい、ヨツバシオガマやハクサンフウロの紅だけをわずかに残して、乳白の世界の中にすべてを埋没させてしまうことがあります。そんなときほっと心が安らぐのを覚えます。九合目の岩かげで、花の一つ一つがそれぞれを思いを抱くかのような淡緑色のアオノツガザクラに会いました。

(大室君子)

## 巻 頭 言

### 少年よ少女たちよ

#### 岡 百合子

春—生きとし生けるもののいのちが花開き、芽ぶく。その下を、まだなじめぬ制服を着た、かわいい中学生たちが学校に通う。この子らを見ると私は、死んだ子のことを思う。息子は、中学に入ってからすぐの、夏に死んだ。

「君はもう中学生だから、今日からは他人に迷惑をかけないで、自分のことは自分で責任をとってやるようにしなさい—」これが、息子が中学に入った時、私たち親が言った言葉だった。その言葉が今、刺し貫く痛みを伴って浮かび上がって来る。

人が生きているということは、無数の他の人々——いや人だけではない、生きとし生けるもの全ての支えの上に在るものであった。迷惑をかけない、ということは、そういういのちといのちのつながりを見ることのない、傲慢な言葉である。

“生かされている自分”ということを経験できなかった息子は、袋小路の中で、人間という存在だけをギリギリと考え、ゆきづまり、自らのいのちを断った。

萌え出たばかり、赤ちゃんの手のような若葉がふるえている。同じように、今はじめて自我に目覚めた心が、赤裸のままこの世界に投げ出されて歩いている。

少年・少女たちよ。あなた方のいのちは、数知れぬ他のいのちとのかかわりの中で息づいているのです。どうぞ、そのことへのまなざしを深める中から、勇気と謙虚さを汲み上げて生きてくれますように——言葉にならない呼びかけをしながら、私は子供たちを見送る。

新しい家庭科



1984年7月号

少年・少女たち

〈巻頭言〉少年よ少女たちよ……………岡 百合子 1

※少年・少女たち※

さまよう少年少女たち……………佐々木 賢 4

✓ 孤立無援の少女たち……………清野真巳子 9

✓ 共働き家庭と子ども……………篠崎 正美 14

メルヘンはどこへ……………山花 郁子 20

✓ 女子高生に女性史を語るなかで……………加美 芳子 25

心にコフシもつ子どもたち……………宮 淑子 31

〈特別企画〉We 春の公開ゼミナール 管理教育を超えるには 70

管理教育考／長谷川孝・「授業」をしてみても中嶋里美  
「授業」・討論・生徒になつてみて・公開ゼミナールに  
参加して

※新しい家庭科を創るために※

小学校では 自分の服装は自分で考えて…中里 清志 37

中学校では すべての生徒に生活力を…榎田 真澄 43

大学では、今 生活者教育の視点……………保科 達子 49

※発言※

学習の主人公たち おとなに言いたいこと

……………横浜市立井土ヶ谷小学校の子どもたち 61

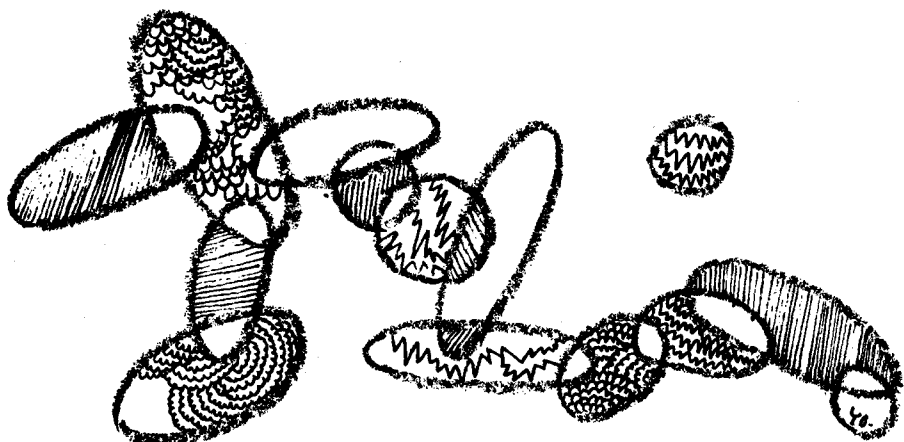
○Weになんでも言おうなんでも聞こう 68

○Weの読者会だより 88

○泉 85

○わたくしからあなたに 90





❀ 連載 ❀

めかくしとつて管理教育にフー……………長谷川公一 64  
児童館で働く中から……………四方 淑子 66

野の花をたずねて……………大室 君子

視点……………〈教育とこへんぎよう〉……………長谷川 孝 54

counsellingの応用……………「画面から」その2……………児玉すみ子 56

現場から……………再びへ秘密について……………武田 秀夫 58

霞通信……………われひとり……………藤田 健次 53

ふじたけんじの……………生活マンガ……………紫の匂へる妹を……………井田 邦弘 80

萬葉の女たち・男たち……………中高年の苦悩(その2)……………増本 敏子 81

女の人生・男の人生……………男女平等教育……………ストッパ ザ 男女別……………中嶋 里美 79

すすめてますが……………風に向かって……………ありのままに生きること……………沖永 紀子 84

ほん……………「インクリット・パークマン」……………マイ・ストーリー……………小田亜佐子 82

シネマ……………愛のイエントル……………遠藤 由紀 83

〇波 「構造的暴力」 半田たつ子 86

〇ひと 小田亜佐子さん 36

〇新刊紹介 60

目次イラスト 馬場洋子 本文イラスト 中野敦子／野中浩一／半田たつ子  
表紙デザイン 加藤由美子



☆ 少年・少女たち ☆

## さまよう少年少女たち

佐々木 賢



チエッカードなどが歌っている「ギザギザハートの子守唄」という曲がある。知らない人があると思うので、その詩を書いておく。

ちっちゃな頃から悪がきで、15で不良と呼ばれたよ  
ナイフみたいにとがっては、触るものみな傷つけた  
ああ わかってくれとは言わないが

そんなに俺が悪いのか

ララバイララバイおやすみよ、ギザギザハートの子守唄

恋したあの娘と2人して 街を出ようと決めたのさ  
駅のホームでつかまって 力まかせになぐられた

(リフレイン)

仲間がバイクで死んだのさ とってもいい奴だったのに  
ガードレールに花そえて 青春アバヨと泣いたのさ

(リフレイン)

熱い心をしばられて 夢は机で削られて  
卒業式だと言うけれど 何を卒業するのだろう

(リフレイン)

それにもう一つ、「15の夜」という尾崎豊の曲が根強い支

持を受けているという。

落書きの教科書と外ばかり見てる俺

超高層ビルの上の空、届かない夢を見てる

やりばのない気持の扉破りたい

校舎の裏煙草をふかして見つければ逃げ場もない

しゃがんでかたまり背を向けながら

心のひとつも解りあえない大人達をにらむ

そして仲間達は今夜の家出の計画をたてる

とにかくもう学校や家には帰りたくない

自分の存在が何なのかさえ解らず震えている

15の夜

盗んだバイクで走り出す行き先も解らぬまま

暗い夜の帳りの中へ

誰にも縛られたくないと逃げ込んだこの夜に

自由になれた気がした

15の夜

チェッカーズはザ・ベストテンなどの歌番組で人気上昇中だから、ティーン幅ひろい支持を受けていることがわかる。尾崎豊は人気の程はまだ未知数だが、「自分の存在が何なのか」などと、やや理屈っぽいところがあるのでティーンの中の理屈派に受けているのであろう。だが大衆派にしろ理屈派にしろ、その歌詞を比べてみると驚くほど共通点がある

ことに気づく。

共通点というよりも、テーマが全く同じであると見たほうがよい。チェッカーズが「ナイフみたいな心」と歌えば、尾崎は「やりばのない気持」と十五歳の少年の心を表現する。前者が「わかつてくれとは言わないが」とひがんでみせると、後者は「心のひとつも解りあえない大人達」と断定的にいう。「夢は机で削られて」と前者がはっきり学校批判をすれば、「落書きの教科書」を手にして「届かない夢を見てる」と後者もこれに応じている。そして「家出」と「バイク」がともども両者に大きな意味を持つものとして登場してくる。

つまり、「学校は少年の夢を阻むもの」としてとらえられ、自分たちは「不当に扱われている」という思いをいだき、そして「大人の全き無理解」を訴えているのである。さらに、自分たちの能動的な行為としては「家出」と「バイク」しか残されておらず、しかも「家出」や「バイク」で解決できるものではないことも知っているのである。

大人たちはこの詩を読んで「甘ったれ」と思うかもしれない。だが、この歌が全国の少年少女たちにうけていて、ワッともてはやされているという現象は無視できない。はやるにはそれなりの意味があると思う。現に私の目の前にいる定時制高校の生徒たちの言動を見ると、これと全く同じ心境にあると思われる。むろん、家出やバイクの経験のない少年

たちもいるだろうが、この歌が広く根強く歌われるということとは、多くの少年たちが家出やバイクに情動的に共感している証拠でもある。

「夢は机で削られて」という心境は、私の生徒の語ることはの中にも出てくる。「悲しかったよお」と一人の生徒は自分の高校受験のときの体験を語る。「全日制を五つもうけて、一つまた一つっておちていくと、だんだん自分が小さくなっていくみたいで、最後の一つをおちたときなんか、もう、家でふとんかぶって一日中泣いちゃった。その時、もっと勉強すればよかったと思ったよ。自分で自分が嫌だったけど、どうしておれを、もっと勉強させてくれなかったのかと、親や先生たちを恨んだよ。でも、中学のときは、勉強しろっていわれても、おれ、ちっともしなかったもん」という。

別の一人が語る。「おれたち、勉強のできねえのがグループでいて、みんな遊んでばかりで、それで、中学三年生の時、十二月か一月ぐらいだったかなあ、このままじゃあ高校は、どこ受けてもダメだといわれて、じゃああの最低のM高だけでも受かうって、みんなで話し合って、そいでもって教室に残って五、六人で勉強したら、一人の先公が来て俺たちを見て笑うんだ。『おまえら、いまからやったってダメだ』っていいやがるんだ。むかついたなあ。『てめえ、教師だろう、教師がそんなこといいいいのかよお』っていいって、

その先公、ぶつとばしてやった。なに？ そのあと？……。そのあと、やっぱ、おれたち勉強しなかったなあ。

こんな話をごまんとあつて、それはみんな勉強しない少年たちと、身近な親や教師たちが平行線をたどった話である。大人たちは高校受験に失敗した子どもたちに対して、内心では「それみたことか」「注意してたことを聞かないからだ」「思い知ったか」という気持を持っていて、それを心ない大人はひよいと口に出して言ってしまう。そこで子どもたちは二重に傷つくことになる。だが私は、この身近な大人たちの気分が半分ぐらいわかる気がする。それは、子どもが本当に勉強しないからである。ガンとして勉強しなくなっているのである。個人的なレベルでいえば、はっきり言って自業自得といえそう。そこで子どもたちは、自己嫌悪と身近な大人の無理解との二重の苦しみを味わい、十五の春に人生最初の挫折を経験するのである。

だが、社会的なレベルで事態をよく見ると、これは大人のしかけた罠であると思う。たとえば、たった一本のルールしか敷いておらず、その上を走る列車には定員制があれば、乗りそこなうものが必ず出る。列車以外にはほんのわずかな乗り物しかなく、しかも乗り物嫌いがいても歩いていくことができないようにしてあればどうなるか。

中学校ではおおむね五段階の相対評価で、1という点数を

もらう者が必ずいるようなシステムになっている。1の評価をもらった生徒は学習意欲を喪失する。意欲がないから1なのだ、といえなくもないが、あとは相互作用みたいなものである。とにかく、システム上勉強嫌いが出るようになっていく。こんなことは、とうの昔に分っていることだが、何度でも指摘しておくことは大切だ。それにこういうシステムを作った大人の責任も明確にしておく必要がある。

それに勉強自体が面白くなく、受験以外の実生活に役立たないものになっていることも明らかだ。これは文明の発達と多分に関係があることを、私は今までにしばしば述べてきた。学校での勉強が宙に浮く時代になっている。勉強の実質的意味が薄くなればなるほど、序列や資格のための形式的な意味の比重が大きくなる。

そして、子どもたちの進むべき道は、この序列や資格を目指す形式的な勉強以外に、何もなくなっている状態だ。いや、実際にはまだ少しはある。中卒のままで大工や美容師の見習などになる者もいる。だが、これは確実に少なくなりつつある。社会全体では若年労働者がいらぬ時代に入っているのだ。じわつとした産業革命が進行中である。やや変わった言い方だが中央の仕事はあっても、地方の仕事が無くなりつつある。中央の仕事とは、大きな組織の中でその一部分の抽象的な役割を担うもので、これには学歴が必要だというこ

とになっている。地方の仕事とは、農工商などその営為や役割が具体的に庶民のわれわれにも分るようなものであり、これはさほど学歴が関係しない。

そもそも大卒とか高卒の資格とは、何種類かの教科科目の単位数を合計して与えられるもので、合計されたとたんに抽象的なものになってしまう。学校化社会の中にいると、この資格・学歴が抽象的なものであることにも気づかないようになっていく。資格の抽象性は、この社会では仕事の抽象性と結びついている。

子どもたちは学校の中で、自分にとって何が大切で、何が瑣末なことなのか分らなくされている。大人の決めたレールの上を列車に乗ってただ走らされる。乗り換え地点で次の列車に乗り遅れるなどあらかじめ注意されているが、そこで必ず一定数の者が乗り遅れるようなくしきみになっている。これは明らかに大人のしかけた罠である。個人的には自業自得だが、社会的には罠である。だから「学校の教師がわかりやすい授業をすればよい」とか、「社会的に意味のある内容を授業でとり上げればよい」などといった議論はピントがずれている。しかけた罠を取りはずすことこそが望まれるし、それができなくとも、このしくみを充分に認識しておくことが必要だ。

子どもたちは自分のおかれた立場がおかしいことを感じと

り、「ナイフみたいな心」を持ち、「やりばのない気持」をい  
だいている。そして、ただ勉強しろと要求する大人たちの無  
理解を責めている。たしかに大人たちは無神経で無理解だ。

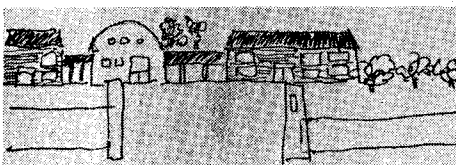
それは畏をしかけた社会のしくみに、大人が気づいていない  
からでもある。だが、これとても個人的な立場からすれば、  
大人とてどうしようもない所である。子どもの身近にいる親  
や教師にとつて、勉強をすすめる以外の道がわからないので  
ある。「そんなに勉強が嫌いなら、学校をやめて職につきな  
さい」と言おうとしても、子どもにとつて魅力的な仕事はな  
いし、あるのはただ臨時や短期のアルバイトばかりである。

事態は十五歳の少女たちにとつて、彼らが思っている  
よりもっともっと閉鎖的になっている。「夢は机で削られて」  
というが、机にあらわされた学校だけが夢を阻んでいるので  
はなく、もっと大きな社会のしくみ全体が彼等の前に立ちは  
だかっている。だから、彼等がしうる唯一の主體的な行動  
が、家出やバイクであつたりする。家出は単に家庭や学校か  
ら逃げ出すという意味ではなく、彼等が置かれた状況全体か  
らの逃避である。「誰にも縛られたくないと逃げこんだこの  
夜に」と少年が歌うとき、状況全体からの逃避の感じがひ  
しひしと伝わってくる。しかも相手があまりに大きいので、  
所詮は逃げきれぬものでないことを彼は知っていて、それを  
「自由になれた気がした」と表現しているのもいじらしい。

バイクも一時的な自由を求めての逃避とは違う。擬似的自  
由を求めて、現実全体からの逃避である。これは家出より、  
もっと自己破壊的で、死と隣りあわせにある。バイクは死を  
暗示している。私の生徒でもこの年で友達の事故死に出会っ  
た者がたくさんいる。だからバイクは、彼等の死にもぐる  
いの存在主張であるともいえる。

少女少女たちの精神生活がこれほど不幸な時代はかつてな  
かったに違いない。今のままでさらにはこの状態がエスカレ  
ートしていくであろう。我々は社会全体  
の進むべき道を修正しなければならな  
い。中央集権的な生産や文明を排して、  
地方分権的な文化や生活へ道をさぐらな  
ければならない。大多数の少女少女たち  
が生々と活躍する場は、分権化した地域  
社会にしかないと思うからである。

(高校教師)



☆ 少年・少女たち ☆

## 孤立無援の少女たち

清 野 真 巳 子

大阪のある府立高校に、今年四月から、一人の少女が子育てしながら通学している。出産は一月。「同じような立場の人たちのためにも、私頑張る。高校生でもこんなにできるんだと言われるように」といいながら、毎朝、実家に赤ちゃんを預けて登校し、放課後ひきとって自宅に帰る。つれあいは、すでに働いている同い年の少年だ。赤ちゃんも元気に育っている。母親である彼女の生活はちよっと年齢が若いだけで、働きながら子育てしている女と少しも変わらない。妊娠・出産した少女が、ほぼ自動的に退学を余儀なくされる今の学校現場の実情からみれば、全国でも珍しい例ではないか。

昨年春から秋にかけて、「少女たち」というテーマの新聞連載のため、取材をした。いま、少女を取りまくさまざまな困難な状況のなかで、少女たちの多くが「女だから」という壁にぶつかり、挫折させられ、自分自身を責め、屈折している。新聞の仕事では、こうした少女たちが自分の置かれた状況を客観的に知り、「女」の枠を突きぬけた人生を歩き出すための手助けになるような情報を流したい、と思っていたのだが、そのなかで、大変気になることが二つあった。

その一つは、いま、高校で、生徒の生む権利が、まったく認められていない、ということだ。高校生の妊娠・出産は数として多いとはいえないし、ずいぶん突出した議論だと思われるかも知れないけれど、こうした実情は、現在の硬直した



女子教育全体のありかたを象徴しているように思えるので、ここで書いてみようと思う。

はじめに紹介した少女の場合は、二年生だった昨年夏、妊娠がわかった時点で、教師から遠まわしに自主退学をすすめられている。家族が「何としても卒業だけはさせたい」と強く主張したのに対して、学校は「何らかの処分をする。最も重い場合は、無期停学」と主張した。「妊娠に対する処分は、府教委の方針だから」と説明した教師もあったという。

「なんとかならないだろうか」と、私たち（女性記者二人）が父親のSさんから相談をうけたのは、それからまもなくのことだ。学校と府教委に話を聞きに行ったところ、両方とも「公式見解」は、Sさんの話とは大きく食い違っていた。

高校の教頭の説明は、ほぼ次のようなものだ。「彼女の場合、相手が中学時代の友達で、親も認めている。考え方もまじめだから、不純異性交遊として処分する対象にはならない」。けれど、他の父母からの反発や、周囲の生徒への影響も考えられるので、「本当に勉強を続ける意志があるのなら、通信課程か定時制へ進路変更してはどうか」という。府教委の説明は、もっと意外なものだった。「高校生の妊娠は、主婦の高校入学と順序が逆になっただけの話で、処分の対象にする問題ではない。教委としては、各校に対して、"不純異性交遊"や妊娠を理由に生徒を処分しないよう指導している」。

進路変更しては、と教頭がすすめる先の、府立通信高校ではどうか。校長はいう。「全日制高校から、そうした生徒について相談されることがあるが、もとの学校にまだ籍がある場合は、入学を断っている。学習条件のいい全日制に通った方が、はるかに単位もとやすく、楽に卒業できるのだから」。生徒と向きあった現場の教師が、「妊娠」の事実を前に度々を失い、退学させるのに必死になっていることがわかる。別の府立高校で、これとそっくりの状況で自主退学した少女にも会ったが、彼女も現在の夫との間にどうしても子供が欲しいと出産を選んだ、と説明してから、「妊娠したら退学だ」と何回も言われていたので、退学届を出した。それが当たりまえだと思っていたから」と言った。出産した少女は、「学習意欲を失う」「家庭に入りたがる」という人もあるようだが、こうした一般論を頭から信じ込んで退学処分を正当化するとすれば、それはまちがっている。長期的にみて、子育てに余裕が出てくれば、働き出たり、勉強を続けたい、と思うのは自然なことだ。現に、この少女からはその後電話がかかってきた。「通信教育で高卒の資格をとる方法もあるといってたけど、それ、どうするのですか。私にもできるかなあ」。

はじめ私は、少女の「性」について考えるなら、彼女たちの中絶の権利についても主張しなければならないだろう、

と思つていた。ちょうど昨年は、優生保護法の経済条項削除の問題が浮上して、増えている少女の中絶が「安易に中絶している」と改正論者の非難のまゝになっていたからだ。そんなものじゃ中絶はなくならない、自分たち大人が寄つてたかつて少女の中絶の原因を作つておきながら何を言うか、と腹立たしく思う気持ちには、今も変わらない。けれど、「権利」の問題については、はじめとは少し違うことを考えている。

なぜなら、いま、未成年の中絶の権利は、守られすぎるほど守られているのが実情だからだ。それは、彼女たちの生む権利が、まったく守られていないことと、コインの裏表みたいなものである。生む権利すら守られず、ほぼ選択の余地なく中絶していく少女たちの現状があるなかで、中絶の権利を主張することは意味がないばかりでなく、むしろマイナスの要素が大きいのではないだろうか。権利を主張することは、外からの権利に対する侵害があつて初めて意味を持つ。だとすれば、少女の性について考える場合、生むことを強いられた歴史を持つ大人の女とは、少し違う形で問題をたてる必要がある、と思うようになった。

少女は十六歳になると、法的には結婚することさえできる。ところが、いま高校では「妊娠（及び、それに伴う出産・中絶）は「罪悪」ではなく、そのことで教育を受ける資格を失う理由はどこにもない」という、ごく当たりまえのこと

さえ知らされないまま、退学させられている少女が少なくない。また、これよりもっと悲しく思われるのは、担当の教師がたまたま教育に自信を持ち、「生徒に卒業の資格を与えた」と考える場合、ひそかに中絶をすすめているとわかつたことだ。「生徒が生みたい、といつても、まず中絶をすすめる」と言い切る教師にも、何人か会つた。

性経験のあることがわかれば、ただちに退学、という高校が多いなかで、生徒をかばおうとする善意はわからないではないが、私には、納得できない解決方法である。教師が生徒に中絶をすすめるとすれば、本人が意識するしないにかかわらず、それは退学処分という強制力を背景としたものとなつてしまい、親が愚痴や嘆きを込め、子供に中絶をすすめることとは大きく意味が異なる。かりに、成人した働く女性が妊娠し、出産の意志をもつとき、雇用者が「子供を生んだのでは仕事ができにくくなる。あなたもつらいだろうから、中絶してはどうか」などと言つたら、どうなるか。ところが、いま、善意の教師が女生徒に中絶をすすめる論理は、これとそっくりのように見える。こんな論理が、生徒に対して「教育」の名のもとに語られるとき、なぜ、許されるのか。私にはわからない。大人だから、というただそれだけの理由で、少女に對し「あなたには、生む資格がない」と、なぜ、言い切れるのだろうか。

高校生、未成年の出産をことさらに賞賛しようとは思わない。推奨するつもりも、もとよりない。ただ、周りの大人たちが「出産＝退学」か「中絶＝在学」かといった二者択一の論理を乗り越えない限り、少女たちは結局、どちらかを選ばされてしまう。そして、どちらを選んだとしても、女であるために理不尽な後ろめたさを背負わされ、挫折感を持ちながら、その後の長い人生を歩き始めなければならなくなる事情は変わらない。いいかえれば、大人たちが、少女自身の意志に支えられた「性」や出産を、いまよりもっとおおらかに受けとめ、祝福する柔らかな心を持つことができれば、それは少女の多様な生き方を認めることにつながり、彼女たちを囲む壁の一角を突き崩すことにつながるのではないかと思う。

いま、大人の女性たちの世界では、性差別の撤廃をめぐつて議論が高まり、女の経済的・精神的な自立の思想が広まっている。結婚して良き妻になり、母になるだけでなく、女にもさまざまな生き方があり得、また、あり得なければならぬのだ、と信じて、困難を切り開きながら暮らしている素敵な女もたくさんいる。私自身の少女期は、少なくとも主観的には決して楽しいものではなく、あんな憂鬱な時代は二度と繰り返したくない、と今でも思ってしまうのだけれど、あの頃、こんな女たちに出会っていたら、ずいぶん力づけられたので

はないか、と思うことがよくある。

少女を取材していて気になったことの第二は、大人の女が積みあげてきたせっかくの知識と思想とが、彼女たちの世代にまったく伝わっていない、ということだった。進学、就職、異性とかかわりなどの人生の岐路にさしかかり、途方に暮れている少女たちほど、こうしたフェミニズムの財産を必要とする女はいない。にもかかわらず、彼女たちは本当に必要な情報を与えられないまま、孤立無援のなかで無器用な失敗を繰り返している。

たとえば、現場の先生方ならすでによく御存知のことと思うが、中高生くらいの少女たちの「女」としての意識は、いま、驚くほど画一的で、しかも保守的だ。将来、どんな暮らしをしたいかと問われると、彼女たちの多くが、迷うことなく「夫に尽くす妻になりたい」「かわいい奥さんになりたい」と答え、理想の夫は「頼れる男性」だという。こうした女としての自意識の弱さは、彼女たちが生身の生活者として生き始めたとき、その人生に影を落とすのではないだろうか。とくに、性の問題に直面したときは、はつきりとマイナスの形をとって、その体にはね返ってしまう。そのことを、中絶経験のある少女に何人か会い、彼女たちが望まない妊娠にいたる経過をたどることで強く感じた。避妊知識がない、という技術的な原因も、もちろんあるだろう。けれど、彼女たちの

悲しい経験は、それよりもむしろ、相手の男性とのあいだの人間関係のいびつさに深く根ざしている、と思わずにいられないことが、あまりにも多かったからだ。

こうした少女たちは、いずれも「尽くす女」であり「頼る女」であるために、避妊について、対等な立場で、パートナーと話しあうことができていない。妊娠の不安を感じているのに、避妊してほしい、と主張していない。また、望まないセックスを拒否することも、していない。一方、相手の少年も、「尽くされる」ことを当然と受けとめ、本質的なところで、相手の女性の体に対する配慮をしていない。そして、中絶費用を調達することが「男の役割」であり、「男の責任」であると主張する。さらに、しんどい、と思えることは、少女自身がまた、こうした少年の主張を、ある意味で「当然」と受けとめていることだ。男と女とが自然な当為として共有しているいびつな幻想とでも呼んだらいいのだろうか——これを、なんとしても打ち壊したい。少女たちと会うなかで、そう思わずにはいられなかった。

最後に、私の力が及ばなくて記事にできず、そのために、私にとつての「宿題」であり続けている少女のことについて、少しふれておきたい。「家族全員、きらいやねん。特に親には恨みがある」と顔をゆがめ、激しい感情をぶつける彼女には、夜十時近い補導センターで初めて会った。中学三年

生だが、三年生になってからほとんど学校へ行っていない。この年代の少女としては、多すぎる、と思わざるを得ない性経験があり、そのなかには知らされた者が言葉を失うような、荒涼としたものも含まれていた。

親のこと、恋人のこと、学校のこと——補導されておびえ、うわごとのように話し続ける彼女の顔を見ながら、ふっと、この子はどんな女として成長していくのだろうか、と思い、「将来、何になりたい」と聞いてみた。その時の答えに、ガーンと頭をやられたのだ。「正社員になりたい」と……。同居している少年と、将来について話しあうことがある。どうやって暮らしていこうかと相談したら、中卒では正社員にならないから、十八になったら正社員になれるように、今からがんばればいい、と言われた、という。

学校も、家庭も、そして企業社会も、彼女たちにとって、苛酷で理不尽なものだし、将来もそうあり続けるだろう。にもかかわらず、これらに対して、あえて「正社員になりたい」という少女の言葉の意味を、せめて、しっかりと受けとめたいと私は思う。いまの社会を、彼女たちが「正社員」として参加するに値するものに変えていくよう、少しずつでも努力を重ねること——そのことが、とうの昔に大人になった私が、少女たちのかなしみを分かちあうことにつながる、ただひとつの道ではないか、と思っている。

（新聞記者）

☆ 少年・少女たち ☆

## 共働き家庭と子ども

篠 崎 正 美

一、保育所の「連絡帳」に見える子どもと家庭

### 〈その一、三歳の男の子〉

。四月十日、担任から「ケン君は椅子に腰かけた時、あいざつの時、体操の時、とても姿勢が悪く、ダラーツとなります。体操は言われると一、二カ所手足を動かすだけでフラつくことが多いので、どうしてなのか、どうしたらよいかを職員会議で話しあいました。疲れ、興味が持てない、指導方法がまずい、色々検討しましたが、結局ものごとや周囲の人たち、自分自身に確かさを持たない子にはケン君に限らずこの状態が多いのではないかと、ケン君もそう考えるべきではないかという意見にたどりつきました。お家ではいかがでしょうか。またこの意見に対してどう思われるでしょうか。二歳児の頃から気になっていたのも、色々考え取り組んでいたのですが――」。

。四月十一日 家庭から「主人とも話し合って考えたのですが、家では感じていませんでした。ただ甘いといばかりで、常に私の姿ばかり探し私にくっついていたいばかりです。現実問題として私が一人バタバタしていますので仲々相手が出来ません。はばかり屋で人前ではフラフラ指をくわえたり、わざと私の視線をさけたり。何事にも挑戦する姉（年長児）と比べて気の小さい所もあり、石橋をたたく方です。

新しい家でも一カ月もウンチをトイレでしなかったし。専ら自動車やブロックで遊び、元気がいいと一人でドロ遊び。姉は夜、布団に入ってから好んで私の話を聞きますが、ケン  
は絵本、それも虫や車、動物など科学的なものを物語より好みます。姉とちがってとらえ所がないという気はします。職場の友人に聞いた話も、やはり男の子の方が甘えん坊で泣き虫というんですが――。私も上の子が女でしっかりしてると下の男の子はそんなもんかな、と思ってました。ケンがよく「お母さんいーつも怒ってばかり!」と言います。私のヒタイを見て「またココが怒ってる」と言います。表情をよく見てるんですね。姉の時にはなかったことです。色々考えると、一歳半で引越し、三歳でまた引越し、加えて私の方がイライラとストレスのたまること(家庭、仕事、新しい職場、新しい隣近所)も多く、ゆとりがなかったのも事実です。思いつくままに書きましたが、それ程心配すべきことかな――  
と思いつつも気にはなります。ケンが生まれての三年は、私にとって一番忙しかったのも事実です。関係あるのかな――?

。四月十二日 所長(筆者)より 「お忙しい中にお返事  
ありがとうございます。体操、姿勢、集団の中でフラついて集中しない等々は、外面的結果であって、心理的に充足せず、よりどころが不確かなため出て来ているのではないかと

話し合ったのでした。性格、環境変化も相乗しているとは思いますが、ここはやはり「重要な他者」である両親との接触を多くされ、絶対的信頼関係(エリクソン)を育てていかれるべきと思います。ケン君が情緒的なものでなく、モノの方に興味が偏りがちなのは、生来科学的な好みもあるのでしょうが、あまりに情緒を表出するとそれが満たされないで傷つくことのおそれから、幾らか閉じこめることで無意識に自分を防衛しているように思えてなりません。傷つきの水準が低くなっていると思うのです。同じことが、外向的で活動的な子どもの場合、攻撃的な暴れん坊や過活動となつて出て来るように思います。子どもの持つて生まれたエネルギーを、繊細に集中・持続する方向と、活動的対他的に活かしきって発散する方向とバランスがとれたら! 難しいですがお互いに話しあい、考えて取り組みたいですね。

。四月十三日 家庭より 「最後の部分は思い当ることも  
ママあります。主人とも気をつけてみます」。

### 〈その二、五歳の女の子〉

。十月 母親から 「この頃カツ子から、「私は本当のお母さんになる。」と言われてしまいました。「お母さんは本当のお母さんじゃない、学校の先生!」と言うのです。「本当のお母さんでどんなお母さん?」と聞くと、「ウチにいて子どもの世話をする人。」と言います。つまり専業主婦のお母さ

なんです。今年は一年を担任してクラスの子が問題を起こし、二カ月間そのことで駆けずり回っています。解決に至らず、この頃は心身共にクタクタになってきました。つい大声でカツ子を叱ることが多くなり、その私とそっくりの声でカツ子が二歳の弟を叱っています。ゾツとしました。先日の土曜の午後、科の研究会があり、近くにいるオバアチャンちも生憎都合が悪かったので、「お利巧さんにする」固い約束で連れて行ったのですが、途中から二人であばれまわり……やっぱりムリだったと思います。『本当のお母さんになる』と言われたのは初めてではありません。カツ子に欲求不満をひどく強いているのではないかと考えこみます。もっとアタカミのある接し方をしなければと思うのですが」。

カツちゃんの家は、営業マンの父親を含めて四人の核家族。中学の先生である母親が八時に学校に着くために、朝は毎日キツチリ七時半に登所。朝が早いので夜八時に寝かせる生活のリズムをとっても大事にしておられる。休日を除けば、母子の接する家族時間は正味三時間半ぐらいだろう。営業マンの父親は朝夕の労働時間は通勤もあってもっときびしい。休日は妻とスレ違いだ、子ども二人を休ませてよく父子一緒に過ごしておられる。お二人とも現状の中では精一杯子どもを大事にしておられるように思う。それだけに「本当のお母さん」は大ショックだったのだろう。

## 二、「共働きが子どもに与える影響」を考える枠組

(一) 共働きが増えている。一九六〇年代以来の世界的趨勢である。わが国でも、「日本の特性」かと思われた年齢階梯別婦人雇用の「M字型」曲線の「谷」の部分が、第二次石油危機以来徐々に上昇しつつある。「子育て」が終わってから働き始める母親が増え続けているのはもちろんだが、乳幼児を生み育てながら働き続ける妻Ⅱ母が増えて来た、ということである。低成長経済下での家計圧力、高齢化社会への備え、パートを中心として女性労働全般への需要増加などに加え、女性の側の労働意欲・能力の向上が互いに関連しあって、今後働く妻Ⅱ母は全ての年齢階層において増加すると予想される。論議中の「男女雇用平等法案」や国連の「差別撤廃条約」の批准等が現実化すれば、今後五年から十年の間に「共働き」現象はさらに劇的に増加するに違いない。

(二) 「夫が職業役割を持つている他に妻が家庭外で雇用される」と言う意味での「共働き」が、子どもの発達にどのような影響を及ぼすのかについての客観的研究は、わが国でも徐々に取り組まれつつはあるがまとまった成果には至っていない。アメリカでは一九六〇年代後半から七〇年代にかけてかなりの研究が蓄積されており、これをラディス・ホフマンが一九七四年と一九七九年に「まとめ」の論評を行っている。



それを手がかりとし、かつまた、わが国の婦人労働の歴史や母親役割への社会・文化的価値規範の異なりをも念頭におきながら、問題の整理と若干の方向づけをしたいと思う。

筆者は現在、一日の大半を保育所での仕事に費しながら「共働き家族と子どもの発達」を考えている。はじめに二つの事例をあげたのは決してアト・ランダムにでもなく、また共働き家庭の子どものネガティブな面を強調したいがためではない。実際、現状において（女性への社会的な役割期待、労働組織、家庭内役割分担、共働きを支えるべき社会的母性としての保育所保育内容の不備）は、夫婦の相当覚悟ある協力態勢と柔軟な役割遂行、「わが家」意識のみならず親族・友人関係での連帯、突発的な危機場面に即しての子ども主体の問題解決、こういったことをやりとおせなければ、夫婦の仕事もやりとげ、自立した子どもも育てるということは大変に難しい、というのが共働きのハシクレである筆者自身の感想である。要するに状況に流されるままでは子どもにとってネガティブでないわけではないと思えるきびしさである。

しかし現実には共働きの親たちは、事例にも書いたように、自省しつつ、子どもを見やりつつ、何を為すべきで、何を為さざるべきか悩みつつも状況に対抗しようとしている。先に掲げた事例も、次に示すような「共働きが子どもに与える影響をさぐる『研究仮説』として」ホフマンがあげた枠組に、

かなり端的にかかわっていることが理解いただけると思うし、そのように読み返していただきたいと思う。

〈仮説の①〉母親が雇用されることで、母親自身の「役割モデル」、父親としての「役割モデル」がどう変わるか。子どもは主に両親から性別役割行動を学習するが、働く母親によって行われる役割が、無職の母親のそれとは異なる程度に応じて、子どもは女性役割への異なった観念を獲得するのではないか。

これについてホフマンは諸研究をまとめた結果、子どもの年齢や発達段階、その家庭の社会階級、フル・タイム雇用かパート・タイムか、母親の職種やそれへの満足感によって、またその組み合わせいかんによって、共働きの効果はかなり異なることを見出している。諸研究がかなり一致しているのは、子どもが思春期以降の場合、とりわけ女の子で、母親が自らの職業に一体感を持っている場合に子どもは新しい役割モデルに肯定的で、これを自らも受入れる傾向が強い。しかし乳幼児期や学童期については、共働き自体がまだ一般化していなかったこともあって、効果は明らかではない。

一般にモデリング理論では、モデルへの同一化は情緒的結びつきと、モデルへの社会的評価が高い時に最大となることが知られているが、このことよりすれば個別共働き家族内における母子の情緒的結合、父の支持、地域社会等外部社会に

おける母への評価が、モデルとしての母親への同一化を強く促すことが推測される。しかし、それらが全て、あるいは大部分欠ければ、事例に見るように否定的反応も出てくる可能性も大きい。ホフマンのまとめではさらに、下層階級で母親がフル・タイムで働く家庭は母親の家計への安定的貢献度が評価されるからであろうが、子どもの役割評価は高い。が他方、役割モデルとしての父親への否定的評価が生じる傾向もある。経済的理由で母親が働くにしても、夫婦が力を合わせて家計を守るのは当然だという家族内規範、社会的規範を確立しなければ、共働きは家族内葛藤、息子の性役割観の歪みをもたらしかねないであろう。

へ仮説の② 母親の情緒的状态はかの女が雇用されている状態によって影響される。そしてこの情緒的状态は子どもとかの女の相互作用に影響を与える

私共働く母親としての経験的実感からしても、この仮説がプラス・マイナス両面で支持しうることは事実であろう。先の事例では、母親の二重役割から来るイライラやゆとりなさ、子どもの不適応や母親否定の一因であることは明らかである。この種のマイナス面の影響がかなり多いことは事実であるうし、また批判も強いが、他面では、職業がもたらす達成感や満足感が親としての有能さと相關関係にあることも見落とされ過少評価されてはならないだろう。

ある研究では、満足している無職の母親、同じく有職の母親、満足していない有職の母親、同じく無職の母親の順に、子どもへのかかわり方が不適切になっているとの結果が示されている。考えてみれば、母親が働いていようとまいと、子どもたちがもつ発達上の要求それ自体は変わらない筈である。現代女性の、母親役割への存在論的なアイデンティティが何によって形成され、働くこと・働かないことがそれにどうかわるのかをもう一度問い直した方がよさそうである。

へ仮説の③ 働く母親は無職の母親とは違った育児のやり方をするのではないか、その違いは単に情緒的状态の違いからだけでなくおかれている状況がそうさせるのである

違ったやり方とは、父親の育児参加を促すことと、自立のしつけや家事責任を幼い頃からもたせることをホフマンはとりあげている。子どもは、しつけ中心の母親との相互作用より遊び行動中心の父親との接触に新奇な刺激を見出して喜び、父親との相互作用が欠如している子どもたちは（他の条件が同じであれば）、そうでない子どもより知的達成や動機づけが低いことも示されている。こう見ると育児は本来、母親が全責任でカバーすべきことではない。しかし、わが国では祖父母との同居で共働きが成立しているケースも多いことや、役割分業観が根強いこともあって、この仮説部分はあまり一般的な支持を得にくい現状であろう。

二番目の自立や家事責任のしつけについても、個別経験ではその方向の家庭も見出されようが、待井和江氏らの調査ではむしろ家事責任などのきちんとした訓練・しつけが専業主婦家庭より、共働き家庭の方で低調であることが報告されている。これは働く母親の側に、子どもを犠牲にしているという罪の意識からの過度の補償行為があるのではないか。

へ仮説の④ 働く母親は、ふつう家を不在にするために、子どもに対してより少ない、そして不適切な監護しか出来ないのではないか

この仮説は、共働きが少年非行の主な原因ではないかという根強い見方ともかかわっている。ホフマンのまとめでは、アメリカでの場合は中間階級の働く母親の子どもに、やや非行との相関性が見られるとしている。わが国では周知のように総理府の「非行原因に関する総合的調査」で、非行と共働きの間には相関が見られないというデータが示されて以来、特にマスコミでこの種の解釈はやや影をひそめた感はあるが、社会一般にはまだ根強い意識として残されている。何故わが国では相関がなく、アメリカでそれも中間階級の共働きで非行と相関するのか、今後考える必要のある問題であろう。へ仮説の⑤ 働く母親はふだん不在であるため、子どもは不在を拒否と感じやすいのではないか。そのため子どもは情緒的にも認知的にも満足が剝奪されるのではないか

この仮説はとりわけ最近集中的に研究関心が寄せられている。事例でケン君をあげた理由である。特にアメリカでは、「中間階級の共働きの調査で、母親の雇用は息子のより低い認知的達成およびより問題のある適応と関連する」という内容のデータが、それほど極端にはないが無視できない統計値の範囲でいくつもとり出されたからだという。わが国で共働きが論じられる時、認知的達成や子どもの性別による影響の違いはあまり問題とされないが、事実はどうなのかを今後関心もって追及する必要がある問題領域である。

東洋、R・D・ヘスらの『母親の態度・行動と子どもの知的発達』によると、幼児の認知的社会化を規定する諸要因のひとつとして、文化パタンがあげられている。「問題中心、自立促進の文化パタン」が有効なアメリカに比べ、日本では「豊かなことばかけを行うがそれは子どもにも周辺感情や状況を重視させ、問題の間接的・洞察的理解に向かわせるパタン」をとる母親のあり方が知的発達に有効だと示される。また、どの国のどの階層でも知的達成の前提条件は子どもの情緒的安定であることも。現状における共働きの母親の忙しさや役割葛藤から来る情緒的状态は、こうした日本的な賢い育児とどれ程へだたるだろうか。この辺りも留意すべきところであろう。

(福岡県朝倉町ひろにわ保育所所長)



☆ 少年・少女たち ☆

# メルヘンはどこへ

山 花 郁 子



## 〈メルヘンの灯〉

メルヘン、メルヘン。なんとも耳ざわりのよい、心やすらぐことばである。

グリム、アンデルセンの童話は、いまも子どもたちによみつがれ、絵空事でない日々のくらしに夢をおくりとどけてくれる。

おだやかな気分で、ゆったりとくつろげるメルヘンの世界は、幼い日々の追憶の物語であらうか。いや、本音とたてまえの人生を、やわらかな心でつむいでくれるメルヘンの世界は、つねに遠くて近きところにあり、生きることの不思議さに光をあてながら、人間のくらしをよみがえらせてくれるにちがいない。

たとえば、おなじみのグリム童話『いばら姫』の場面をおもいだしてみよう。

主人公が、百年の眠りから目覚める瞬間の描写は、静から動への世界をきびきびと描き出し、途方もなく長い時の経過を無視して、現実の世界をあざやかに躍動させる。

うそもまこともつつみこんでよみがえらせる世界は、いつも新鮮なエネルギーにみちみちているのである。

メルヘンの世界は、だれかが用意してくれる住み心地の良いたところにあるのではなくて、自ら求めて心をゆだねるきわめて創造的な世界に存在するはずだ。

疲れた大人たちは、いつのまにかメルヘンのありかを見失ってしまい、あるいは見つけようもない遠いところにおきざりにしたまま、現実の生活に喘いではないだろうか。

すこやかな子どもの成長をねがうならば、いま大人の心にとめるメルヘンの灯を消してはならないはずである。

### へわたしのふるさとメルヘン

今年ほど春の訪れがぐずついた年はなかったのではあるまいか。昨年の冬の季節から今年の三月まで、思いがけぬほどたくさん雪に見舞われ、「美しい」という感嘆詞さえもとじこめて、東京の土は何度も何度も雪に埋もれた。

雪に慣れぬ人や車の事故があいつぎ、雪かきの重労働も、我が身にふりかかってから、はじめて都会の人々は、きびしい雪国のくらしにおもいはせることができたのである。

しかし、雪になぶられたような今年の冬も、確実に訪れた人生の一つの季節であり、人々はそこにたくさん足あとをつけてあるいてきた。あるいは、決してつてくたなかった足あともあるかもしれない。それでも、そうした足あととも消し去って、あたらしい真白なキャンバスを用意してくれる雪の風景は、人間の可能性に対するさまざまなイメージをかきたててくれるのである。

いいこと、わるいこと、うれしいこと、かなしいこと。

この世に生まれて、私はなんとたくさんの足あとをつけてきたことか。

私のはじめて雪の道に自分でつけた足あとを意識した日、それは私にとってのメルヘンの原点だったようにおもえてならない。

一九三六年、二月二十六日――。いわゆる、二・二六事件で知られるこの日、東京は雪に埋もれて朝を迎えた。そして歴史上に記されることになるこの叛乱の日に、私の弟も、はじめてこの世に生を受けた。

本所区業平橋一丁目六番地。路地裏につづく長屋の一角から、一面の銀世界にピョンピョンとおどり出てきた当時五歳の女の子は、母親の手編みの真赤なフードつきのオーバーに身をくるんで、おろしたての長靴のはきごころをなんどもなんども足ぶみしてたしかめてから歩きだした。

「赤ずきんちゃんを連れていくみたいだね」

白い歯をみせて笑う母の妹にあたるおばもまだ若かった。

「男の赤ちゃんかな、女の赤ちゃんかな」

はずんだ声でくりかえすおばのことはききながして、私はひたすら母の顔だけを目あてに雪の道をふみしめた。

スポッ、スポッと、小さな足あとをけんめいにつけて歩いたあの日の記憶はいまもあざやかによみがえる。

弟が生まれた賛育院につづく道は、やさしい母の笑顔につ

つまれて、いまでも、どこまでもどこまでも、はてしなくつづいている。

そのとき、小さな女の子にとって、たしかだったことは、自分が歩く足あとがつくということであった。余分な出来事は、いっさいはぶいて、ひたすら白い道を歩くことが、自分の幸せに通じる道だったのである。そして、それはいつも私にとって、白と赤の二色で描かれた童画の世界に通じる道である。

白い雪に鮮血を染めた、あの国をゆるがした二・二六事件とは全く無縁の風景でありながら、しかしこの日の出来事は幼い子どもの意識の底に、人生の表裏・明暗、くつきりと刻みつけてくれたのかもしれないと、大人になった私はおもってみるのだ。

メルヘンとは、不思議にみちみちた、ありえない世界ではなく、幸せを追究することができる希望の光の中にある……と、私は思う。

私にとってのメルヘンとは、生きることのよろこびが、あたらしい発見につながる道をさし示してくれる、いわば現実と空想の往復切符をつかいこなせる境界に、いつも存在している。

#### 「子どもと大人の心をつなぐ、メルヘンの世界」

現実と空想の世界を往復する「おはなし券」を、まだ一人では手に入れられない子どもたちには、大人が手助けしてあげなければならない。

幼児を対象にした読書会で、私はよくどの子にもよろこばれるロシア民話の絵本「てぶくろ」を読んでもあげる。

ストーリーは、単純明快。ここでも静と動、ファンタジイの入口と出口がたくみに演出されていて見事な絵本だ。

おじいさんが雪道におとした手袋に、つぎつぎと七匹の動物たちが、ぎゅうぎゅうづめに入りこんで、もうこれ以上はおさまらぬぎりぎりのところで、おとしものに気づいたおじいさんとおともの犬があらわれる。と、パツとはじけるように動物たちはとび散って、森のファンタジイの幕がおきる。

「ここであらすことにするわ」と、小さなねずみから、大きな熊まで、てぶくろのすみかにおさまっていく過程のたのしさ。ラチョフの描く冬のウクライナ地方の風景の中に、すっぽりつまれて、子どもたちの夢はぐんぐんふくらんでいく。絵本では、七匹の動物が登場するが、私は自分で用意した毛糸の手袋にはさみをいれて、窓をつくり、その中に二十四以上のこれも毛糸で編んだ手づくりの動物たちをぎゅうぎゅうづめにしてひとところに住まわせている。

いつでもおまけの大好きな子どもたちにとって、これはと

びきりうれしい「おはなし会」のおまけのようである、

私は、子どもたちといっしょに、それぞれ物語の主人公である動物たちを一匹一匹とり出しては、その動物の表情をたしかめて遊ぶ。

比較感のない子どもにとって、『てぶくろ』の世界は、すっぱり入りこめる空想の世界であり、また私の手づくりの動物たちは、あたらしい夢をふくらませながら、現実の時間の中で、たのしさをつくり出していける創造の世界である。

こうして子どもたちは、たっぷりたのしい時間を共有しながら、ひとりひとりの夢をひろげ、現実の生活をきりひらいていくエネルギーにつなげていくにちがいないと私は信じている。そういうめあてがあるから、私は自分の仕事がたのしい。

近頃、文部省からへいじめっ子対策の手引書なるものがつくられて、金220円也で配布されているというが、ハウツウ対策に首っぴきで解決をはかるまえに、あらためて手塩にかける子育ての感覚をとらえなおす必要があるのではないか。

また、現在少女雑誌のセックス情報の氾濫は目にあまるが、これとても「有害図書」のレッテルを貼り、販売者を規制するまえに、教育現場での性教育のあり方など、真剣に語りあわねばならぬことが、山積している。

対策、規制ということばは、即、管理・統制ということば

と結びついて、あたたかみのある人間関係のイメージは生まれない。子どもたちがほんとうに知りたいことは何なのか、真剣に考えてむかいあう人間教育は期待できそうにない。

人が人になるとはどういうことなのか、男女の愛が結ばれて、あたらしい生命が誕生するということのすばらしさにについて語るには、短兵急な型どおりの「性教育」ではむずかしい。たとえば、生理を扱ったスライド「すてきな女の子」をみた小学校五年生の女の子は、「男に生まれればよかった」とみずからすてきな女の子になることを放棄する。

——背が高い人、体の大きい人の方が早く生理になるときいて、私も後ろから三番だから、はやく生理になるかな。やだな。それにおっぱいが大きくなったらいやだと思う。赤ちゃんなんか粉ミルクでいいと思う。それに三日から七日もあるなんて、もうやだよな。生理なんかなくてもいい。スライドをみてからも、やっぱり男の方がいいとおもった——

また、これも性教育のプログラムに組まれた「人間らしい体つき」というスライドをみた、同じく五年生の女の子は、大人になることを拒否しようとする。

——ふつう、はたちで人間は、大人ということですが、はたちで大人にならない人もいます。

わたしは、働いてお金をもらうなんてことが大きらいなので、四十歳ぐらいで大人といえるようになればいいと思いま



す。女の子は大人になって赤んぼうをお腹にやどしますが、それだっていやです。

自分のとった栄養を赤んぼうにあげるなんて、まっぴらなので、わたしは大人になりたくありません——と。

五年生の女の子に、子どもを育てるといふ具体的なイメージはうかばないにせよ、我が子に乳をふくませる母親像とも無縁でありえるのであろうか。

「赤ちゃんなんか粉ミルクでいい」「自分の栄養をあげるなんてまっぴら」といいきる女の子のことに、あらためて、現代の親子関係と子育ての貧困が浮き彫りにされるようだ。

いまかけがえのない少女期をむかえている女の子たちの姿がいとおしくて、私は生理をむかえるやはり五年生の少女を主人公にして、『みどりの風のように』という作品をまとめてみた。

ときどき作品とむかいあってくれた少女たちの感想をきかしてもちろことがあがあるが、なかでも主人公と同じ名前の少女は、作品へのかかわりをぐっと深めて「私もみどりちゃんとおんなじみどりで。だから私もみどりの風のようにさわやかに生きたいです」と、うれしいたよりをよせてくれる。いずれの場合も、子どもたちは自分といちばんかかわりの深いところから興味と関心をよせるようになる。

教育とは、こうしたひとりひとりの表情をよみるところ

から出発する。

大人と子どもの心をつなぐメルヘンの世界は、あいむかいあう、あたたかいまなぎし、ことばかけからひろがり深まっていくな。

『二年間の休暇』『海底二万哩』の作品で知られるフランスの作家ジュール・ヴェルヌは、十一歳のときに、初恋の従妹に珊瑚の首飾りを捧げたくて、見習水夫になりすまし、密航をくわだてている。計画は失敗に終わったのであるが、彼は父に「これからはもう夢の中でしか旅をしない」と謝罪したそうである。イラストや写真やマンガなどで、セックスの体位や技術など……いかがわしい情報をさらすローティーン雑誌をみせられると、私はこのヴェルヌの壮大なロマンの世界に、少年少女たちをさそいこんでやりたいとおもうのである。

——メルヘンはどこへ——。

夢の中で旅することのすばらしさを忘れてしまった大人も多いのではなからうか。

文学的ヒューマニズム・メルヘンの世界を見失うことなく少年少女たちに、生きることのすばらしさをつたええられるような生活したいとねがう。しなければ……と。

(調布市西部公民館長)



☆ 少年・少女たち ☆

# 女子高生に女性史を 語るなかで

加 美 芳 子



私たちの生きてきた姿を歴史授業の中でとらえる——これはもう長いこと私が追求してきたことであった。それを何とかしてもやらなくてはと強く感じるようになったのは、現在私が目の前にしている女子高校という環境の中で学んでいる生徒の実態と考え方を、危機感とともに知ってからである。

私の勤務する学校は埼玉の県立高校の中でもかなり特殊な性格をもった学校である。この県の高等学校のあり方は、戦後教育改革の不徹底さと、その後の運動の立ちおくれが原因で矛盾にみちたものとなっている。旧制中学・高女がそのまま男女別学校として残され、これが「エリート校」化しているのである。生徒たちはみな「偏差値」が高く、中学の時まではトップクラスの優等生、リーダーとして活躍してきたものばかりと言ってよい。したがって学校の中には暴力もなければ非行も見えない。授業に対する意欲と要求は高く、クラブ活動はさかんで、生徒会もH・Rも生徒の手でほとんど運営されてしまっている、という学校なのである。

三年前にこの学校に転勤してきたとき、世の中には何と恵まれた学校があることよとびつくりし、世の不公平をつくづくと感じたものであった。生き生きと活動し学習している生徒の姿を眺めて、ああこれがほんとうの学校だと思うと同時に、こんな学校がほんの少数存在するためにどれだけの犠牲が払われているのだろうかという思いと、自分がそんな学校の

教師であることへのうしろめたさと、実に複雑な気持ちにさせられたものであった。

しかし間もなく、そんな理想の学校に近いものなど、現代の教育状況の中で存在するはずもなく、この学校の生徒たちもさまざまな矛盾にゆすぶられ、苦しんでいるのだということが見えてくる。その原因の大きなものの一つが、生徒たちが女であること、この学校が女子校であることに起因しているように思われてきたのである。

彼女たちに聞いてみると、ほとんどが女子校に入学してきたことに満足し、この学校を気に入っている。つまり、彼女たちは青春期の少女たちが当然もつべき異性への関心や思慕を学校生活の中で殺し、そのエネルギーを受験勉強へと自分をかりたてる方向で使っている非人間的な姿であるということだ。しかしそうきめつけるだけではすまされない何かがある。彼女たちの内部に渦まいているような気がするのである。以前彼女たちに女子高をどう思うかというところで書かせたとき、大半の生徒が男子に気がねせず自由に活動できる。個性が伸ばせるから女子高がよいと答えたのであるが、具体的に「生徒会長や学校祭実行委員長を女子がやっているのが感動だった」とか、「男子がいると女子は自然にアシスタント的役割をわりふられてしまう」とのべている生徒が実に多かったのが印象的であった。彼女たちの中学までしかない乏しい人生

経験の中ですら、性役割分業や男が主で女は従という差別構造がすっかりできあがっていたことを考えさせられる。彼女たちは女子校へきたおかげで自分たちは何でも——大工仕事も化学の実験も組織の運営も——男子の手を借りずにやれるのだと信じている。中学のときまでの差別体験、“できる生徒”としてのエリート意識、そういったものが女子校という世界で増幅されてこのような考え方がうまれてくるのである。

しかし彼女たちはその考え方がとても面白い基盤の上に立っていること、何でも自分たちでやれるということは男の子がいる世界でも可能でなければ意味がないのだということが自覚できない。男の子たちと接する機会といえば、学校の外での個人的レベルでのつきあい、あるいは「交歓会」と称して隣の男子校とホームルーム単位で交流するくらいである。そんなとき双方ともほんとうの姿を見せ合うということとは不可能で、おずおずとよそゆきの姿で接しているのである。お互いの欠点を見せつけられてがっかりしたり、バカにされて口惜しがったりするなかで育つ友情というものはない。彼女たちの異性観は、観念的で一面的にならざるを得ない。極端に美化・理想化してとらえるか、逆に蔑視又は軽視するかという具合である（異性観が歪むのは男子校も同じこと、先日「You」というTV番組で彼らが、自分たちは女の

子は小中学のときしか知らないで、そのイメージから離れられず“ロリコン”になる、と言っていたのがおかしかった。

女子生徒の場合、その男性観や自立のとりえ方が直接進路や生き方の問題とかかわってくるわけである。私たちは何でも自分たちでできるのだ、男になんか負けるものかという“つつぱり”がある意味ではバネとなっていることは事実である。それは大学進学への熱意という形で現れてくる。このことを私は、この学校に赴任して最初に担任した三年生のクラスの生徒たちと接して痛感させられたのであった。

このクラスは文科系コースで、短大希望者が二名いるほかは全員四年制大学希望というクラスであった。私の担当教科である世界史はほぼ全員が受験科目にしていることから、彼女らの授業への意欲は大変なもので、教室のドアを開けると目を光らせて待ち構えているという感じでこちらがたじろぐほどであった。英語も同様だったらしい。ところが数学の先生に聞くと、何となく消極的で数学ぎらいの子が多いですねという。数学が苦手だから文系のクラスに來たという理由はあるにしろ、受験に関係ある科目だけ一生懸命やるというのは、学校が予備校と同じ役割しか果たしていないことになる。しかし口先でたてまえを言ったところで彼女たちへの説得力はない。そこで彼女たち自身がどのような状況にあるのか、高校の勉強とは何なのか、大学へ行って何をするのか、

そういったことについて考えさせ、語り合っていく以外にはない、ホームルームや進路指導だけでなく、授業のなかでも彼女たちが自分の生き方について考えていけるようにしたい。これまでたくさんの方たちがどのように苦しみ、喜びをくぐりぬけて生きてきたのか、それを語ることで受験に目を奪われ、そこからのものを見ることができない彼女たちに何かの考える契機を与えたいと思うのである。

彼女たちの自立への志向は確かに高い。四年制大学へ行つて専門の技能と知識を身につけ職業人としてしっかり生きていこうという意欲をもっている。はなばなしく一線で活躍している先輩につづこうという希望をもっている。それは純粹ではあるが観念的で、実生活の場できたえられたものではない。子どもの時から身についてしまっている受験競争に勝ちぬく技術を駆使して一流大学へ入り、いわば“男を見返す”といった発想に陥ってしまう場合もある。実に危いと思う。

大学へ行き、就職をする、その過程でどれほど大きな壁にぶつかなければならないことか、その壁に立ちむかい克服していこうとする勇氣とたくましさをもたない限り、彼女たちは挫折し敗北感を抱いて家庭へ逃げこんでしまうことになるのではないか。さらにもう一つの問題は、彼女たちの持つ自負心が悪しきエリート意識としてあらわれ、他の女たちとの連帯を阻む危険性である。

いま、彼女たちがどのような立場にあるのか、きびしい社会的現実や自分たちの心理状況の甘さなどを客観的に見られるようにしてやること、女性の生き方についての本源的な問いかけと追求をさせること、これが女子校の教師である私につきつけられた課題なのであった。もちろん、この学校を共学校にして、男女ともに自立し、尊敬し合えるような人間を育てることが究極の目標であり、私自身さやかながらその実現をめざして努力したいと考えている。しかし日常的には目の前にいる生徒たちに、自分自身の生き方や考え方をぶつけ、彼女たちをゆり動かしていく以外にはないのである。

私が女性史の大切さを意識するようになったのはもうかなり前のことである。日本史にしる世界史にしる、教材を一見しただけで女性史が全く欠如しているのは誰にでもわかることなのだが、実際には民主的といわれる学者が編集している教科書でさえ、ほとんど無視されているのが実情である。これはどうしても女性史を補わなければ本当の歴史を教えたとはいえないという思いで、これまでも女性史には力を入れてきたつもりであった。前に勤務していた学校では、私自身年齢的に若かったせいもあり、思いきって実験的なこともやってみた。井上清の『日本女性史』の輪読をグループ単位でやったこともあったし、グループごとに婚姻史を調べて発表させたこともあった。また研究テーマを設定させて授業のあ

い間に発表させてみたりもした。

女性史はそれ自体やってみると非常に面白いので、生徒たちは文句もいわずについてきてくれ、強引なやり方もおつてきてしまった。女の子たちの中には考え方が変わったという感想をよせてくれたものもあったし、男の子の中にも積極的に女性史をテーマに選んで学習しようという姿勢をもつ生徒もいた。しかし当時は、私自身の授業の方法論が確立していなかったという大きな弱点があった。多分に使命感が先行し、恣意的に生徒にぶつけるというやり方であった。それなりに生徒は受けとめ、新鮮に感じとったようでもあったが、あのときもつと体系的に組み立ててやっていたら、という思いが今も残っている。この学校での最後の二年間は、自分自身この弱点を解決しようとして、女性史のプログラムづくりを始めていたのであったが、このプログラムを女子校で実践するという結果になったわけである。

今考えていることは、あまり大上段に「女性史」と銘うってやるのではなく、授業の中にできるだけ自然に女性の生活や家族制度のあり方などをとり入れていくようにし、全時代、全地域で女性の生きてきた姿をとらえていくようにしたいということである。教科書を読むと政治権力のあり方や支配者の動向、戦争や主な文化現象はわかるが、民衆の生活、まして女性のことなど具体的にはさっぱりわからず、いつの

時代にも民衆はいじめられ、反乱を起こしていたのだくらい  
の印象しかもてないのが実情である。彼らが自分たちの生活  
と文化をもち、たくましく生き闘っていたこと、女たちも同  
様であったことを歴史全体のなかでわからせていきたいと思  
うのである。

はじめの年は、この学校での授業の様子もよくつかめな  
かったで、女性史はプリント資料に少しずつ女の地位や生活  
についてエピソード的にのせる程度のことからはじめた。次  
の年からは、授業のはじめに女性史をやることを予告し、そ  
の理由をかなり詳しく話すようにしている。このときに三つ  
の問題を提起する。一つは教科書に書いてあるのは人類の半  
分の歴史である。それはなぜなのか、なぜ女は歴史に登場で  
きないのだろうかということ、二番目に実際の歴史の中で女  
性が果たした役割や女性の地位向上のための長い闘いの歴史  
を知ろうということ、そして三番目に男らしき女らしきとは  
一体何なのかを歴史的に説明しようということ、この三つで  
ある。

実際の授業展開は、各時代ごとのプリント資料に必ず一つ  
は女性の地位、生活に関するものを含め、これに言及してい  
くというごく平凡なやり方をしている。そして重要なポイン  
トと思われる時代や内容についてはテーマ学習のような形で  
扱っている。現在設定してあるテーマは四つである。(1)古

代社会——母系制の問題、(2)中国における儒教的女性観の確  
立、(3)市民革命と女性解放運動のはじまり、(4)婦人参政権運  
動)。この四つのテーマはまだまだ検討の余地があると思う  
が、今のところ現代の日本の女性のあり方に最も深く影響を  
与えているテーマを選ぶとすれば、このようなものになるの  
ではないかと思う。

実際の授業ではなかなか思うようにいかず、時間の都合で  
プリントを読ませるだけに終わるクラスが出てきたり、まだ  
とうてい満足のいくようなものにはなっていないのである  
が、授業の際感じていることなどをいくつかあげてみたい。

さきにあげた三つの問題のうち、男らしき・女らしきの問  
題は性役割分業論の問題ともかわって重要である。現在モ  
ノセックス化がすすんでいるといわれるが、それだけにかえ  
って「あるべき男性(女性)の姿」が固定的にとらえられて  
いるように思える。そういう彼女たちに古代の母系制社会の  
女たちの姿を示してやることは効果的だ。母系社会について  
は文字史料は無論残っていないから、現存の未開社会におけ  
る現象を例として示してやる。そこでの男性・女性像は、彼  
女たちの固定観念をひっくり返すのに充分だ。その新鮮な驚  
きのなかで、家族制度とは女性にとって何だったのか、どの  
ようにして女性が太陽から月になったのかということを語っ  
ていく。家族制度の本質を衝撃的に見抜くことが可能になる

のではないかと思う。

女性が男性に所有され、奴隸的地位におとしこめられてしまったことは、女性にとって「世界的敗北」であつたばかりでなく、男性にとつても不幸であつたことを示していきたい。男たちは下女は手に入れたかもしれないが、女は失つてしまったわけで、愛情さえも支配被支配関係によつて偽りのものとなつてしまつたのである。

また、女たちはそうした蔑まれ束縛された存在であつてもなおたくましく生きてきた事実にも目を向けさせたい。彼女たちは農奴の妻であつたり商人の妻であつたり、また独立した女子労働者であつたりする。またなかには国を守つた女、

## “We” を愛読下さる皆様へ

— アンケートにご協力を! —

多くの方のご支援の下に、しあわせな出発をしたWeは、おかげ様で三年目に入りました。各地で読者会がユニークな活動をし、新しい友と出会い、胸のうちの語りを合える場を得たところ、お便りをいただくのは、何よりもうれしいことです。

学校や教育を疑う人がふえています。親と教師が本音で語り合うことも難しくなつた、とかこつ人がいます。生活を守ろうと躍起になつていても、個人の力は小さくて、企業側の攻勢に呑み込まれて

城を落とした女、革命に死んだ女たちもいた。そして近代民主主義の発展のなかで、女性の地位向上と権利獲得のために一生を捧げた女たちも少なくないのである。これらの女性たちは、一部を除いて全く教科書には登場しない。しかし確かに彼女たちは生きていたし、歴史に参加し、歴史を動かす力となつてきたのである。

このような女たちの歴史を学ぶなかで、生徒たちが女の生きてきた姿に感動し、また批判し、自分はどう生きていくのかについて考える手がかりを得てほしい、そんな風に考えながら教壇に立っている。  
(埼玉県立川越女子高等学校)

しまうと歎く人がいます。家庭科が天王山を迎えたというのに、ほんとうに知りたい情報が得られないと焦っている人がいます。……

一方に、すべての状況を斜に見て、フィーリングで物を言い、笑いとばしながら軽くかるーく生きていこうとする人たちがいて、まじめに物を考え、真剣に道を探ろうとする人は、自分は流行後れかと思つてもみたり……。こういう人たち、いらっしゃるはずです。

Weをすすめたいと思われる方をご紹介します。拡販のための見本誌とされる方には、便宜をはかります。あわせてWeへのご注文・ご批判もいただきたく、本号にはがきをはさみました。一人でも多くの方が協力下さいますよう、お待ちしております。

(半田)





☆ 少年・少女たち ☆

# 心にコブシもつ子どもたち

——「ねえ、きいて」の舞台裏

宮 淑 子



——ね、あの子たち、ホントに実在する子なの？  
——どうやってあの子たちとコンタクトするの？  
——なぜ、あの子たちはあなたにだけ心を開くの？

心になにがしかのコブシをもつ子どもたちの言い分をかき集めて、本誌に「ねえ、きいて」という欄を連載した一年間、何人もの方からこんな質問を受けた。

あの欄には、オトナ社会が差し示すモノサシに自分を合わせられず、本能的にハミダさざるをえない子どもたち、十人を登場させたが、私は、彼ら彼女らが振りあげるコブシこそノーマルで、オトナ社会の方が間違っているはしまいか、という視軸を一貫して貫いてきたつもりである。

子どもと同時代を生きる、生きようとするオトナのひとりとして、誠実に向き合ってみる。彼ら彼女らがオトナにつきつけるコブシを見ようとしてみる。取材にあたってそのことだけを心掛けた。

コブシのつきつけ方は十人十色であって、外在化していて見え易いものもあれば、内在化していて見えにくいものもあった。けれど、コブシもつ子どもたちは押しなべて直観力が優れ、言葉の放射にこちらが眩惑されるほど、語るものをもっている子どもたちであった。

こんな子どもたちとコンタクトしようとするとき、子ども

の前に立ち塞がり言葉を奪うものは誰かといえば、親であることが多かった。

中学時代にイジメられた体験をもつ R 子（高二）を、「学校解放新聞」で紹介してもらったときである。いまの子どもたちの逼塞した状況を垣間見るこんな場面があった。

（\*管理教育から学校を解放するためのメディアとして、内申書裁判原告の保坂展人さんらがつくる青春舎から発行されている。）

R 子の家のダイヤルを回す。受話器を取ったのは母親。

「R 子さんをお願いします」というと、いぶかし気な声で、「どちらさまでしょうか」という問いが返る。

こんなとき、こちらの身分を明かし、取材目的を明かし、いいものかどうか常にちゅうちょする。親が介在すると、子どもにどんな圧力がかけられないとも限らないからだ。親との摩擦をできるだけ避けたいと思って、名前だけ名乗った。

R 子が代わって電話口に出る。

ところが、こちらの要件を話しても、R 子はシドロモドロ。声のトーンを落として聞いてみる。

「どうしたの？ そばにお母さんがいるの？」

「（ささやくような声で）ええ……」

「ごめんなさい、知らなくて。またの機会にするわね」

あわてて受話器を置く。

そのあと、しばらくして「学校解放新聞」へつぎのような電話が入ったらしい。

「宮と名乗る人からウチの娘に電話があったけれど、宮っていったいどういう素姓の人ですか？ もうウチの娘に余計な電話をしないでほしいと伝えて下さい」

つづいて翌日、R 子から「学校解放新聞」へ電話。

「もう私んちへ電話も手紙もよこさないで下さい。学校解放新聞へ出入りするのもうやめです」

あとでわかったことだが、R 子は親にコッソリ隠れて「学校解放新聞」へ出入りしていたらしい。ネクラを理由に、クラスばかりでなく学年全体からイジメという「排除」に会い、登校拒否を何回も繰り返した R 子が、やっと自分のアイデンティティを確立できた所が、「学校解放新聞」だった。

自分は特別な子ではない。ネクラでも動作が鈍くても、それが自分の個性なのだ。そう胸を張って言い切る R 子を、同紙紙上で私は見つけている。

ところが、親には R 子の行動がいぶかく見える。学校の帰りは遅い。聞いたことのない名前の電話がかかり出す。非行の始まりなのではないか……そう思案した挙句、父親が R 子を尾行し、「学校解放新聞」へ出入りしていることをつきとめた。

「なんですか。あんな過激なグループへ出入りして。今後い

っさい、あんなグループとつき合うことは、お父さんもお母さんも許しませんよ」

R子が足止めを食っている最中、それと知らずに私は電話をかけてしまったのだ。

やはりイジメられっ子の経験のあるH君（家族を変えないとどうしようもない」の項で登場）も、「学校解放新聞」紙上でイセイのいい弁舌を披露しながら、同所に出入りしていることは親に内緒なのである。

「ヤバイですよ、親に知れると。親にはどう言ったってわかってもらえっこないんだから。親はただただ学校にさえマジメに行ってくればいい、余計なことは考えてほしくないというに決まっていますからね」

だから、子どもの自宅へ電話をするときは、ヒヤヒヤの連続。どうぞイッパツで本人に繋がりますように、と祈る思いでダイヤルを回し続けたのである。

子どもたちの話を聞く場所は、ほとんど喫茶店で本人と一対一の向かい合いだったが、右翼少女のM子とI子（「学校より右翼の方が居場所があるよ」の項で登場）の場合は、右翼団体女子部隊の本部（といっても2DKのアパート）で、部隊長（三〇歳）同席の下、という条件がついた。

この部隊長は、取材に先立って私を「面通し」した。「あなたが日ごろ書いているものを読みたいのですよ」

フムフムと子ども論・教育論を書いた私の原稿のコピーを読んだあと、やおら、「日本の天皇制をあなたはどう思いますか？」「教育の衰退をどう建て直そうと思ってますか？」と眼光鋭く問いつめられる。一人一殺。テロリズム。右翼には常に血のイメージがつきまとうから、対面し返答する私はヘタに受け答えるとかヤバイという危惧感で、心中ワナワナヘナヘナ。

そこへ助け舟のように、少女たちがドタドタと街頭の示威行動（軍歌をまき散らす街宣車でマイクを握ること）からもどってきた。「お帰りのー」と部隊長の相好がたちまち崩れる。そのあとは、日の丸や三島由紀夫の遺影とマスコット人形が混在するアパートは少女たちの嬌声がとび交って、若衆宿ながら。私はその夜、彼女たちの手料理にあずかって、部隊長ともども「同じ釜のメシ」を食べたのだが、彼女たちをかくも無防備・無警戒にさせ、親ドリのように懐へ飛び込ませる部隊長がテロリストだということを、ときに忘れ、ときに思い出し、恐怖と安堵の間を行ったり来たりした。後日、私の取材が許可され、まるで無礼講のようにゴロンと寝そべって、「ああ、なんでも聞いてやって下さい」という部隊長を横目に、あのM子の言葉が発せられたのである。「私たちのような、学校をツマはじきされた者どうしは、自分の居場所がないわけ。それでフラフラと自分の居場所を求

めてきまよう。だからどこでもよかったんだ。それが悪いヤクザであろうが、トルコであろうが、キャバレーであろうがサ。自分を必要としてくれるところがあれば落ち着いて座つてられるんだから。私はそれが右翼だったんだヨ。私を必要として育ててくれたんだから。ある程度知識も備わったのはここに来てからよ。ゼツタイ学校なんかじゃないよ」

2DKのアパートには、右から左までの思想書、歴史書、文学書がギッシリと並べられていた。

「おまえたち、自由にあの本読んでいいんだぞ。男と遊んでるばつかが青春なんじゃないんだから……」

こう言う部隊長はM子にとって、師に等しい存在だったのだろう。

右翼の中でしか「蘇生」できなかった少女たち。彼女らの最初は小さなささやかなコブシを見逃し、見捨て、やがてはとてつもなく大きなコブシ（M子は「戦争が起こったら武器をもって闘う」と私に断言した）となって報復されることになるオトナ社会の構図を、私はこの取材で見た思いがした。

そうなのだ。子どものつきつけるコブシをどうオトナたちが受けとめようとするかで、子どもたちのその後がどう反転するかを、「ねえ、きいて」近況版としてお伝えしようと思う。

例えば、登校拒否を続けているM子（「学校へ行かない毎日の方が楽しい」の項で登場。中二）の場合、母親が学校

だ、学歴だという社会通念に踊らされることなく、M子の「学校へ行きたくない」という気持ち尊重した。

「親が強制的に学校へ行かせようとしたら、私きつと、家庭内暴力みたいに爆発させるか、自殺したかもね」

こうアツサリいうM子は、会社が倒産し、借金を残したまま蒸発した父親に代わって、スナックで深夜まで働く母親のため、洗濯や掃除を請負い、行きたい所へ行き、会いたい人に会うという悠々自適の生活をしていた。いわば母親公認の人生のモラトリアム期である。学校だけではない周りの「景色」をつぶさに眺めたM子（彼女も「学校解放新聞」へ出入りしていた）は、あたかも自然の治癒力を待つように、学校へ行く意思を回復。中三のいまは将来設計もバッチリ決めている。「私、もう高校へ行かないと決めたの。専門学校へ行って美容師になるんだ」

おとなしい羊の群れになれないために、学校、親、親族一致で高校の強制退学を勧められ、親からは縁切り宣言されたT子（「親に捨てられたの、私」の項で登場）は、T子を支えたカウンセラーKさんの計らいで上京。働くことは食うこと、生きることという現実世界にぶつかることになったが、自分で就職口（ある国民宿舎の賄い）を見つけ、生活人として逞ましく生きている。今春からは、通信高校で学ぶ予定である。

T子の自立考には、東京に住むKさんの友人たちが人生の先輩としてアドバイスしたことはあったが、設計図を描きつづけるのは無論T子本人である。弱冠十七歳のT子であつてみれば、その自立考は山あり谷あり。オトナたちをハラハラさせることもしばしばある。

とりわけ性を介在させる男のコレとの関係は、T子ならずとも、この世代の女のコレの盲点になりやすい。自分の女という性を、からだ性も含めてトータルに自己受容すること（性アイデンティティと呼ばれる）がない女のコレが、異性の性や生に押し切られたり、寄り切られたりするケース——例えば、中絶体験をしたA子（「中絶で可哀相なのは本人？ 赤ちゃん？」の項で登場）や、ツッパルようになったのは彼好みの女の子になるためだったというY子（「戸塚」では私は直らなかつた」の項で登場）——で見てきた私は、T子が男のために（決して自分のためではなく）人生を賭けようとしたときには、「T子よ、お前もかノ」の心境だった。

ところがドッコイ、T子ほもつとしたたかであつた。しばらくして手紙が届いた。

「一緒に住むつもりにしていたのだけれど、あの子にだけこだわっていると自分が身動きできなくなりそうなのでやめることにしました。あせらずにやっていきます。」

それから、誰もが選ぶ結婚→主婦にはなれないでしょうね。

……なぜかと言えば、主婦を二十年間やった母がどれほど苦勞したか見てきたもん……そしてその結果がどうなったかもね……「かわいなお嫁さんになりたいの」ということばには、どうしたつてついていけません」

そして、高校生ライダーのK（バイクへの気持ちは誰も抑えられない」の項で登場）。取材の日、待ち合わせの場所に現れず、スッポかされたかという思いで意気消沈の私の前に、事故つて現れてビククリ仰天させた男のコレである。

ライダーに命を燃やし、将来はロード・レーサーになりたいという彼の一途さの裏に、「悲惨」としかいいようのない家庭環境があることを知ったのは、取材のあとからだつた。

昼間は喫茶店でバーテン修業をし、夜は定時制高校生になるK。父はヤクザで刃傷もち。母はアル中。家で食事が用意されることは一度もなく、外食につぐ外食という、ある種の「子捨て」の環境である。

けれど、Kはグレもせず、たまさか事故つて自宅謹慎になることはあつても、ひたすらライダーとしての自分の人生を追いかけている。

そんな彼を有形無形に支えるのは、級友たちであり、近くに住む若もの雑誌の編集者であつたりする。

級友で親友のA。「Kはバイクで死ねば本望だつていうけど、ボくらたまらんですよ。Kのようなあんなイヤツの骨

をボクが拾う図を想像すると。Kが無事故で教室に現れるとヤレヤレと安心しますからね」

編集者のY。「ヤツが自宅謹慎になったり停学を食らうと、ボクが学校へ行くんですね。あんな家庭環境で崩れないで生きているKのひたむきさを、教師なんてチットモわからんのですわ。＼よつ、K。うまいモノ食ってるか。働きすぎじゃないか。ロード・レーサーへの道は長いんだから、いのち

を粗末にすんなよな”……これだけのことがなんで言ってるんですかねえ」

子どもたちはみな、心にコブシ（それを個性と置き換えてもいい）をもっている存在なのかも知れない。私たちが見ようとしなから見えないのかも……。

（フリー・ジャーナリスト）

## ＊　　＊

### 「ほん」の

#### 小田亜佐子さん

国分寺と立川の間だから国立くにたちですって。駅まで迎えに来て下さった自転車のカゴにはハードカバーの本が溢れんばかり、このあと古本屋行きなんだそうです。

日曜日の午前、彼女の母校一橋大学でインタビュー。

今までにスナリお受けいただけなかったのは小田さんが初めてですが、テレ屋さんですか。自己分析を一つ……。

「十人以上の中で話すのは苦手ですけど……。実は出版社という夜型の生活で無理が重なって体調を崩して、親の家に引っ越しの準備中だったんです。ゴメンナサイ」

大学では社会学部、「婦人問題」を研究。社会学のゼミでは紅一点だった。

小田さんご推薦の『本の雑誌』に、目からウロコが落ちた本の座談会が載っています。あなたの目ウロコ本は？

「中学時代、社会学で技術・家庭も教えていた先生から『橋のない川』を薦められて社会、歴史に興味を持ち、それが大学までつながっていったと言えるのかな。日本の私小説は好きじゃなくてあんまり読んでいないんで

す。大学も終わり頃に読んだ『アンナ・カレーニナ』をきっかけに翻訳物が多くなりました。スケールが大きく、ストーリー性があってドラマチックでしょ」

じゃ、現実には異性とどんな関係を理想と考えていらっやいます？

「うーん、むずかしいですね、そういう質問苦手なんです」 残念!!

社会学・心理学の小出版社では編集部員であつても営業も担当する。中央線沿線が彼女の持ち場。三鷹の第九書房は書評を本の近くに貼ったり、並べ方に工夫したり、いい書店ですねと。さすが彼女。行きつけの書店なのに気がつきませんでした。（中野敬子）

## 自分の服装は自分で考えて

「衣生活のくふう」から

中里清志

「小学生の娘に何を着せればいいかが毎朝悩みのタネ。いっそ制服を採用してもらえないかしら」。こんな母親が増えている。いま、全国で制服の小学校が増えているそう。ひとところ盛んであった「規律重視か自主尊重か」の議論も、便利さを求める母親の声に押しきられそうな勢いである。

東京では、「制服」という言葉を避けて、「標準服」と呼んでいて、下町地区ではほとんどの小学校がこの「標準服」を採用しているらしい。

下町のある小学校では十年來の「標準服」校で、その校長は言う。「下町は昔、児童の家庭に貧富の差が大きく、それが服装にも現れていた。そこで、せめて服だけでも同じものを、というのが標準服の最初の発想だったと思う。今はその必要もないだろうが、父母からは『便利でいい』との声が多い」とのこと。

わが埼玉でも、小学校の制服は

問題となる。隣の学校でも、数年前から体育着が制服がわりになっている。ジャージの体育着で、登下校も、授業中もそのままである。

私の学校でも、制服とまではいかないが、数年前から黄色い帽子を登下校にかぶらせることになっている。その時も、いろいろと制服の議論にまでなったが、制服の一部とは考えないということ、全児童がかぶることになった。その時、体育時など、同じ帽子を全ての教師もかぶるようにしてはどうかという話があったが、職員の間には、反対も多くまとまらなかった経緯がある。

たしかに、制服は、家庭でも悩まずに済むし、学校でも、一見、統制がとれているように見える。また登下校なども、交通量の多い道路などでは目立ち、事故防止にもなる。

しかし、制服を子どもたちに着せる傾向が強まろうとすることに、私は疑問を感じる。

小学校で朝礼の時、ブラツと同じ服が並んでいる姿を想像するだけでもゾツとする方である。

親が、苦しい家計の中から考えながら、学校生活にふさわしい服を買って与える。子どもも、自分の持っている服の中から、今日は何を着ていこうかな、と考え、時には親にも相談する。こうした日々の積み重ねの中から、自分の持ち物の管理能力や判断力が育っていくのであろう。

「服装は人格の現れ」でもあろう。私たちは初対面の人に逢う時、着ている物によってある程度、相手を判断しているのではないだろうか。こうした意味からも、着る物については自分で、行動する目的やその場に合ったものを考えなければと思う。こうした、目的や

その場に合った服装をする感覚は、小さい時から養われなければ育たないものである。毎日毎日育てるこうした感覚を「制服」ではつんでしまうことになる。

何ヶ月か前に、少女向け俗悪雑誌に対して、政府で法規制をしようとする動きが問題となったが、これも、規制だけで問題が解決するのではなからう。出版社の良識や、退廃的な文化に対する社会批判、さらに、健全な文化を育てる運動に力を入れることが求められているように思う。

どうも、規制が先行してしまつて、自主的な判断力や、相互の批判力が劣ってきているようにみえる。

ここでは、六年生を対象に、自分の服装を自分で考える実践を試みた。

### 「衣生活のくふう」

#### 一、題材について

子どもたちは、日ごろ着ている服について、なぜ着るのか、どういう服がふさわしいのかなど、あまり考えずに過ごしていることが多いと思われる。

そこで、身のまわりにある服に関心を持たせ、衣服の変遷、服の洗濯、衣服の選び方、着方の学習を通して、衣生活をよりよくする工夫を考えさせたいと思う。

#### 二、目標

(一) 人類の歴史の上で、衣服がどのように変わってきたかにふれ、服

の必要性を考える。また、現在使っている自分たちの服を観察し、服の成り立ちを考えさせる。

(二) 衣服の布地や汚れに応じた洗濯の仕方を学び、洗濯の実習を通して、原理をわからせ、技能を修得させる。

(三) 活動に便利な着方、調和のとれた着方などを学習し、自分の好みの服のデザインを通して、衣服の目的に合った着方・選び方を理解させる。

#### 三、指導計画と指導の実際

(十一時間扱い)

##### (一) 服を着るわけ

(一時間)

保育園へ通っている息子の図鑑「大むかしの人間」を使って、最初の人類は服を着ていなかったことを示す。

「今から三百万年くらい前の人類の最初は『木からおりたサル』といわれ、簡単な石の道具などを使っていましたが、サルと同様に、何も身につけていませんでした。」

図鑑の絵は、こうした人類の祖先が、手に木片や石おのを持ち、死んだシカの上に立つヒョウに集団で立ち向かっていくようすが描かれている。

「さらに、次の時代、人間は狩りで手に入れた動物の毛皮をはぎ、腰の回りをおおいます。これが、着物の最初です。」

腰布がだんだんと大きくなり、寒い寒い氷河期を経て、からだ全体をおおうようになってきました。

今でも、アフリカ・南アメリカやニューギニアなどの奥地には、原始人のような生活をしている人たちがいます。この人たちの生活は石器時代人のようで、狩りや簡単な農業をして暮らし、



洞窟や草や木の枝で作った小屋などに住んでいます。着る物は、腰布一枚だけです。

アフリカのブッシュマンやアマゾンの原住民の写真を見せる。

つづいて、社会科の歴史の掛図を使い、日本人の服装の変遷を見つめる。縄文・弥生時代の「編布」とよばれる草や木のせんで編んだ服から、貴族の時代の十二ひとえ、武士のかっこう、多くの農民や町人の服装、明治になっての洋服まで、ざっと見ていく。時代とともに、服が変わってきていることがわかってくる。

そこで、質問、「なぜ、人間は服を着るのでしょうか。さあ、考えてみよう」。突飛な質問に、子どもたちは戸惑いながらも感じたことを言う。

「寒さをふせぐため」「汗や汚れをふせぐため」「皮膚を清潔に保つため」「ケガをしないため」と出てくる。女子から、「美しく見せるため」、男子からは笑われながら、「はづかしいから」と続く。

防寒は簡単に出てくるが、防暑は子どもたちは気がつかなかった。そこで、真夏に外でシャツを一枚着ていた方が涼しいか、何も着ていない方が涼しいかを考えさせてわからせる。

「掛図で見たように、着る物も、人類の文明文化の発展・発達とともに変わってきました。人間が時代時代で工夫をし、よりよい服装を考え、作り出してきたのでしょう。服装は文化・文明の象徴と言えます。だから、その人がどのようなかっこうをするかは、その人の知性や人格の現れでもあるのです」と結んだ。

(c)現代の服の観察

(一時間)

衣服の変遷の後に、現在、自分たちが使っている服について、考えてみる。家庭から一着ふだん着を持ってきて、手に取ってなが

め、観察し、わかったこと、気のついたことをできるだけたくさん記録していく。形・色・ぬい方などについて細かくみつけさせる。日ごろ着ている服が簡単にはでき上がっていないこと、細かい所まで見ていくと、複雑にぬい合わせて一着の服ができて上がっていることをわからせたかった。

〈児童の記入例〉(次頁参照)

(c)布地・表示記号調べ

(一時間)

自分の持ってきた服の布地や表示記号を調べノートにまとめる。「布地の種類と性質の一覧」や「とり扱い表示記号の一覧」をもとに、自分の調べた布や表示記号がどのような繊維か、また洗濯やアイロンかけの時には、どのような注意をしたらよいのかなどを調べ、記入する。初めて、服の表示記号にふれる子もあって、興味をもって調べている。さらに、家庭にあるほかの服でも調べてみるようにすすめる。

(d)洗濯の方法

(一時間)

洗濯の経験を出し合い、五年生の時の下着の洗濯を思い出しながら、洗濯の原理を考える。ここでは、手もみ洗いとする。

家庭では、電気洗濯機で洗うため、あまり手もみ洗いをしないが、手でもんだり、つまんだりするうちに、汚れがだんだんと落ちてくるようすを確かめることは大切なように思える。家庭で、地震や停電によって、電気がストップした時にも洗濯は出来なくては。

洗濯の手順を話し合う。洗剤について、洗う方・すすぎ方・しぼり方・干し方を考え、布地の種類によって洗濯方法が違ふこと、布地にあった方法を理解させる。

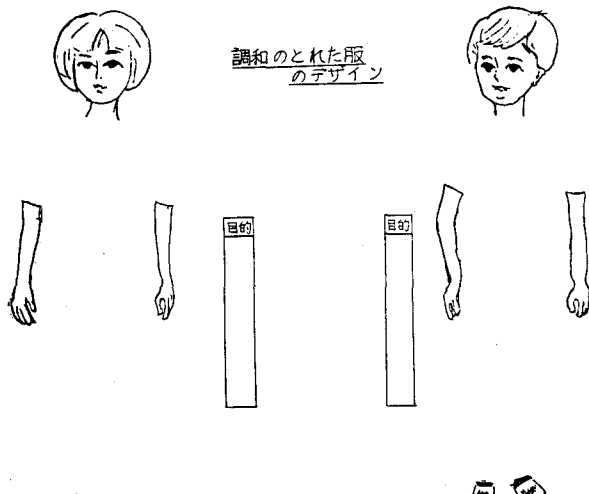
(e)洗濯の実習計画を立てる

(一時間)

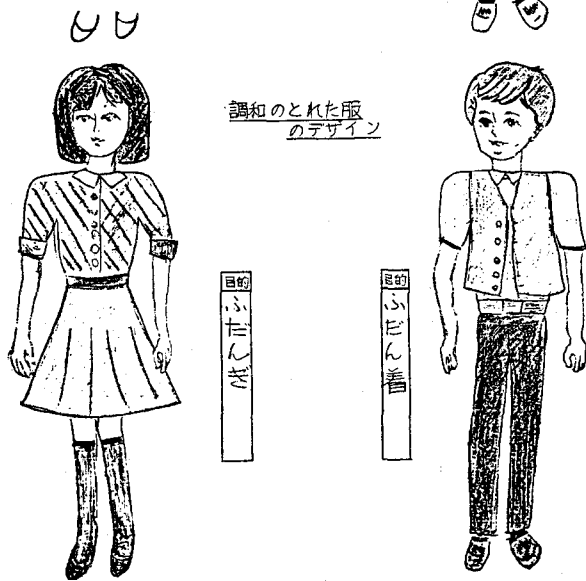


- こうした服は、どこかよい所があるな。形が気に入っていると  
か。色が自分の好みだったりするね。衣服を調和よく着るにはど  
うしたらよいだろうか。
- ①衣服の寸法が、自分に合っていること。
  - ②色や形が整っていること。
  - ③上着とズボン・スカートなどの色や形がつり合っていること。
  - ④着ていく場所や目的にふさわしいもの。

調和のとれた服  
のデザイン



調和のとれた服  
のデザイン



こうした条件が考えられる。

(二時間)

①衣服のデザインを考える  
「みんなは、今までに手さげ袋やエプロンを作ってきたね。仕上  
げとして服を作ってもらいます。しかし、実際に布を使つて作る  
ことは、もう少し上の学年でやるとして、ここでは服のデザイン  
を考えてもらいます。ひとりひとりが服のデザイナーになります。  
自分に合う服を考えてみよう」。

前の「調和のとれた服」の  
四つの条件に合うもので、六  
年生にふさわしい服とする。  
デザインを考える前の練習と  
して、「ぬり絵」(家で我が娘  
が使っていたもの)を用いて、  
調和のとれた色の組み合わせ  
を色エンピツでぬりながら考  
える。

女子の中には、ぬり絵が大  
好きな子がいるもので、二枚、  
三枚とほしがってくる。久し  
ぶりにぬり絵に興じられたと  
いう子もある。男子の中には  
生まれて初めてぬり絵をやつ  
たという子もいる。周りをキ  
ョロキョロしながらエンピツ  
を動かしている。

ぬり絵が終わったら、いよいよ本番である。めいめい、男・女二着のデザインを考える。着ていく目的を明確にしてから作るようにさせる。前頁のような用紙を使って、デザインを仕上げていく。

形や色を考えながら、黙々と作業している子も多い。中には、もう一枚仕上げたいと言ってくる子もいる。

日ごろ、子どもたちは、テレビや雑誌などで、派手なファッションを見なれている。最初は、人気歌手のようなデザインが多かったらどうしかと心配ではあったが、ほぼ、六年生にふさわしいものを仕上げた。

「服装は人格の現れである」の言葉が生きていたようである。

#### 四、「衣生活のくふう」の学習を終えて

##### 〈児童の感想〉

☆服のデザインを決めるのがむずかしかった。服についている印がたくさんあるのは、びっくりした。あらい方にもいろいろあることが分った。全体的に、かんたんそうでむずかしかった。

(田中 紳一郎)

☆服のデザインをしたけれど、服の形を考えるのはむずかしかったです。でも色のくみ合わせはいがいと簡単にできました。いつも着たり、はいたりしている服も、色の組み合わせ、デザイン、形などいろいろ考えられて出来ているんだなと思いました。でも自分で、色を考えたりデザインしたりするのも楽しかったです。

(蛭田 園子)

☆服にはいろいろな長所があるなと思いました。いろいろなしゅるいもある。それは長そでと半そでまであること。もうひとつ、でざ

いんもたくさんあるということ。絵とか字がかいてあったりする。なぜ服をきるかも、体温のちようせつだと思った。あとむかしとだいが服の形や色が変わったと思いました。むかしは上着と下のつり合いなど気にしないで、ただきているかんじがしました。むかしの女の人はおしやれなどしいないとも思いました。

(吉井 香織)

☆ころんだ時、衣服を着ていれば少しのきずもふせげる。さむい時、衣服を着ていればさむくなる。かっこうをつけるため。虫にさせられない。よこれをふせぐ。体温のちようせつ。

本当のデザイナーになったみたいで楽しかった。むずかしいのは色のくふう。上と下のちようせい。ぬりえの宿題をもう一回出してもらいたかった。

(大熊 絵里)

☆服の色はかんたんだったけど形を考えるのはかんたんなようでむずかしかった。せんたくもいろいろマークがあるから、その意味をよくしらべてからせんたくをするということは今まであまりしたことがなかったから、よくわからなかった。でも今までわからなかったのもわかるようになってきた。

(池田 聡子)

☆人間はなぜ服をきるのかということがよくわかりました。せんたくは、よごれている所をあらってきれいにする。布地はいろいろなものがあるということがわかりました。いろいろなものにあつたよう服をきる。服をつくるときに色や形にくろうした。(小川 幸子)  
☆ぼくは服の学習をやりました。せんたくとかほころびの直し方やデザインをやったりしました。とくにおもしろかったのはデザインです。いろいろなぬりえをやったり自分で服をかいいたりしたからです。

(埼玉県上尾市立西小学校)

## すべての生徒に生活力を

櫛田 真澄

### 一、ある家庭科の時間

「先生はなんで家庭科の先生になくなったのですか？」とA男が質問してきた。

「ああ、よく聞いてくれました。

良い質問です。特に、家庭科の先生、なんかということばが気に入りました」。

生徒たちの顔がきりっとして、

こちらを注目、私がなんと答えるのか待っている様子。「私は、あなたたちに話しておかなければならないこと、教えておきたいことを沢山持っています。みんなに、そのことを言わないでは、死ぬに死に切れないのです」と少々オーバー気味に、じゅんじゅんとわかりやすく、生活の大切さをのべてゆくのだが、あるひとつのことを大げさに表現する術は、長い間中学生を相手にしているうちに、身につけたコツの一つである。「これから二十年後、三十年後の生活の見通しは、決して明るいものではありません。今日のように物が

豊かで、平和で、のんびりと生活をエンジョイできるとは限らない

のです。どんな時代がきても、生きてゆけるように、ひとりひとりが生活力を身につけてほしい。また、みんなで力を合わせて生きぬいてほしいと思っています——」と述べる。男女共学の家庭科だからこそ、自信を持って語ることができるのである。もしも、私の教える対象が女子のみであったとしたら、このような視点をいくら強調してみたところで、むなしさのみが残ってしまうであろう。

### 二、生活への認識

五月号の中に記したウイリアムソンの著書の中に面白い手紙があるのでここで紹介しておきたい。ある大学教授に宛てた手紙である。(同書P 205 筆者訳)

「私は自分の生涯の多くの年月を学校で過ごしました。カレッジでは伝統的な学問のコースを選びました。ところが今や、カレッジの教育が、私をローマ皇帝にするために、優雅にフィットさせようとしていることに気付きました。しかし、これを書いている現在も、その地位への招きはありません。ああ、私の教授たちはあまりにも野心を持ちすぎています。教授たちは、私がいつの日にか夫となり、父親となることに少しも気配りをしていないように思えます。私の先生たちは、将来私が遭遇するであろうことがらに気付いていないのですが、家庭生活上の諸問題を解決できるように、私をお助けくださいませんか」。

この手紙は、一九三五年のシカゴ・スクール・ジャーナルに載せられたものだというのが、当時のアメリカの大学での生活に対する考え方が表現されていて、実にユーモラスで面白い。この手紙をきつ

かけに男性の生活への認識が高まっていたと記されている。

それでは、我が国ではどうか。明治時代以来、生活は学問の認識対象ではなく、学校はアカデミックなことを学ぶ場とされ、科学や芸術や文学、哲学、歴史などが大いに奨励されていたのは、アメリカやヨーロッパ各国とも同様であった。ただこれらの国々には思想的に人間尊重、人権尊重の精神が発達していたため、日本よりも相当早い時期に生活に関する認識が高まっていたようだ。日本では長年生活問題は女子のみの学ぶ科目とされ、生活処理の技能を養うようになっていた。そして大学でなされる学問は、ますます現実問題から離れていってしまった。このような結果が諸公害となって現れ、今日も我々の日々の生活を脅かし続けている。汚染された空気や水や生鮮食料品、添加物の多量に使われた加工食品、衣料品に使われている化学物質、クスリの問題など、数えきれないほどの生活問題がうず巻いていても、男性は天下国家を論じ、国益のために、また企業のために働くことが本命であると信じられてきた。即ち、我が国では、戦前までの富国強兵の政策にひきつづき、戦後は企業優先、生産第一の路線を走り続け、長い間、生活はいつも後まわしにされていたのである。

ところが、今から約十年前の一九七三年の十二月の石油ショックは、日本の国民すべてに価値観の転換を迫ったのであった。物資の豊かさや便利さのみでは人間を幸福にしないことを悟られた。生活は何よりも尊く、産業は人々の幸福のために振興させるべきだとする人間中心の思想が、やっと受け入れられる素地ができたといつてよい。

その後十年、生活重視の考え方は遅々としてはいるが、全体的には少しずつ理解が深まりつつある。学校教育は保守的な面が強く、社会の歩調に遅れをとる面があるが、以前よりはかなり前進しているように思われる。人間生活の日常的価値を大切にすることは、今後ますます学校教育の中でも強調されるべきであろう。家庭科だけで負いきれるものではないが、家庭科が生活に関する規範や価値判断や実践力を身につけるための教科であるなら、家庭科の果たす役割は大きい。それを男女共学で学ぶことにより、生活を大切にすることは有効に働き、社会全体に早く浸透して、住み良い社会の実現が可能になるにちがいない。

以上のように生活は長い間重要な地位を与えられずにいた。生活を処する力は女子のみに期待され、教育され続けたという事実から、家庭科は女子向けの教科として発達してしまっただけです。「家庭科の先生なんか……」という生徒の発言の中にも、長い間に根を下してしまった生活を低く見る思想が顔をのぞかせていることを知る。

長年女子向きとしての歴史を持つ家庭科は、現在では、衣、食、住、その他の分野について、男女共に学ぶに値する内容を選択し、新しく再構成されなければならないようになってきた。食生活についての理解は割合早くから共学で学習するように主張されていたが、今では被服の学習に関しても、人間の生活を大切にするという観点から、男女共学で学ぶにふさわしい内容が研究されつつある。男女共に、生きてゆく上で（生活してゆく上で）必要なことを選び出し、総合的に考えたり実践的に対処できるような実践力がつくよう生徒たち全体のレベルアップを考えたい。

### 三、一枚の古ワイシャツから

四月入学式を終えた新鮮な一年生に、三年間の家庭科のオリエンテーションをする。本校のカリキュラムの大まかな説明と授業への心構えやノートの使い方などの細々としたことがらなどを述べた後、次の時間には、お父さんの着ていた古ワイシャツを持参するよう伝える。「タンスの底に眠っているもの、処理に困っている物を利用して、数多くの勉強をするので家に帰ったら探してもらいうに、一枚提供してもらいうに、あなたの方の口からお願ひしなさい」。また「その時、なぜ着なくなったのか理由を聞いてメモしてきなさい」と伝えておく。プリントなどをして家庭に連絡をとって準備してもらう方法もあるのだが、やっぱり、子どもの口から父親に直接話すということで、学習への協力や理解を願いたいと思うのである。ワイシャツの古いものなど、チリ紙交換に出したり、捨ててしまう御時勢なので、それほど無理な注文とは思わない。ただ職業柄、ワイシャツを着ない場合もあるが、その時はお母さんにお願ひして、親戚や近所の人に聞いてもらってほしい旨を話す。どうしても無理な場合は学校で探して与えることにしておく。

#### (1) ワイシャツのたたみ方

次の時間、ほとんどの生徒がワイシャツを持参した。なんとなく楽しそうな、期待感を持っているような雰囲気である。ただワイシャツのたたみ方を知らないために、シワクシヤだったり、扱いに困っている様子が見られた。そこで先ず、「ワイシャツのたたみ方を練習しよう。これを覚えておけば一生の得、あなたのタンスの中はいつも、きれいに整理がきます」というわけでワイシャツのたた

み方から始めた。

クリーニング屋さんが折る方法、買った時の袋の中の折り方を知ろうということになり、生徒の持ってきたワイシャツの中で、ノリがついて折り方がはっきりしている物を参考に、全員が、きちんと、格好よくたたんでみる練習をした。ほとんどの古ワイシャツはノリ気がないので、苦勞していたが、二通りの方法を練習し、好きな方法を自分のものにするように伝えた。これは、ワイシャツが解体されてしまうまで何度も練習をすることになる。

#### (2) 着なくなった理由

本校の標準服はワイシャツにブレザーというスタイルである。この点、お父さんの古ワイシャツは自分自身の着ているワイシャツの問題でもある。

そこで、一人一人に、お父さんから直接聞いてきた「なぜ着なくなったか」の理由を発表してもらった。一人はその父親から聞いた約一〇二の理由をのべるが、四十三人いればその理由はバラエティに富み学習の要素を沢山含んでいる。

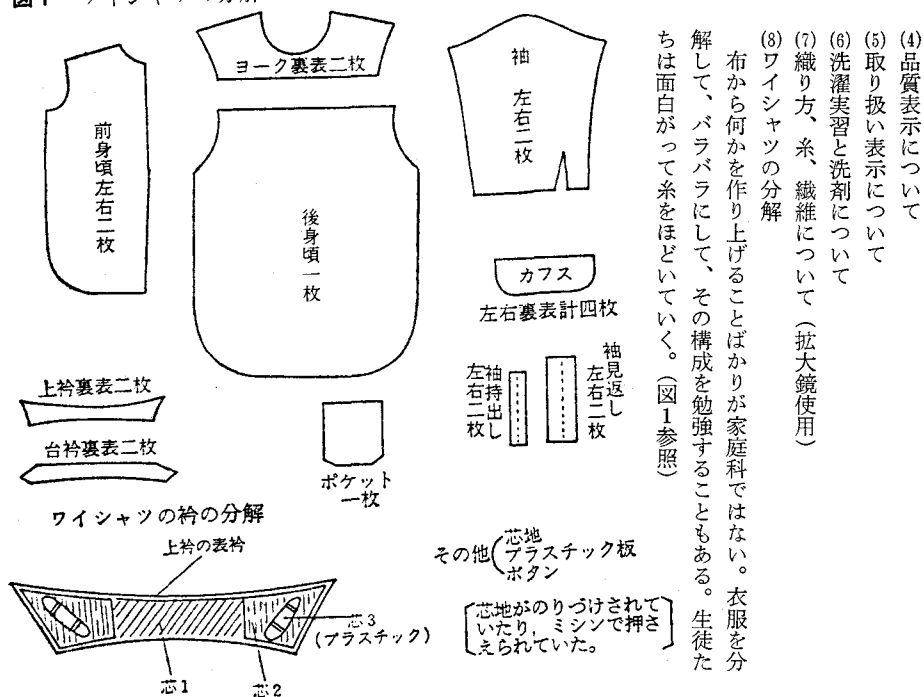
#### (3) 古ワイシャツの研究

〈着なくなった理由〉

- 1、衿がすり切れた（えり先、えりの折り山）
- 2、衿がちんだ（第一ボタンがきつくなった）
- 3、衿の汚れが落ちなくなった
- 4、カフスがすり切れた
- 5、カフスの汚れが落ちなくなった
- △ 6、身ごろに穴があいた（タバコの火、かぎざき）
- △ 7、しみがとれない（墨、マジック、インク、汗のしみ）

- △ 8、大切にしまっておいたらカビが生えた
  - 9、着る人が亡くなった(祖父、父)
  - 10、全体が古くなった(弱くなった)
  - 11、糸が切れてほつれてきた
  - 12、色があせた、変色した、着色した(うす黒い、灰色、黄色っぽい)
  - 13、体型に合わなくなった(お父さんが肥っちゃった)
  - 14、着る人が成長した(兄・姉)
  - 15、贈り物で体に合わない
  - 16、贈り物で好みに合わない
  - × 17、着ていると首のあたりがチクチクする
  - × 18、表衿と衿芯がずれてシワが何本も出る
  - 19、流行おくれで着るのがいやになった
  - 20、会社(学校)の制服が変わった
- 以上のような理由が次々と述べられ黒板は一ぱいになる。それらを分類してみる。
- 「古くなった現象に○印をつけよう」と生徒たちに考える時間を与えて答えてもらう。
  - 「注意すれば防げたかもしれないものに△印をつけよう」
  - 「欠陥商品はどれだろう ×印」
  - 「洋服の宿命のような理由はどれだろうか □印」
  - 「その他」
- 以上のような分類から、和服と洋服のちがいが、洋服の特性、リフォームによる活用法、交換会の利用、被服の管理について、欠陥商品の場合の対処法などの学習が可能である。

図1 ワイシャツの分解





一年 栗田 勝実

ワイシャツを分解するとき、ぬつてあるところを少しほどき引  
つぱると、すぐにバラバラになってきた。もし着ているとき糸が  
ほつれたら、すぐ補強しないと糸が全部切れて、着られなくなる  
のではないかと思った。また、ワイシャツの衿を分解してみ  
ると、普通は芯地が三〜四枚使ってたのに、値段の安いものでは、  
一〜二枚しか使ってなかった。あまり安いものは買わないよ  
うにしよう。

一年 鈴木 悦子

いつもチリ紙交換に出していたワイシャツを分解してみたら、  
こんな大きな布があつてびっくりしました。はじめは、こんな布  
で体育着入れができるかなと不安でした。でも、実際に大きな布  
がありました。これからは、着なくなった衣服を見直してみよう  
と思います。中学生になってワイシャツを着るようになったの  
で、古ワイシャツの分解は面白く、よい勉強になりました。

#### (9) 燃焼実験

#### (10) ミシンの練習

カフスの部分は適当な厚みがあつて、上糸と下糸の調節、針目の  
調節の練習に適している。

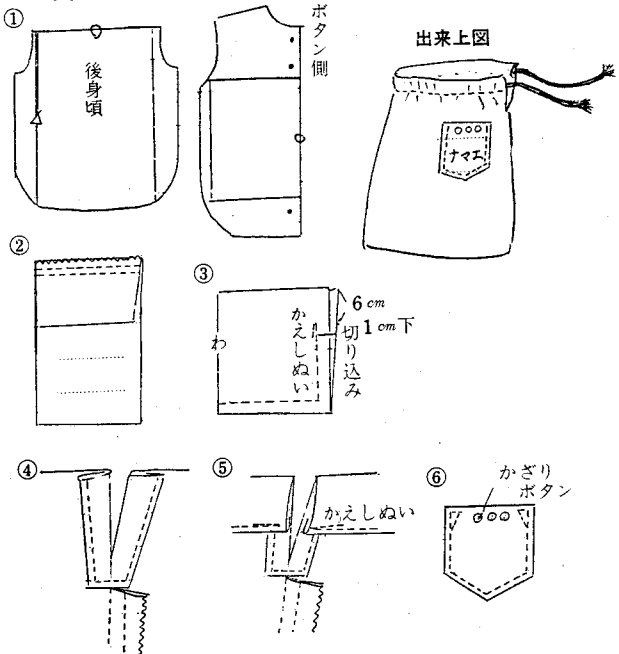
#### (11) 体育着入れの製作

ワイシャツの後身頃と前身頃は痛んでいないため、割合丈夫な袋  
が出来て、中学校三年間の使用に耐えられる。リフォームの一例と  
しての学習である。(図2参照)

図2 体育着入れの製作

#### 四、集団で学ぶということ

三年ほど前、『自立への子育て』（須長茂夫著、労働旬報社）を読  
んで大変面白く感じた。父親が自分の息子に生活力をつけるために  
奮闘した記録である。職業的にも割合自由な時間を持てる父親が家  
庭教育としてマンツーマン方式で教えてゆく。手を貸さないま  
でも、そばで見えていて指示し、助言したり、励ましたりできる立場に  
あった。また、教育に関する信念も堅固で、母親就業という条件も  
そろっていた。更に、家庭教育の場合に重要な点として、その子の



年齢がものを言うように思えるが、小学校四年生は、グッドタイミングであった。男が男の子に教えるのもやり易いことであろう。とにかく、これは、一対一の家庭教育での成功例である。

しかし、現実問題として現在の一般家庭に、その子供の生活力をつけることが期待できるだろうか。親自身の信念がぐらついている場合も多く、まして男の子にも生活力（認識力、実践力）をと言われても、どうして良いのか困ってしまうのが現状である。そして、中学生ともなれば、親の力の及ばない部分が多くなってくる。彼らは友達と一緒にいること、友達と同じことをすること、友達から刺激を受けることをひどく好んでいる。友達と同じことをしたり、考えたりすることで安定感を得ている面もある。

このような発達上の心理に、中学校の教師は目をつけて上手に指導してゆくことになる。即ち、集団としての教育力を利用しなければ、興味を喚起したり、自分もやってみようという意欲も起こさせたり、友達とのちがいを認めさせたり、考え方の多様性に気付かせたりすることは不可能なのである。ここに教師の側からの学習指導の面白さがあるのだが、生徒の側からだって、一対一で教えられるより集団の方がはるかに楽しく学習ができるはずである。また家庭科の場合にはよく、個別指導とか個性を伸ばすためにとか、個々の生徒を対象にしているように聞こえる表現が簡単になされるのだが、私は根本の所で集団指導が十分なされ、集団の質が高められ、その中で生徒同志が相互に良い刺激を受け合って土台作りがなされてこそ、個性の伸長も期待され、個別指導にも意味がでてくるのだと思っている。

父親の着ていた古ワイシャツから、衣生活について数多くの学習

ができた。父親から聞いてきた「着なくなった理由」も一人の生徒は一―二つ位の理由しか持っていない。それが四十三人の集団となると二十もの多様な理由がでてくる。「お父さんが肥っちゃったから」と一人が言うのが皆が笑う。「それは、衣服のことばでいうと、”体型が変わったから”と言うのです」と教えると、次々に面白がってこの言葉を使う。

楽しい雰囲気の中で出された理由の一つ一つを分類してみる。そこには現在の衣生活の縮図のように種々の問題が含まれていた。それらは、すべて自分たちの衣服の問題なのである。「私の出した資料（時には意見）は、みんなが考えるための材料となった」という実感がひとりひとりにある。集団としての学習の中にみんなが参加していることになる。これこそ、集団思考、集団学習の面白さ、楽しさであろう。

みんながワイシャツを解体するから僕もやってみよう、みんなが足踏みミシンの練習をするから自分もする、体育着入れも完成させるといふように、集団の中の各メンバーのお互いへの影響力は非常に大きく、ここに、「すべての生徒に生活力を」育てる大切な要素がある。実技については特に重要である。

本校においてこのような被服指導をしているが、生徒たちは、何の抵抗もなく、ごく自然に学習に臨んでいる。そして、家庭科の学習の半分は男子で占められている。体育祭のハチ巻作りも、ゼッケン作りも、応援旗作りも男子の生徒が張り切って参加する。針や糸を持つこと、ミシンを踏むことも少しの抵抗感を持っていない。みんながやっているからなのである。

（武蔵野市立第四中学校）

## 生活者教育の視点

## 保科 達子

### 〈家政学と家庭科教育

#### そのかわりと矛盾〉

家庭科教育を、男女を問わない国民的基礎教養のひとつとして構想しようとするとき、教科としての家庭科の理論的基盤を家政学のみを求めることは、さまざまな問題を生む。

第一に、家政学が女子の特性教育の枠の中にあるかぎり、男女共修の家庭科に教科理論を提供する母体たりえないし、また、生活に無縁の家政学という評を克服しないかぎり、生活を変革する力を育てようとする家庭科教育の基盤ともなりえない。

しかし、そのような家政学と家庭科教育は現実には深くかわり合い、家庭科教育の構想に際しては、家政学をも検討することが必要である。

もともと直接的なかわりとして、家庭科の教員免許状の多数が、家政学系の大学で取得されている事実をみれば、家政学の検討

は必須の要件である。

家庭科も家政学も、その出発点、いいかえれば家事・裁縫にストップがかかった時点から、家事・裁縫とは異なるものをめざしてスタートした。

一九四六年に文部省から示された『新教育の指針』には、「——これからは、男も女もその力を十分に伸ばされ、ひとなみに社会に出て考え、かつ判断する力を得るように教育されなければならない。女だからといって、早くからその力がおさえられたりゆがめられたりすることは、単に女のために不幸であるばかりでなく、社会全体のために損失である——」と女子教育の方針のべられ、それを反映した家庭科教育は次のように説明されている。「——新しい家庭科は民主的な新しい家の觀念の上に立つものであり、従って、今までのような裁縫と家事の教科目とは全然違ったもので、『家庭生活のあり方』『その責任のとり方』ということが重要な位置を占める。そしてそのゆえに、男子も女子も同様必ずとらなければならない必須課目である。」

しかし、このような画期的で、民主的な家庭科への指導方針は、短期間でふたたび女子の特性を強調する方向へ変質を始める。その動きを押しもどすには、いわば与えられたかたちの当時の民主主義は、いまだ力あるものとして定着せず、脆弱であったといわざるを得ない。

一方、家政学は新制大学に家政学部を設置するという制度上の事実を実現することで、家政学も学問としての認知を得ようとした。しかし、あの特異な激変期に、しかも家事裁縫の歴史しか持たない状態の中で、新制大学にふさわしい有資格者として集められたの

が、関連する専門分野の業績高い人々であつたために、かえつて家政学は寄せ集めの雑学であるという批判をまねき、独自の学問としての認知を得ることはできなかった。

そして、その後の研究推進の方向は、認知されなかつた負い目を各専門分野のレベル向上によつて解消するかのよう、に、狭く、深くという方へ向かつてしまつたため、家政全体を見ない家政学として、個別科学の寄せ集めの印象を強める結果になつてしまつた。

さらにまた、後継者の養成もその方向で進められたため、家政学を総合的に構想する研究や、その独自性を追求する研究はたちおくれ、家政学は分解して生活と無縁のものになつたかときびしく批判されるにいたつたのである。

スタートから二十年を経て、家政学の本質や独自性についての研究が本格化し、家政学原論研究会の誕生をみたが、家政学研究者の広汎な支持と共通理解をうるような構想のまとまりにはいたつていない。

現在、個別科学の専門的研究を深めた結果として、卒業生を関連産業に就職させるにいたり、さらに新たな批判を招いている。すなわち、食物学や被服学が理化学としての専門性を深めることにより、これらの卒業生を食物あるいは被服の関連産業におくこむということは、本来、生活者の学問であるべき家政学を、生産者の学問に変質させるというのである。

個別科学に分解して生活とは無縁であるというならば、それは出版におけるひずみが今にいたるも是正されていないということであり、生産者の学問に変質して生活者の学問でなくなるといふならば、それは家政学の今後に対する警告と受けとめるべきであらう。

生活と無縁ではない家政学の再構築をめざして研究を重ねている人々の存在も事実である。しかし、他学界から家政学界一般に対して、これらのほかにも生活者の視点が無い、生活上の矛盾を要する観点がないなどの批判が提示されているのも事実である。

このような家政学の土壌の中から、すぐれた生活者、あるいは生活者の視点を確立した家庭科の教師が育つてであらうか。

民主的な家庭生活や家族関係のありかたを、男女ともに必須で学ぶという方向を失ひ、女子の特性教育に変質した家庭科で育てられる女子生徒は、特性教育に疑いを持たなくなるであらうし、主婦養成準備教育も素直に受け入れるであらう。そして、その延長線上にやや内容的に程度の高いものというほどの認識で家政学を考える。

そのように家政学を学んだ女子学生は、家庭科の免許を得た場合、家政学の程度を下げたもの、あるいは一部分としての家庭科教育内容を考え、主婦養成教育の低年齢版として、女子だけを教育することにも疑いをはさまないであらう。

このような悪循環は、特性教育容認派の再生産をくりかえし、男女共修家庭科教育の推進に対するブレーキになる。

それでは、その悪循環をどのようにして断ち切ればよいであらうか。

ひとつには、いうまでもなく男女共修家庭科の実践を拡大することであり、次いで、家政学の再構築をはかることであらう。

#### 〈家庭科教育の新構想そして家政学の再構築〉

再構築された家政学は家庭科教育に基礎理論を提供する母体にな

りうるとする考え方と、無関係とする考え方があるが、免許状の關係が変わらない段階では、家政学を切り離すわけにはいかない。

男女を問わない国民的基礎教養としての家庭科を構想することによって、逆にその基盤となるべき学問の構築を試みることも考えられるが、それを果たして家政学と呼ぶべきか否かも含めて、今後の興味ある課題である。

家庭科教育に基礎理論を提供する母体としては、再構築された家政学のみならず、隣接科学としての生活学や生活科学も考えるべきで、それらとの関連の理論づけも検討すべきであろう。

家政学・生活学・生活科学は、お互いに重なる部分があることを認めあい、ライバルとしてよりも多くの共通項を持つものという認識が、互いの中にある。もちろんもっとも基本的で重要な共通項は、「よりよい生活の実現をめざす」ということである。

それらと家庭科教育の接点をもとめ、理論づけを試みることは、いわば生活科教育的視点からの批判を加えて家庭科を構想することである。

家庭科教育に生活科的構想の導入をということは、いろいろな表現でなされている。

「生産者の視点ではなく、生活者の視点から見る。」

「生産の論理ではなく、生活の論理で考える。」

「消費者教育との連携を。」

さらには桑畑さんの「弱者の立場でものを見る」(We 五月号)ということも含めて、まず、生活をどのように見るかということが土

台として重要なことである。

そして、生活の中のある事象から、生活のしくみを理論的に解明して行く力量をもつということが非常にたいせつな段階である。日常生活の中には、無数の事象があるわけだが、その中から、生活をよくするために問題としてとりあげるべきことを判断し、その事象がなぜ現れたかについて、生活のしくみを解明して問題の所在をたしかめる。

ついで、その問題の解決をはかることで、実際に生活をよくして行く、つまり生活要求を実現することにつなげて行くのである。

なにがとりあげるべき事象か、なにが問題をはらむ事象かという選択眼は、生活を見る時に自分がどの立場に立って見るか、どのように鋭い感性で生活を見るかということで養われ、鍛えられて行くであろう。

たとえば、安全な食品を食べたいという生活要求は、当然のこととしてすべての人が持っている。しかし、私たちの生活の中には、農薬のかかった野菜、添加物の入った加工品、黄色というよりオレンジ色の卵黄、やたらと軟かく水っぽい肉など、食品の安全に関して問題となる事象は日常的にある。この中には、洗いを科学的にし、操作を正しくすれば解決する問題もあるが、社会的な生産流通のしくみまで明らかにしなければ、問題の所在がはっきりしないものもある。また、問題の所在がわかっても、個人では、あるいは一家庭ではすぐには解決できない問題もある。

しかし、私たちの生活は、生産の論理に生活の論理が克つことではか守れないのである。

かつて黄変米の毒素が問題になったとき、しかるべく処置(捨て

たり、食品以外の用途へまわしたり) したと報道されて安心していったところ、数年後の学会で、防腐剤のことから話が黄麥米に及び、「あれは煎餅などにして売りましたから、とくに皆さんが食べてしまったはず」と平然と述べた官僚の表情・声を私は忘れることができない。

減反政策の揚句に米不足となり、「止むを得ない時は古々々々……米でも食べていただくことになるやも」と国会で答弁している大臣の顔を見ると、すでに私たちが食べている米の中に、何回も何回も防腐剤その他の薬を浴びて、安全性は保障されないという米が混じっているのではないかなどと考えてしまうのである。

#### 〈市民の倫理を基盤として〉

#### ——生活の矛盾の変革を——

現代の社会では、一個人や一家庭では解決できない問題があると同時に、生活をおびやかす、破壊する問題は広範囲に及ぶことが多い。両者は表裏の関係である。空気、川や海、水道水の汚染などはより大きな規模で解決がはからねばならないし、学校教育や一教科の手を離れてしまうかのである。

しかし、現代の社会では自分だけが人間らしく、安全に、健康に生きるなどということは不可能なことであって、自分の生命や幸せを守ると同じように、ひとびとの生命や幸せを尊重しなければならぬという市民社会に生きる倫理を、家庭科はもとより少なくとも生活を守り、よい生活の存在をねがう学問や教育の根底に位置づけるべきだと思ふ。

商品として売る農産物には農薬をかけるが、自家用にはかけないとか、色とりどりにあざやかに着色した練製品を、自分や家族が食

べる時にはけずり取ってから食べるとか、生産者の立場での行動と、消費者の立場での行動がくいちがう話もしばしば耳にする。農業や水産業などが経済的に成り立つための政治的措置が不十分であるなどの、複雑な原因が介在するから、短絡的にはいえないことではあるが……。外国との関係でいえば、我国で有害とされて売れなくなった洗剤を東南アジアへ持ちこんで売りさばくなど、後進国蔑視ともうけ主義が露骨である。

このような市民社会の倫理を欠いた行動は、人間らしい生き方とはいえないし、お互いがお互いを傷つけあうことになって、真に生活の安全を守ることは困難になる。

利己的な行動で自分だけの安全を守ろうとするのは、核シエルタに一人で入る行為に通ずるものである。その前に核の惨禍がおこらないように皆が努力をすべきであると同様、生活をおびやかすものの排除にこそ力を合わせるべきである。

そのような倫理の上にこそ、生活上の矛盾を変革する家庭科教育は構想されるべきだし、その力量も発揮されるのではないだろうか。(短大教師)

#### 〈編集部より〉

◆「新しい家庭科を創るために——高等学校では」は、都合により今回は休ませていただきます。次号をお楽しみに！

◆五・六月号を左記の通り訂正し、おわび申し上げます。

五月号・三六頁の表で「二年週三時間」↓「二年週二時間」

六月号・四六頁上段四行目「農業団地」↓「農業用地」

同八七頁下段六行目「奇形ザルを訴える」↓「奇形ザルは訴える」



われひとり  
勤めもつ  
妻遅ければ  
レジにならぶ  
脂粉におうなか  
男われひとり

## 視 点

### 〈教育〉と〈べんきょう〉

長谷川 孝



《勉強より大切なものを見つけたいんです。  
私、ずっと焦ってました》\*

そうだよ すてきな春のことばだね  
長かった冬をたえて

キラキラとさざ波のようにかがやく

桜の花より美しい若葉たちのような

《まなび》のいきいきとした

そうだよ いのちのひびくことばだね。

リアス海岸ぞいの小さな村の中学校へ

東京の中学校を見かぎって

入学してきた あなた。

《三歳年上の兄がつっぱり少年扱いされたこ  
とから、都会の中学校に「疑問を感じた」》

教育とはもしかすると

文明の病いなのかもしれない

いま教育が教育に

自家中毒しているのかもしれない

学校をとおして広がった

この「教育」という考え方

教育と道徳とが結合した

社会的化合物——「教育化」社会。

いま、すべてのものが 教育的に存在する

教育が存在を規定するがごとくに。

街路樹たちも 植えこみの木々も

建ちならぶビルも ほそ道路も

もしかすると路傍にころがる石ころさえ

教育に存在を規定されているのだ

教えこまれたように役割を果たし

はみ出そうともしない。

学校という神殿に教育サマがまつられ

この社会のすみずみまで

学校色に染められている

白地に赤く染めて染めて

国民みんなのシアワセを祈っているゾ。

高部知子に坂本スミ子

甲子園出場を辞退した野球少年たち\*\*

みんな「教育化」社会のいけにえ

陰湿な「教育ごっこ」のいじめの道徳

まるで「教原病」が人間を蝕むような

たかが野球にたかが教育がシャシャり出る

学校色に塗りこめられた野球場と

教育染めに仕立てられたベースボール

たとえどんな犯罪を犯した少年だろうと

札つきの「非行」少年でも

どんな「落ちこぼれ」だとしても

その少年が野球にうちこんだとき



少年のいのちが輝いているかもしれない  
だけど 野球は教育の一環 なのです  
だから 連帯責任です 集団的厳罰です  
ああいやだ！ 教育的ヒステリー

教育という名のファシズム

野球は野球、野球として楽しめばいい。

《今日、はじめての保護者会がありました。

一六年目という、バイタリティあふれる、はつきりした担任でしたが、学校が始まって以来、毎日プリント二―三枚の宿題。六歳と数日で学校に行ったYには、カバンだけでも重すぎるのに、荷が重すぎるようで、すごいイライラ、泣きむしになってしまいました。先生の意見は、子どもたちはもう、学校は勉強する所だと自覚している。勉強(宿題)はやればできる、できれば楽しい(勉強も学校も)、という考えで、それをどんどん実行しています。私としては、学校に慣れる、友だちをつくる、そして勉強へと進んでいくものだとはっきり思っていたものですから、ものすごいとまどいがありました。あの先生のもので、これから二年間やっていくのかと思うと、ガックリ肩を落としてしまいました。学校って、大変なんですね》

妹から届いたハガキの文字が

わたしの心を刺した

頭の悪い親をもった子は可愛想だと

すっかりしよげかえったらしい母親

イラ立って泣きむしになったという六歳

ピッカピカどころじゃない

教育というお仕置きが始まりじゃないか。

学校は勉強する所だと自覚している――

そうじゃないんだ

べんきようってね、べんきようってね

おたのしみ会なのよ

友だちと遊ぶことなのよ

ちよつと新しいことを知ることなのよ

「あ」っていう文字がふくらむこと

「1」という数が広がっていくこと

遊びのちよつと先の路地を

そつとのぞきこんでみること。

勉強ってのは、先生

子どもを教師の奴隷にすることなんだな

奴隷でいることが楽しくなる修業だな

先生、あんた勉強してるのか

勉強をして だれの奴隷になったの。

学ぶ心に師おのずから生ず

師あるゆえに学ぶにあらず

まなぶ心が広がりますと 勉強が崩れていく

まなぶ行為がいきいきしますと

お仕着せの師がボロボロになる

学校とは文字どおり

まなぶことの「あしかせ」

まなぶことをしぼりつける将校のいる場所

あまりにもへまなびから遠い時空。

まなびの庭の春は沈黙し

自生できない園芸用の花だけが

根を養うこともできずに咲きほこる。

だけどね よくみてごらん

学校のそとで、いっぱいまなんでいるよ

生活のなかに、豊かな《学校》があるよ

《勉強より大切なもの》を

きつと見つけような きつと。

\* 岩手県田野畑村の中学校に東京から入学した  
白井雅子さんのことば(84・4・30・毎日)。

\*\* 不祥事を起こした芸能人の袋だたきと、84年  
春の選抜高校野球での函館有斗高校の出場辞退。

(教育評論家)

—現場から—

「直面する」その2

児玉 すみ子

counsellingの応用counsellingの応用counsellingの応用counsellingの応用counsellingの応用

青年期とは、「自分は何なのか」の意識が強まる時期で、青年期の意識的な行動のほとんど全ては、その解答を得るためのあがきであるという。怒濤の時代と名付ける人もいる程で、自分の内なる、様々な力動的な諸傾向や、人格的な目的とを統一するに至るまでの、激しくゆれ動く、危機をはらんだ時代である。

さて、Tの歩んだ過程は、その典型である。自己の現実<sup>1</sup>に直面するという苦しさ<sup>2</sup>に、Tは、ひるみ、逃れ、混乱したままの状態をかかえ、落ち着かず、いらいらとしていた。できれば忘れたい、先延ばしにしたいと、自己の現実から目をそむけていたのに、K先生のお節介は一触即発の彼の状態に、事もあろうに石を投げたのである。K先生の発言内容は、適切なものではないが、Tの内部の葛藤が、コントロールされていたなら、「いやあ、普通科に入ったのが失敗だったかな」と、頭をかいて、笑って受け流せていたかもしれない。後で、私と共に居て、徐々に自己の現実<sup>3</sup>に直面し、自ら掌握できるようになった時、彼自身が述懐

している。人の善意から出た言葉であっても無性に腹が立ち、「一つの参考意見」として聞きおくという余裕がなかったのだと。

これは又、裏返せば、自分がどうしたらよいか不安定な状態にある人に向かつて、適切な助言をすることの、いかに難しく、効果の薄いものであるかの証にもなる。それよりも重要なのは、当人が、自分自身の内的・外的現実<sup>4</sup>に、恐れることなく直面し、的確に認識し、その現実から指向を行えるよう、援助することなのである。Tの自我は決して弱いものではなかった故に、私が、彼の言葉を心を傾けて聴き、そのもつれた糸を解きほぐす作業に、多少の力を貸してあげること、自分自身の現実<sup>5</sup>に直面し得たのであった。

一人前になっていく過程において、橋渡しの役割を負う者の存在は、重要である。エリクソンのいう「自我同一性」——主体的な自己意識——は、「他者がそれを認知しているという知覚に支えられた安定感でもあるし、自分が特定の社会の中では認められる歩みを未来に向かつて一貫して進めつつあるという自己評価によって裏打ちされた確信でもある」からである。

進路といえば、進学でしかないような学校内の風潮、いい大学——いい会社のコースしか眼中にない世間一般の風潮、学校の成績が、人間の価値を測る確かな物差しと、愚かしくも、狂おしくも信じてやまない教師や親や、そして生徒たちに囲まれて、Tが、Tらしい生き方を選びとり、しかも、その生き方が、周囲の現実の人物による是認を得、現実の社会の中で、自己の適所と役割を発見できるものであるには、Tを支える人間の存在が、どんなに必要であったか、言うをまたない。

惑い、ゆれ動く過程——子どもから大人へ移行していく過程に、平穩があるはずはないと覚悟をきめて、面倒をかけるかもしれない青年に胸を貸して、受けとめ、ある時は突き放して考えさせ、羽ばたかせてやる大人の存在が、必要なのである。

その点、Tの親は、みごとであった。その間、迂余曲折や衝突があったとはいえ、否、あったが故に、という。

又、Tも証言している通り、Tの存在していた当時のその高校には、生徒たちの試行錯誤を見守るという雰囲気があったことが、幸いした。それは又、その雰囲気を作り出す教師集団があったということでもある。

K先生にしても、自分の心ない発言が元<sup>もと</sup>とはいえ、自分に暴力を振るいかかったTの行動を大きな問題にせず、自分の胸に納めてくれた。「事情を聞いてやって下さい」と、担任の私にだけ、その事実を伝えたのであった。

Tは、その高校での三年間を、「自分とは何か」「自分とはどう生きるか」エリクソンの言う「自我同一性」の確立を求める期間とした。それ故に、教師と衝突し、友達と争い、事件も起こし、怒り、喜び、悩み、憤慨し、様々な行動もし、経験もし、貴重な出会いもした。この惑い、ゆれ動く過程、再びエリクソンを引用すれば、大人になる前の「猶予期間（モラトリアム）」を有効に使い得たのだといえよう。

「僕に考えさせてくれる学校だった」というTの言葉は、有名大学に何人合格したかで、良い学校と貼られる薄っぺらなレッテルとは較べものにならない程、値打ちのあるものだ、私は思っている。

行きつもどおり、信じては疑い、直面するを怖れて先延ばしに

し、ああでもない、こうでもないとゆれ動き、まだまだ責任を回避していられるモラトリアムを、やがて脱け出さねばならぬ日がやって来る。現実の社会とかかわり、周囲の人物と折り合いをつけ、尚かつ、真の自分自身であるような道を見定めて、一步を踏み出す日がやって来る。その時、もの言うのは、決断する力である。

ただ、馬車馬のように受験に追われて、レールの上を突走って来ただけでは、この決断する力は養われない。大学に入ったはよいが、実人生に踏み出す勇気も、自分の道を選びとる決断力もなく、いたずらにモラトリアムを長びかせ、無気力状態から脱け出られぬ青年が増えているという。

Tも又、「働こう」と決断するに至るまで、確かに長く惑いもし、安易に流れんとした時もあった。

しかし、土壇場に立たされた時、発揮されたあの決断力は、彼が、もがき、あがきながら、徐々につけていったものである。でなければ、あれ程、ふっ切れたように明るく、新しい道に踏み出せはしなかったろう。

マズローは言っている。

「ただ、柔軟な、創造的な人のみが、實際的に、未来を処理することが出来る。自信をもって、不安なく、新奇なものに直面できる人のみが……」。

#### 参考文献

- 『モラトリアム人間の時代』小此木啓吾著（中央公論社）
- 『コンプレックス』河合隼雄（山岩波新書）
- 『現代のエスプリ』No.168（至文堂）

ステューデントアパシー



## 再び〈秘密〉について

武田 秀夫

Jさんは、中学生になった今も時々、例の「恐れを知らぬ大胆な読み方」で私たちをあつと言わせます。

死人<sup>しびと</sup>のはこにや、十五人の男。

おう、おう、おう。

おまけに、ラム酒がひとびんだ。

「宝島」の海賊たちがうたう有名なテーマ・ソングですが、それをある日、「おまけに、ラム酒がとびこんだ」と読んだのには驚きました。はじめは、それがあんまり元氣よく自然に読まれたために私も他の子どもたちも気がつかず、「あれ？」と顔を見合わせ、次の瞬間、一斉に吹き出してしまいました。

が、それ以後、Jさんの創作になるその唄は私の愛唱するところとなりました。氣持が鬱屈してどうしようもないようなときに、私はひそかに心の中でうたいます。

死人のはこにや、十五人の男

おう、おう、おう

おまけにラム酒がとびこんだ  
くりかえしたっているうちに、私の心は不思議に明るんでくるのです。

もうひとつJさんの傑作を紹介しましょう。

自分たちの遊び場を守るために、ボカという少年を將軍として赤シャツ団とたたかう「パール街の少年たち」（モルナール作）の一節を、ある日Jさんは堂々と読みました。

ボカ・ヤーノシ將軍は用意してきたしんちゅうのはらっぱを  
チェレに与えた！

もちろん、「しんちゅうのはらっぱ」の読みまちがいです。が、私にはJさんの「しんちゅうのはらっぱ」も捨て難い。

たたかいに勝利した少年たちは、その直後に、仲間のネメチェクの死と原っぱの喪失という悲劇的事態に遭遇し、主人公ボカはそれをつらい代償として少年時代との訣別を果たすのですが、死にゆくチビのネメチェクは、窓を鳴らす風を聞きながら、うわごとのように、「原っぱからふいて来るんだよ、おかあさん、ぼくたちの原っぱから……。ほら、風にまじって、聞こえるだろう。らっぱの音も……。とつぶやき、主人公の少年ボカは、夕暮の原っぱで、「原っぱよ、どうしておまえはぼくらを追い出すんだ、おまえはぼくらをうらぎった！」と叫ぶ。となれば、「原っぱ」は、この少年小説において、ひとつの象徴——失われたのも人の心の中に郷愁として生きつづける少年時代の象徴——としての意味をになわされており、そうであればこそ、Jさんの読みまちがえが生んだ「しんちゅうのはらっぱ」という言葉が、異様な新鮮さで私を刺激するのです。三歳で成長のとまった男・オスカルが叩きつづけたのは「ブリキの太鼓」（ギンター・グラス）だった。「ブリキの太鼓」があり、「しんちゅうのはらっぱ」があるなら、「しんちゅうのはらっぱ」があつて何の不思議があるうか。そう独断して私は、〈子ども〉の固ま

りみたいなJさんが恐れを知らぬ大胆な読みをもって開示した「しんちゅうのはらっぱ」という言葉とイメージを、私の抽斗に大事に藏い込む――。

それにしても、死人の棺にラム酒が跳び込み、將軍から副官に真鍮の原っぱが手渡される世界――子どもの〈元氣〉だけが晴朗と満ちわたる純一無雜の隅なく透明な世界――に白い犬とともに無心に棲むかにみえた童女・Jさんが、「私にも秘密があるんだ」と深い表情でつぶやいたその秘密とは、いったい何だったのか。

が、私は、そのことが発せられた二年前のそのときも、「Jさん、その秘密って何？」とたずねることをしませんでしたし、二年たつてJさんが中学生になった今も、「あの時の秘密って、何だったの」と聞くことを自分に禁じています。

なぜなら、二十一年もの長い間、私は教師として生徒たちの秘密をかきまわり、その秘密に鼻をつっこんでいい気持になつてきたのです。生徒が、「先生にだけ秘密を話すね」と寄りかかってきたとき、私はどんなにいやしい笑いを内心にもらしていたことか。生徒の秘密に触れ得たと思ったとき、私は教師としてどれほど誇ったことか。どうしてそのとき私は、そうした生徒にむかつて、「秘密は秘密。大事にしまっておきなさい。あなたの秘密を心の中で育てなさい」と言つてやれなかつたか。「ありがとう。でも、ぼくに話さない方がいいよ。ただぼくは、あなたがなにか秘密を胸に藏しているということだけをしっかりと覚えておくよ」というようにどうして言つてやれなかつたか。そういう反省が私にはあるのです。

教師はいま、生徒の心をつかみきれない不安に駆られるあまり、

生徒の秘密を手玉にとって、それを梃子に生徒を情的に支配しようとし、生徒の方も自立できない弱さがあつて己れの秘密を持ちこたえることができず、それを安易に売りに出したがる。先日、中学校に入つたばかりの子どものうちの一人が、「Kさんっておかしいんだよ。私にね、自分の秘密を勝手にベラベラ喋舌つてね、だから友達になろうつて、そう言うの」と話しているのを聞き、私はKさんという見ず知らずのその子の必死のふるまいを痛々しく思い遣つたのですが、ことほどさように、いま学校という空間には、〈秘密を打ち明ける＝打ち明けられる〉という形をとつた教師の寛容的抑圧と生徒のナルシスティックな隸従との複合、あるいは生徒同士のもたれあい、そしてそれらが総体としてもたらす〈墓場の平和〉が、濃んだ空気のうちに充ちています。

だからJさん、猫なで声で忍び寄るもののお手にあなたの〈秘密〉を手渡すな。〈秘密〉を抱いて、仲間からの乖離を果たせ。〈秘密〉を抱いて独り立ちせよ。そのほかにいかなる生きようもないのだ、若い魂にとって。

花粉症の鬱陶しさもいつか私を去りました。味も素気もなかった食べ物、味の味、醤油の味や酒の味も私のところにもどってきました。わが教室も三年目にはいります。私は、晴朗たるJさんの美質が、思春期をむかえて変質堕落することなく、二年前の夏の午前に私の心をとらえた〈深い表情〉、秘密を藏した内面から生ずる〈深い表情〉によってそれが限なく浸透されたときの景観、魂の景観を夢みながら、子どもたちと三年目に歩み入ろうと思います。

## 〈新刊紹介〉

思春期の少年少女たちが強い関心を持ち、大人が語る自信を持てずにいる「性」。深い示唆を与えるすぐれた本を紹介しよう。

遠藤幸子作、早川和子絵『生まれる』

(ブレーンセンター刊、六八〇円)

「子どものための性教育」の副題をつけた絵本仕立ての本だが、内容は深く広い「生命をたたえ、男女平等を求め、「生を疎外するもの」を撃つ。だから、農薬を中心に、公害や原子力発電まで広げながら、美しいものとしての性を、科学的にロマンをこめて、子どもたちに語っている。遠藤さんのシリーズ「赤ちゃんパンザイ」も遂に第3集が世に出た。

根岸悦子編著『いのちと性を学びあう』

(太郎次郎社刊、一四〇〇円)

自然界のいのちを見つめながら「自分のいのち」を知るのが『生まれる』だった。しかし、私たちは自然からはるかに隔った現代社会を生きて、偏見に縛られ矛盾に満ちた日常を送っている。でも、一回こっきりの生、自分の性を肯定して豊かに生きたい。ああ、それ

は可能なのだ、と励まされるような楽しい先駆的な授業実践が集められている。

奥地圭子さんの六年生を相手に展開した質の高い性教育の後で、西川章子さんは「ほんとに人間ってすごいなあと、また思いました。男の人と女の人がいいたから、いままでの時代があつて、人びとがいたから、私たちがいるということがすごく心にひびいています。私がいまいるということは、ほんとにすばらしくて、ふしぎです」と書いている。

安達倭雅子著『電話の中の思春期』

(ユック舎刊、一四〇〇円)

子ども一〇番という、まこと現代的な職業について五年。ハイ、子ども一〇番ですーと答えたとたん成立する「私とあなた」の関係。小学生から大学生までの「子ども」の悩みや質問、相談に耳を傾け語り合ってきた生活の中から、この本が生まれた。女の子の性・男の子の性・主婦の性……の各章は、膨大な性の情報飛び交っているように見えて、本当に知りたいことを知らされていない実態を語る。安達さんは、子どもは「人間にについてはことに本当のことを聞かされて育つことを望んでいます。子どもたちは直感的に

それ以外に人間の心を強く育てるものはないことを知っているからです」と言う。

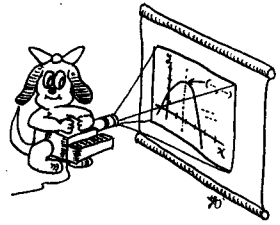
そして、「子どもたちの意識に一番大きな影響を与えるのは、両親という男女関係だ」とも。ゆえに、ご自身の夫婦、親子のありようをも誠実に記す。そのしなやかな語り口が魅力的な本だ。

リチャード・ヘトリンガー著、小池和子訳『性的自由について／学生への手紙』

(勁草書房刊、一六〇〇円)

男女の大学生に向けた手紙という形式をとって、大人の観念を押しつけることなく、矛盾や困難を見据えながらいていねいに性を語る。ハムレットの「一番大事なことはお前自身に誠実であれ」を引いて、いわゆる性革命——偽りの解放のニュー・モラルティを見ぬけ、今の時代の見せかけのもの、思慮なきものは、なんでもはねのけるために自由であれ、言葉若者に贈る。

社会との関係で個人の自由を追求する以外に性の自由を保障する道はあり得ない、という著者の思想は、日本に氾濫するこの種の本に欠落するものだ。大人がまず自らの内に確立し、その上で少年少女たちに語っていかなければならない思想だと思う。(半田)



〈二年生〉

わたしは、おとなってすごいなど、おもいます。

おかあさんは、おりよりや、せんたくをするし、おとうさんは、ちからもち。

そんな、おかあさんや、おとうさんは、そんないろいろなことがいっばいできるのが、わたしは、それを、ふしぎにおもいます。

わたしも、おとなになると、おりよりや、せんたくも、そんないろいろなことができるかなとおもいます。

とみおか しゅんすけ  
ぼくは、おとうさんに、かししゃにいつて、がんばってほしいと、おもっています。

ぼくが、ねむっているとき、かえってくるのでおかえりなさいといえないので、ときどき

## \* 学習の主人公たち \*

### おとなに言いたいこと

横浜市立井土ヶ谷小学校の子供たち

おとうさんが、おみやげをかってくれるときがあります。でも、ぼくたちは、ねています。おとうさんて、やさしいんだなあとおもいます。おわり。

たつの まさ子

わたしは、おかあさんと、おとうさんに、なんで、おとなは、ひどいけがをしてもおかないのか、ききたい。それから、おとなは、なぜみんなはたらくかもききたい。おとなは、みんなみんな、学校へいってないのからもききたい。おとなは、けいさんが早いから、なんでか、ききたい。おとなは、おこるとすぐくこわい。これもききたい。だけど、もうききたいことは、みんなおわり。

くろさわ まさと

おとうさん、なんで日よう日に、なんでか、いしやにいくの。

おとうさんは、なんで、でんきのしごとをやっているの。先生なんで、がっこうの先生、になったの。

なんでおとなは、しごとをやっているの。

いのうえ なな

おかあさんは、どうして、おもしろいおとうさんと、けっこんしたの。

おかあさん、なんで、もう子どもをうまないつてゆつたのに、あかちゃんをうんだの。

おとうさん、なんで、おとうさんはそんなに、おもしろいの。おかあさん、なんで、どうぶつをかつちやいけないの。なんで、おかあさんは、女男男ってうんだの。

これえだ やすよし

おとうさんになったら、おとなは、どうして、ペンきようをやめちゃうの。こうこうをやめると、ずっとかししゃにいつて、おしごとをやつて、どうして、やめちゃうひとがいるの。そして、大きなおうちが、どうやつてつくれるの。そして、なんで、しょくぶつでできたの。そして、どうして、てれびができたの。そして、なんで、うちゅうが、つくれたの。

さかもと ゆかり

どうして、おとなは、しごとをして、こ

どもは、しごとをしたらいけないのかな。どうして、おとなのほうにせがたかいのかな。でも、どうしておとなで、せがひくいひとがいるんだらうな。どうして、なんかうっている人がいるんだらうな。

かりや じゅんこ

おとなになると、なんにかいしやにいくのか、わからないんだけど、どうすればわかるの。わたしは、わかりたくてしょうがないから、ききます。そうしたら、どうゆうのか、わかるのかなとおもいますか。

すず木 まき子

おとなは、どうして大きいのか。子どもは、どうして小さいのか。それに、お金をたくさんもっている。おとなってふしぎだな。わたしは、おとなみたいなお金もちになつてみたい。それだけでは、ありません。おとなは、字もうまいし、女のおとなの人は、りょうりもうまい。わたし、そのあじにびっくり。わたしも、おとなみたいなおじょうりをつくつてみたいとおもっています。

〈四年生を終わった時に〉

神谷 雄一郎

まず、そんなことは、想ぞうもしなかったから、考えながら始めます。いろいろな人によ

って、やさしい大人、こわい大人、ふつうの大人というように、自分で思っている大人もいると思います。でもそういうことは、だれでも同じ。やさしくもない。こわくもない。だからふつうの人は人間の90%にもなると思う。なんで人間にお金持ち、びんぼうなど、関係あんだ。お金持ち（きたない心）をそれけいし、びんぼう（きれいな心）をしりぞけるなんてみんなぎやくじやんか聖徳太子を見習え。

（おわり）

正美へ（担任の鈴木正美さんのこと）  
今どはこのクラス受け持つの、4月5日にわかるかな。前のクラスがえのときと、やりかたがちがうな、てんきんしたらどこの小学校いくことになつてたの、これではなしはおわり、お元気で。

（かみや）

田口 美穂

まず、さいしよに、いいたいことは、たくさんある。  
☆こじきさんに、いいます。まず はたらいたほうがいいよ。あとで、かならずくろうするから。

☆よっぱらい、がらのわるい人に、いいます。まず、よっぱらいからでうす。みんながじろじろ見て、はずかしいよ。がらのわるい

人は、パーツとあかるくなつたほうが、かえって人々は、うれしくなるでしょう。

☆あんまりないんだけど、もつとしんようしてください。あと、やさしくしてください！  
なまいきみたいね。

☆あまり おさけをのまないように（タバコも♡）。タバコは、がんになりやすいからね！ おさけは、よっぱらうから よっぱらうと、おにみたになつちやうから。（ならない人もいるけど）

☆いつも 健康な体になつた方が、とくです。ね。としをとつても、元氣はつらつになるかもしれない？

☆りよこう行くとしたら、オランダかモスクワにしたら？ 自然にかこまれて、きつと、くうきがきれいかもしれない！

☆りよこうで、○○○○○○いかなん方がいよ。○○○○○○というのは、ロサンゼルスです。だって、ころされるのが多いもん。

長政 涉

①なんでこどもは車とかバイクをのせないでじてんしゃなのか。

②なんで16才にならないとバイクのめんきよがとれないのか。



③なんで18才にならないと車のめんきよがとれないのか。

④なんでおとなは、こどもにおこったりめいれいするのか。

⑤なんではたらくのに16才からなのかな。

⑥なんでこどもよりおとなのほうがえらいのか。

「マサミに一言」

①なんでさいごなのにしゅくだいだすのか。

②なんでマサミは、先生になったのか。

さようならマサミ  
おわり

太田 千づる

大人は、いい。だって、働けるからだ。

私も、はたらいて、お金をもらいたいからだ。  
家でやっているけど、すこししかお金をくれないからだ。

大人にいいなことじゃなくて大人にしてもらいたいことだったら、もっとかいたかもしれない。

川喜田 真吾

それでは、大人に言いたいことを、書きま  
す。まず、お酒をたくさん飲むのは、やめて  
ほしい。ただ飲むだけなら、いいが、よっぱ  
らって、周囲の人に、めいわくを、かける。

こんなことで、いいのか！ ぼくは、大人に  
なっても、ぜったいに、こんな人には、なら  
ない。

それから、ふうふげんかは、ぜったい、や  
ってほしくない！ 大人も、いやだろうけれ  
ど、聞いている子どもは、もつといやだ。ぼ  
くは、ずっと前、がまんできなくて、とうと  
う口をはさんで、けんかをためてしまった事  
がある。

そのほか、子供を、自由にあそばせてく  
れない『おや』も、ぜったいやだ。子どもか  
ら自由をうばう『おや』は

さいていの『おや』だと、  
ぼくは思う。子供に、自由  
を、かえしてほしい（えら  
そうにいつてゐるわけじゃな  
い）。

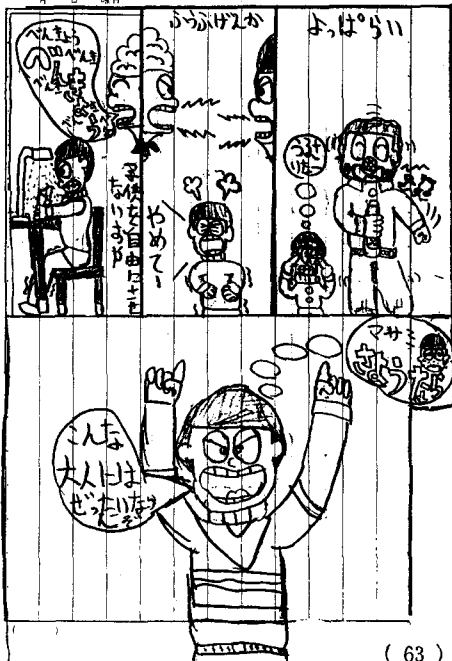
ぼくは、ぜったいこんな  
『おや』には、ならんぞ！

おわり

海野 孝弘

こまるとすぐじさつをし  
ないでください。じぶんは、  
いいかもしれないけど、も  
しかぞくがいたらそのかぞ

くがこまる。それに工場をふやさないでくだ  
さい。けむりで空気がよごれて病気になるか  
もしれない。それにでんしゃの中であまりた  
ばをすわらないでください。たばこのけむり  
でこのまえお母さんがせきをしていました。  
それにどろぼうとかをしないでください。そ  
んなことをするよりじぶんではたらいてくだ  
さい。



めかくしとつて管理教育にフー

—愛知の怒れる若者たち—

長谷川公一

五月五日、子どもの日。名古屋市では、全国でも初めての「へかんかん祭」という「管理教育」に異議申立する若者たちのお祭りが開かれた。合い言葉は、「管理教育にフー、自由な風がフー」。主催したのは、略称「へかんかん会」、「管理教育はあかん」とカンカンに怒っている若者グループである（正式名称「管理教育はあかん会」）。

千葉と並んで、愛知の「管理教育」は悪名高い。高校生が書いた『オイこら！ 学校』（藤井誠二編、一九八四年三月、教育史料出版会刊）や、かんかん祭当日の会場発言、先日放映されたNTV系のTV番組で見聞きする新設高校での集団訓練活動などからは、むしろ軍隊教育の臭いがプンプンと漂ってくる。頭髮や服装、外出に関する瑣末な規制・禁止事項の数々、体罰と内申書・人物総評による脅しと強制……。

八三年夏、愛知県を中心に開かれた高校総体批判をきっかけに、怒れる若者たちがたちあがった。「管理教育」の中で、学校と教師の偽善性、抑圧的・権力的性格に目覚めさせられた高校生、浪人生らである。

彼らは、「へかんかん会」という若者を中心としたネットワークをつくり、『れじすと』や『名古屋かわら版』などのミニコミを出しはじめた。そういうなかから生まれたのが、前記の『オイこら！ 学校』であり、「へかんかん祭」である。

五月五日、祭りの当日、どれくらい集まるだろうかの不安はすぐに消しとんだ。原宿や渋谷を闊歩するようなナウイ少年、少女が続々と集まってくる。七五〇人余の参加者のうち、三分の二は、中・高・浪人生、残りの多くも学生や二代の若者たちである。

目下浪人中の編者藤井君司会の『オイこら！ 学校』の読書会、引続く保坂展人氏を招いての交流会は、ロック会場に負けずおとらず熱気ムンムンである。教師の陰湿さが語られ、「教育」の響きにごまかされるな、自分たちは「もの」として学校で生産されてきたのだと怒りが語られ、拍手が湧く。「ウミの出しあいだけにとどまらずに、じゃあどうすればいいんだろう」と司会者。告発・批判から、どうやって現状を、学校を変えていくのか、「管理教育」をどのように超えるのか、もう一つのあり方・生き方の提示という課題は、

最後の全体集會に引きつがれる。

愛知は、「管理教育」の最先端であるとともに、若者自身が、大きな批判の声をあげている、二重の意味で最先端の地であると保坂氏。文化として、新しい潮流として、「管理教育」をこえる若者文化をつくらう、と広島からきた学生。大きな拍手の渦。「管理教育紛争」をこの場だけの一日の幻想に終わらせるな、明日からも目をつぶるなときびしい声で予備校生。

学校や教師と上手につきあえないで、あえているのは、自分だけじゃない。教師や親、大人たちの偽善や抑圧に敏感な仲間が結構いるんだ、参加者の多くが抱いたのは、同じような仲間の発見、彼らとつながれるという思いではないだろうか。また、この日まで、何度も議論を重ね、準備をすすめてきた二〇名ほどの若者たちが抱いたのは、手ごたえ、自分たちの力の実感、教室や勉強部屋では味わえなかったある達成感であろう。

よびかけの言葉は、「めかくし」として、三輪車をすてて、街に出よう。「やりたいことをすることにしてみたい。できることをやってしまいたい。やらなければいけないことをやるのではなくて。（そうすれば）自分の力を信じられる様になるかもしれない。新聞や評論家まがいの言葉をすてて、自分の言葉で話せる様になるかも

しない。『三輪車』はこぎつづけても『めかくし』を自らとることになるかもしれない。自分、私達の可能性のために」。この祭りにこめた、彼らの思いである（当日配布パンフ「反管理教育文句いんぐぶつく」より）。

へかんかん会で忘れてならないのは、全共闘世代、ベ平連世代のオジンメンバーの存在である。触媒役を果たしているのは、第三世界との交流にもつとめる市民運動のリーダーやみだし高校教師である。偽善と抑圧がコインの表裏であることに最も敏感なみだし者の共有感情が、世代体験や感性の相違をこえた連帯感をうみだしているようだ。

「管理教育」の手かせ、足かせのもとで、言葉を、可能性を奪われた少年少女たち。けれども、教師や大人は、つねに反面教師である。日常的な管理への慣れが「めかくし」になっしてしまうことをおそれながら、「三輪車」（安定の誘惑にあらがないが、愛知の怒れる若者たちは、いま、自分たちの言葉、メディア、仲間、居場所、祭りを手にしはじめている。

「見える管理」に最も脅かされているのは、「学校」のなかの少年少女たちであろう。けれども「学校解放新聞」の「元気印」へかんかん会の「管理教育にブー」などなど、これら直截で感性的な批判のスタイルは、批判それ自体を楽しむ、したたかな若者文化の誕生を告げているようだ。めかくしをとって、自分たちの言葉で、語れ、集え、若者たち！

## 児童館で働く中から

四方 淑子

児童館はどういうところか、まず紹介したい。児童館は、児童福祉法に定める児童厚生施設であり、「児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操を豊かにすることを目的とする」施設である。児童館の役割は、(1)児童の遊び場、自主活動の場の提供、(2)児童が豊かで多様な遊び、活動の体験ができるよう指導・援助する、(3)仲間作りを育て、仲間による自主的活動の援助、(4)地域社会における健全育成活動を援助し連携して、地域の教育力を高める、の四つに分けられる。その役割を果たすための主な事業は以下の通りである。(1)一般的事業(日常活動、集団活動、行事)、(2)幼児グループ、(3)学童クラブ事業(小学一〜三年で、放課後の保育に欠ける児童の保育)、(4)地域の青少年育成活動に対する事業、(5)広報・広聴活動(以上中野区児童館のしおり参照)

私の場合、児童館に勤めてやっと三年目に入ったばかりのため、まだ不勉強ではあるが、私なりに感じたままをまとめてみたいと思う。

一般児童が訪れぬ午前中は、幼児の時間である。週二

回は三歳以上小学校入学前の幼児とその母親を対象に、幼児グループ(幼G)を行っている。幼Gでは、遊びを通して集団に慣れ、友達づくりができるよう指導、また母親に対しては、子育てを自分だけでなく皆のものとして考え、そのために活動できるよう援助している。そこでの母子の姿は様々である。絵を描く時、自由に描かせ見守る母親と、いちいち口出しする母親。フィンガーペインティングの時、思う存分その感触を味わっている子と、指先で少しさわっただけで「汚い」とすぐ手を洗う子。紙芝居の時、いつまでも私語をやめない母親。六月頃からは母子離れて活動するようになるが、「子離れ」できず世話をやき続ける母親と、不安気な子を励まし努力する母親。教材は我が子の分さえあればよい、と必死の母親。月に一度、母親が先生になる「おかあさん先生」の時、母親らしいアイデアで頑張る母親たち。

私は不安になったり、感心したりである。一年後、やっと子供たちが集団に慣れ、まとまった活動ができようという時、「卒業」である。しかし、幼G開始〜卒業までの子供の変化を考えると、無関心だった母親が関心を持ち始めている

ことや、真剣に対応し、感じとつてくれる母親の姿は確実に子供に伝わっていつていることがわかるし、児童館の活動も意味があると感ずる。

下校時以降は、主に小学生、時には中・高生が訪れる。児童館は不特定多数の児童が、様々なニードを持って訪れ、家庭や学校では見せぬ本音を出せる場である。

また、その子供が、それぞれどんな悩みや思いをひきずって、ここへ来たかがわかりにくいいため、対応もたいへん難しくなる。が、いずれにせよ、社会のルールに反する「いけないこと」をした時には、きちんと話す。一度言っただけで聞くはずのないのが子供だとしても、折にふれ話すことにより、社会のルールを身につけていくのではないだろうか。私が職員になりたての頃驚いたのは、「返事をしない、あいさつをしない」子供がとても多いことであった。そこで私は、遊びにきた子供や道ばたで会う子供に、できるだけ様々な形で声をかけるように心がけることにした。「知っている人に会ったらあいさつをするのは当然」と感じる子供になって欲しいからである。

ところで、最近言われる、・弱い者いじめ・同年齢集団でしか遊べない・うつぶんのはらし方が陰険・こわいと感じるものがない・何が危険か全くわからぬ

まま育っていく等の現象は、児童館でも見られる。それは、子供たちが何かを訴え、受け入れて欲しいというサインであるのかもしれないのだが……。

さらに地域へ目を向けてみる。そこには、ゴミ収集日の問題、犬のフンや放し飼いの問題、氾濫する様々な物等、日常疑問に思うことも多い中で、子供会活動、児童館へボランティアとして来て下さる方々、非行防止のために自主活動が始める母親たちなど、子供のために頑張る人々の姿もある。このようにプラスもマイナスもある地域社会の中で、子供はいろいろなことを学びながら育っていく。地域の大人が子供に関心を持ち、よりよい子育ての環境を作りあげていく健全育成活動、その拠点としての児童館の役割は大きい。だからこそ、児童館が地域の教育力を高めるために働きかけ、地域が子供に関心を持つ活動を行うことが意味を持つ。こうして子供のこと、子育てを考えることは、イコール自分自身を豊かにし、成長することになるのではないか。

「真剣に」子供にかかわっていききたい。それは真剣に自分にかかわることでもある。大人は皆、このことを忘れずにいて欲しいと思うのである。

(東京都中野区立沼袋西児童館)



◆Weの講読を継続するに当たって私の感想を書きます。

まずやはり「新しい家庭科」というタイトルについて。アンケートの内訳をみても家庭科の教師が多いので仕方がないのかも思いますが、教育問題への取り組みを一般の読者にも広げるためにはやはり一考を要すると思います。一般的教育問題、婦人問題の中に、「新しい家庭科」のあり方の重要性を重点的に主張していく雑誌であればよいと思います。

次に、コマ切れの小論文—この言い方が失礼なら、大人の軽い発言が多すぎると思います。「ひとつ

のテーマに対してまわりからあれこれ言っているけれど核心をついて掘り下げたものが少ないね(これは私のツレアイの意見)。なぜかと考えてみたのですが、教育問題を扱いながら、子供の意見がない。老人問題を扱いながら老人の意見がない。または、現場の取材がない、ということによるのではないかと思います。スタッフの問題でできないのかもしれないけれどポーター制などできないこともないと思うのです。依頼原稿ばかりでは—自分で歩かないと紙面が死ぬ—とはよく言われることですが、紙面のマンネリ化のひとつの原因ではないでしょうか。「学習の主人公」をこそ、もっと大きく取って、主人公に登場してもらおうことです。しかも大人からみた主人公でなく……。

それに執筆者の固定化がみえて来て、これから新しい人の発言がでて来るのかしらという疑問が、どうしてもでて来るのです。いつ

か「身内の情報交換」という批判をみたことがあります、私も同じ感じを持ちます。(略)編集スタッフにその意図があるとは思えませんが、せめて、でき始めたWeの輪がヨソ者(身内でない人)をはねとばすような傾向をもち始めるのはどんな場合でもこわいことです。

まだ字の大きくなった新しいWeを見ていないのでマトはずれになるかもしれませんが、もうひとつ気になるのは「地味な内容」であることと「ビジュアル」であることは決して相反するものではないのじゃないか、という疑問です。「地味だけれど役に立つ」から固くギチギチであっても我慢すべきだというのは、編集者の甘えだと思っています。固い本が売れ行きを落としていくという全体的な傾向はあっても、真面目にやっているから支援して欲しいというのはなく、地味な内容、そして「楽しいページ」、主張するWe!を真正面から掲げ訴えるべきです。

楽しくするために、地味な内容をいかにビジュアルな紙面処理にして読みやすくするか—編集者の責任だと思っています。なにもかもオモシロクすれば—と言っているわけではありません(キツイ発言だとは承知しています)。

例えばカットがところどころに入っていますが、ひとつひとつは素敵でも、内容との連動のないものが多いようです。内容をイラスト化するだけでもいいぶん楽しくなるような気がするのです。グラフィカルなものならもっとよいのですが、コスト高になって無理でしょうから。

地味だけれどたのしいWeにならんかな—と考えています。いろいろと勝手なことを書きましたが、人間(私)って横着だから、どこかでホツとしたいというのが本音かもしれません。書きながら、外野は無責任に言えていいなあと思っ

(東京・平山たか子)

◆四月号の『波』を読み『人間の大地』は、私も読みたいと思つていた本だったので、早速買つて、読みました。難民問題はユネスコでもかかわっており、講演会や街頭募金なども、ここ何年か行つていたので、絶対に必要な本でした。先日教育テレビで、犬養さんのお話を聞き、烈々たる気魄と行動力に圧倒され、会う人毎にその話をしていた最中でもありました。

頁を開くと目に入った児童画。どこかで見たことがあると思つたら『ふるさとカンボジアは遠く』からとつたもの。一昨年、難民問題をテーマにした講演会を催した折、会場でこの児童画を販売したことがありました。残つた分は、花巻市内の小学校に寄附したので

すが、あの児童画はほんとにつらいものでした。肋骨をあらわに描いている子どもの素朴な表現が、労働の苛酷さ、飢えのひどさを訴えていて涙が出ました。

『人間の大地』、第一頁目から、

著者の熱い願いと怒りがあふれていて、その迫力はタダの本ではない。これを讀まないと人間の資格を失つてしまうような感じですが、その悲惨なレポートは、とてもみんな読んでしまえない、この世の地獄。カニに生きながら食べられてゐる少女たち。それでも男に犯されるよりはましという——

何ということでしょう。犯(侵)されるもの、犯(侵)すもの、同じ人間であるということ——。読んだ日から、この情景が目にも胸に強烈に焼きついて離れません。

(北上・押切郁)

◆五月号は、わかつたふりではなく納得する頁が多く、私の頭に入りきらないほどです。

4頁「家庭科があぶない」。どういうことなのか……。誰があぶなくしているのか。読んでいるうちに、家庭科の先生があぶない、というのではなく、人間教育があぶない、そして女はもつとあぶない。ちなみに言えば雇用平等法が

このまま通過すれば、女は全滅、病める女が多くなるのではないかと悲しくなります。

28頁「自分の生活と家族」……新聞を読んで心を痛めておりまして、中里先生のような先生が小学校にたくさんいて、基本的に人間の生活の教育がなされていたら事件は起こらなかったかもしれないと痛切に思いました。

85頁「波」……「人間(男女)が共に生きる存在だ」という観点」この言葉は身にしみて感じとりました。特に結婚する時、両性がかわす言葉にしたいですね。

85頁……「だから、誰かの理論を借りてわかつた気になるのではなく、自ら主体的に「家庭科を探求」する一家庭を建設する誰にも必要なことです。

46頁情報2……この頁で雇用平等法がおそまつに終わると心細くなりました。(石川・三石久江)

◆Weの内容の深さと鋭さに感心しつつも、主婦が読書するというこ

とは大変なことだと考えさせられます。私のような本好きの人間でも、読む時間を確保することは、

よほど意志が強くないと困難だからです。私の友人たちの中のWeの購読者は皆、前向きな姿勢で、ほんとに子どもにとって幸せな教育とは何か、親はどう協力していけばよいかなど、時間も忘れて話し合っています。でも、保守的な先生、子どもを点取虫にすること

で得意になっている先生も多く、なかなか理想的なPTA活動は実現していません。

Weの一読者として、今後とも討論会形式の記事をたくさんとり入れてくださるよう希望します。できれば一般の主婦の方でも抵抗なく読めるように、表現の上にも配慮していただけたら幸と存じます。また増刊号のように、可能な限り写真も入れて下さると、情況がよくわかつて読みやすくなります。

(岐阜・掛布禮子)

# 管理教育を超えるには



## 〈管理教育考〉

長谷川 孝

「管理教育を超える」というテーマを立てるとき、私たちはたんに「管理は無用」というだけではなく、「必要な管理」のあり方ということも考えざるをえない。教育行政は、統制・支配的な教育への管理をほぼ完成形態に近いていどまで、おし進めてしまい、いわばその完成度に比例して教育の「荒廃」の度も深まっている、と私たちはとらえている。教育に無用の管理をお仕着せているからだ。

ところが、最近、教育にさかんに発言している経済界にもまた、教育行政の教育への管理統制に、批判的な論調が少なくなない。画一主義や学歴主義、教育（学校）神話が広がった状況を批判し、教育の官僚統制を好ましくない、という「教育の自由」を主張している。

経済界のこういう主張は、きわめて情報を高度に集積したうえで出されたもので、軽視することはできない。とくに、教育行政が教

育制度にもちこんだ統制支配型（タテ型）の管理では、企業はもうやっていけないのだ。パーソナルな多様な関係を多層につくり、総体として管理する必要があるわけだ。

だから私たちは、「管理教育を超える」とき、管理の質を問わねばならず（集団主義教育をやる人たちのように、私は「よい管理」をやっているという人がきつと現れるだろう）、さらに管理教育の「管理」を超えるだけではなく「教育」の構造そのものの内側にある「管理」性、もっといえば「教育」そのものを超える視点（理念や思想、それを踏まえた実践）を、必ず求められよう。私たち自身の教育観・子ども観、つまり己の思想そのものが、根底的に問われるということだ。

一度、教育や学校や授業の観念を解体せねばなるまい。「超える」ことはシンドイゼ。



## We 春の公開ゼミナール



### 「授業」をしてみて

中 嶋 里 美

ゼミナールが終わってからまだ二ヶ月もたっていないのに、私自身はずい分変わってしまった。変化は起こるものではなく自分で起こすものだというのが、あの日以来自分の中でますます明確になってきた。

「教師」を引受けた理由は昨年のゼミナールの時、胃潰瘍で責任を果たせなかったので、その埋合わせをしたいという気持ちからだった。そして学校の中で男女平等教育をどう進めるかは私自身の仕事と大いに結びつくのでやってみようということになった。

あの日もそれ程体調が良かったわけではなく、私のエネルギーは授業とその後の討論でほとんどつき果ててしまった。一つの企画を実現させ、次の企画をその中で生み出す位の力を体の中に持ちたいと切に思う。

何回かの準備会を開く中で各人の考え方の違いもよく分り、一人一人と深く論争したい

という欲求が強く湧き起こってきた。そしてその論争の果てにお互いが疲れ切り、翌日仕事を休むということが起きてきてもいいのではないかとさえ思った。何かを深めたいという欲求が満たされることなく、義務的な仕事のみが先行するのはなんとも健康的でない。

昨日テープをもう一度きいた。授業の最後に一人一人が役割分業のない社会のイメージをどのように語っているかを確認したくて。解放された社会とは「快さ」があふれている社会という大嶋さんの発言が印象的だった。

「快さ」は受動の姿勢からは一切生まれないと私は経験上思う。快さを得たいのなら、自分が水のように自由自在になる必要があるのかもしれない。誰も文句を言わないのに自己規制し、自らに出会う機会さえなくしてはいませんか。「教師」を引受けたこと、それは私の変化に躍動を与えてくれたことである。



## 〈授業〉

まとめ

間瀬昭子・村松雅子

中嶋さんから授業のテーマ設定理由の説明、生徒の紹介の後、授業に入りました。

「長い間男女平等の運動をやってきた、自分の中に立って来た一つの仮説とは、男と女の関係の中にある問題は、世界のあらゆる事象を含むものではないか、ということ。男と女の関係が非常に自然で、お互いにどちらが差別されるとか、暴力を使うということがなくなれば、世界の関係も変わってくるのではないかと考えています。生きていくのに大切なものは経済、政治防衛などで、男と女の関係など小さい問題だよという感じを持っている人も多いと思います。けれど男と女との関係こそ、基本的な人類の問題であるというのが私個人のテーマです。例えばベストセラーになった『妻たちの思秋期』の中に、役

割分業の中で非常に悩み、アルコール中毒になったA子さんの例や、また夫の単身赴任による埼玉県蓮田市の心中事件など、役割分業の中でアル中になったり、自殺したりという悲劇が生まれています。男も女ものびのびと生きられる社会をどのようにして作っていくのか、というのが今日のテーマです。『現代の性別役割分業を変えていくためには、自分の思ったこと、例えばPTAで「父兄」等の言葉などに対して、勇気をもって訂正を求めなければならないのではないか。あなたの職場や家庭ではどうか」

(中嶋)

学校に勤めているが、男だから、女だから……という雰囲気はある。女の教師もほとんど疑問を持たず、家庭では家事、育児を全部やっているようだ。そのことについて話をする暇もない程職場では忙しい。

(河口)

大人を変えるのは難しい。若い人は変わります。家で手伝いをしない男児に対しては、言葉で「しましょう」と言ってもダメで、大人が見本を見せるべきだ。女の人は、男性がお茶をいれても平気になること。生活の中で当たり前と気付いた人からやっていくことが必要。

(吉田)

「男の人はどのような時変わるか」(中嶋)

男一般は非常に変わりにくい。生まれた時から男社会の中で育てられ、それを当たり前とと思っているので、性別役割分業のおかしさに気付くのが非常に難しい。自分は結婚してから差別に気付き、子供が生まれてから、止むを得ずかなりの家事を分担するようになった。職場でのお茶汲みは自分の飲みたい時、周りの人にもいれる。新人の女性にはお茶汲みはしなくてよいと宣言している。

(坂上・義)

分業を止めた時、どんな男女関係になるだろうか。この社会である限り分業は必要だ。

男女関係の分業をなくしただけでどうなる問題ではない。男・女という生まれだけで分業が決まることは不合理だ、と言われると思うが、自分で選択した役割をすればよいという時代になった時、男は仕事という意識を持つた男がいて、しかし女性性は平等でやろうという意識を持っていて、果たしてどちらの方が正しいか決められるのか。又逆の場合も……

(山田)

「山田さんはレポートの中でも、男性文化・女性文化をなくしてしまったら、男と女との関係はセックスだけになる。またユニセックス化が進んだ社会は味気ないと問題提起をして

いるが、どう考えるか」

(中嶋)

男と女の違いで唯一残るのは、女は孕む性  
ということ、その他はほとんどない。いか  
に人間らしくなるかということで話を進めて  
いくべきだ。

(吉田)

分業が産業社会の効率を保つ面はあるが、  
固定化はそれなりの妥当性を持つという意見  
に対しては疑問がある。男らしさ・女らしさ  
については、生物的に差はほとんどなく、人  
間らしさしかないという説と、山田さんのよ  
うに男性文化・女性文化というものがあった  
こそ世界は豊かな意味を持つのではないかと  
いう二通りの考え方がある。「らしさ」の性  
別規範が強制的なものとしてあるかどうかと  
いうこと、産業社会の中で果たしてその女  
らしさが本当に開花しているのかどうかとい  
う問題がある。

(長谷川・公)

「愛妻弁当を作ることが女らしさと思われて  
いるのではないか、ということについてどう  
考えるか」

(中嶋)

弁当を作ることによるコミュニケーションもあ  
ると思うけれど、他のやり方でもコミュニ  
ケートできるということが男性にわかっても  
らえなかった。

(奥田)

愛妻弁当を持つて来るのはよいが、愛を表

すのに、女だったらこう、男はこうと固定化  
するのに疑問を持たなければ。ゴミ集めでも  
一年に一回くらいすべての人が仕事を休ん  
でもすべきである。

(前田・敦)

自分の中には女らしさは見当たらない。自  
分らしさしかない。

(坂上・真)

男性・女性を考える場合、思いやりの欠如  
という問題ではないか。

(山田)

思いやりも男と女では違うのか。(大嶋)  
異質の方が面白いのでは。

(山田)

男・女より、その人らしさが原点であり、  
自分らしく生きるのがよい。(長谷川・陽)

(長谷川・陽)

「女らしさ・男らしさから自分らしさのどこ  
ろに話が流れたようだが、最後に性別役割分  
業のない社会とはどんな社会か？」(中嶋)  
見せかけの生き方をしない。女性から言  
うと、コビのない社会。

(前田・敦)

愛妻弁当もあれば、愛夫・愛息弁当もある。  
家族や職場の中で、それぞれがやりたい  
ことができる。

(福田)

ものすごく能率の悪い社会。(坂上・義)  
残業がなくなり、定時に夫が帰宅する。

(秋山)

その人らしさを認めあう。

(落合)

性別役割分業のない時代は、すべての分業

がなくなるので、小規模で、生産性が低く、  
人類の曙の時代に逆戻りする。(長谷川・公)  
個人個人の自己表現が必要になる。(奥田)  
お父さんお母さんと呼ばせることによって  
も、子供はその言葉のもつ既製の価値観を受  
け入れて育つのではないか。(牧野)

役割分業で問題なのは固定化。自然の分担  
とか、得意・不得意は残る。(植垣)

各人にとつての快さを追求し、相手の快さ  
も尊重することができる。(大嶋)

男性・女性という区別は残る。(山田)  
今まで女性だから出来なかったことを広く  
誰もが味わえる。(長谷川・陽)

(長谷川・陽)

役割分業がなくなる過程で、男女とも厳し  
さ、責任を要求される。逃げ道がなくなるの  
でしんどいが、それを越えようと楽になる。今  
男社会の生き方に対して意識的にドロップア  
ウトしないとダメである。役割分業がなくな  
るということは、今の家庭は崩壊する可能性  
がある。新しい形態が作り出されるべきだ。

(吉田)

個人レベルでは気が休まる。その中で最初  
から育つ子供は自分らしいものを持って育つ  
のではないか。自分の価値観を見出せる社会。

(坂上・真)



## 〈討 論〉

まとめ

川名はつ子・蔡 和美

今現場で教育に携っている三人から授業の感想を語ってもらい、全体討論に入りました。

〈女らしさ〉の表現は、心をこめたお弁当？

高校の英語教師三井マリ子さんが、今までこのような授業にチャレンジしたことがなかった。生徒の服装が自由で个性的であり、先生と生徒の構成も、カップルであったり、母子・兄妹・夫婦で生徒であったり、いろんな組み合わせがあって未来を感じた。人数も20人位でちょうどいい、すばらしい授業をありがとう。と口火を切ると、三井さんの同僚の山下文明さんは、自分で弁当を作って持っていくと、「女ができた」といわれる。それは

笑いとはしてしまいが、男女の問題に関しては、議論して三井さんに負ける。今、男と女の問題を論じることがもつともラジカルだと思ふ。と発言。続いて高校の家庭科教師芦谷薫さんは、先ほどの授業の中では、〈自分らしさをこそ〉の声が強かったが、現実には〈教師らしさ〉〈母親らしさ〉〈女らしさ〉など、いくつもの〈○○らしさ〉という固定化されたイメージでタガをはめられていて、それが見えざる管理につながっていく。少女向け雑誌は、どうしても男の子に好かれるかばかりを書きたて、女高生たちは、「明日はお弁当をもってこなくていいよ」を英語では何というかと尋ねてくる。そして買い物もしたことがない同僚の男教師。そのような性別役割分業を問い直したくて家庭科の授業を組んできた、と現場での問題を語りました。

管理教育の中のタブーにいどんで

会場からの発言のトップは、中学一年の時から学校に行っておらず、来年通信制大学にでもと考えているという若い男性。ある北欧の女性と同棲して、男女の役割分業の問題に理解が広がったと、現在の教育制度の枠の外での生き方を紹介してくれました。石川県か

ら参加した古田励子さんは、女性史を勉強して、〈女らしさ〉を要求する社会の方がまちがっていることを知った。夫君とはいざこざの末、役割分業を変えることで幸せな現在に至った経緯をユーモラスに語り、会場を湧かせました。

続いて静岡の家庭科教師梶原公子さんは、男だけの家庭科の授業で女と男の生き方を考えてきて、共修をという声が大きくなった。高教組新聞に性教育の問題を載せるなど、本質的な問題は、管理社会ではいやがられるがそれを越えなくてはとタブーにいどんで奮闘している模様を語ってくれました。

又、横浜から「管理教育を超えるには」というテーマに興味があつて参加したという井上節子さんから、授業に参加した生徒が皆名札を左胸につけていたのはおかしい、当たり前とされていることをもう一度考え直し、一人がユーモアをもってつぶして行く中で、管理教育をのりこえて行きたい。と話しました。子供三人を学校に通わせて、管理教育の恐ろしさを痛感しているという柴崎和恵さんも、教師は授業の中味を通して迫ってゆき、親は学校・教師に対してキチンと言っていく。子供たちが学校でどうされているか、子供た

ちの感性が踏みにじられていることに、親も教師ももの申して行こうと呼びかけました。

そして、管理教育をこえることを地域でやってみよう、教師と親がどうやってつながっていくか、それが最も重要だという指摘があり、学校にごく普通の人が入って、生徒と話したり、授業をしたりとか、親・市民の声をもつとまとめて出してゆこう、教師は親に働きかけて問題を出してゆこうなどの提案がされました。

又、三井さんは、昨年ニューヨークに滞在して、アメリカの日本企業での女子社員教育の名の下でのすさまじい女性差別を調査した経験などから、企業側はもはや教育を先どりしていること、それは家庭科の女子のみ必修を20年間もつづけてさせてきた私たちの責任でもある。女子のみの特性教育はおかしいと提起して日本国中で論争したい。世界の中で日本は強者の位置にあり、それを支えているのが私たち一人一人であること、差別をなくして行くには、個人プレーでは限界があり、もつと「地球的視野」に立って政治を変えていかなければと、怒りをこめて訴えました。

さらに東京の福井浅子さんから、一人一人が疑問をもって、チャレンジ精神をもち、へら

しさ」のカラを破っていこう、自分がかわつて共鳴者をふやしてゆきたい、と。埼玉の男性教師は、生徒の名簿の順番や家庭科共修に関して地道な実践を積んできた。大上段に構えるのではなく、身近なところで一つ一つやっていこう。など、次々発言が続きました。

連帯と団結をはばんでいるものは何？

戦前派という市民の方が男の子と女の子を差別しては育てなかったが、生まれた時から違ふ、女性の被害意識ばかりが強いが、会社でも男の方が大変だと思ふ。女の人は甘えの意識が強くて団結できない。と発言。

これをめぐって、育児休業が開けたばかりという教師は、教育の中で女の子は母親になるべくして育てられている。休業中に家に行くと、団地では昼間女と子供しかいない。子育てに父親がかかわれない現実がある。性別分業がなくなつて労働時間が短くなれば、男と女の関係だけでなく、女の分断された状況も克服されるのでは、と述べ、加藤由美子さんは、地域で性別役割分業のため子供や夫に縛られているから、一人一人が自分の生活の場から身近なことを考えて、おかしいことをおかしいと言ひ続けたいと提言。又、皆川鎮

枝さんは、男女雇用平等法の闘いが、女の分断された状況をかえていくのに、非常に重要な意味をもっている。もつと市民が参加して、同法に対する怒りで連帯を！と呼びかけました。これに続いて石川由紀さんは、女が団結するには、自由になる時間とお金が必要であり、それには性別役割分業を変えることと、経済的に自立することが必要だと思ふと話しました。

若い学生は様々な意識を経て、今自分自身の「女らしさ」を肯定的に受けとめられるようになったと発言。優性保護法を阻止する学生の会でパンフを作り、高校で話してとてもよかったという経験や、学校のPTAで母親と読書会をもち、お互いに自分自身の問題を話し合ってきた例などが紹介されました。

このように二時間にわたって、熱心な討論が交わされ、司会の芦谷さんが、管理の常套手段である分断をされないよう、それぞれの場で考え、手を結んで行こうとしめくくり、最後に半田さんが、今日出された課題、積み残した問題を、夏のフォーラムで引き続き考えてゆきたいといひさつし、会を閉じました。（お名前のわからなかった方たち、明記できずにお許し下さい）



## 植垣 一彦

### 〈生徒に なってみて〉

レポートを提出しなかった生徒の弁。例えば教室で、子供たちが揃って「えーッ!」と声を出すことがある。今これを、「一人ずつ発表してもらおうかな」といったような教師の要求への反応と考えると、むしろいい。尻上がりに語気を強めて引伸ばすこの一種独特の言い方の裏には、「そりやあないぜ」という拒絶と抗議の意思が込められている。つまりは管理と権力性への異議。生徒役を引受けた後、予想外のレポート提出を言い渡された私にとって、「実験授業」への違和は、この種のものとしてまず私をおとずれた。そしてその違和は、レポートの課題そのものの中に固

さ、と排他性を感じられたことで更に増幅。むしろ違和感はそのまま私自身の宿題へと移行してゆく。男女の性的な分業が人間の分業の発生とするのは正しいか、「スカートめくり」と「夫婦のセックス」を無頓着に同じ位相で論じられるか、等。かくて、下降するばかりで今だにレポートは書かれていない。

## 前田 敦子

社会通念こそが絶対の権力であるこの国で、「結婚こそ女の幸せ」「家事育児は女の仕事」とマスメディア、学校、親がこぞって骨の随まで教えこんで来ているのに対し、男女の役割分業に異議を唱える人の声は余りにも小さいと言えます。活字にも、Weのような集まりにも無縁である人、家族の世話だけにあけくれ、「これでいいのだらうか」といらだち疑いつつ暮らす人に、「あなたの人生で一番大切なものはあなたですよ」と語りかけ、人と比べての優越感や出世のためにひたすら頑張ることの空しさを、生命と生活を大切にすること、人と人の美しい関係こそ求めるべきだと訴えていくために、マスメディアを使うことを考えるべきではないでしょうか。もちろんラジオ、テレビ等は莫大な資本が独占

していることも承知の上で、画一化し現状維持の日本のありようにゆさぶりをかけるには、広い層の目ざめが必要だし、その手段として、マスメディアにまさるものはない故に、女が作るプログラムを夢みるのです。

## 大嶋 せい

「性別役割分業のない社会というのは、どのようなものだと思いますか」と問われて、ふと考えこんでしまった。

「生徒」になったみんなも、言葉につまりながら、幾人かは饒舌に、それぞれ少しづつ違ったイメージを語る。「うん、全くだ」「んーと、そうかなあ」「あつなるほどね、そういつたことは考えてもみなかった」等々、たくさんの方見と、たくさんの方の考え込む「タネ」。ただ残念だったのは、たくさんの方の面白そうなお話がいかかわらず、限られた時間の中では、あまり生徒同士の議論ができず、欲求不満が残ってしまった。

このテーマについて、縁あって、この実験授業に集まった人と、また、もっともといろんな人と、いろんな機会に語り合いたいものだ。

(写真は、六・七月号ともに小林志夫氏)

## 〈公開ゼミナールに参加して〉

◆坂上真理さん・福田緑さん（自分のやりた  
いことをやれる社会、それを保障できる社会  
に）に全面的共感。坂上義雄さん（非能率的  
社会になるだろう）、吉田清彦さん（頭の男女  
平等に体がついていけないで離婚）、牧野敦史  
さん（お父さん、お母さん意識のない社会）  
たちの意見をおもしろいと思いました。

最後の中嶋里美先生のしめくくり（何て平  
凡なことを、しかし、これをまだまだやらな  
くてはならない現実）と全く同じ思いで授業  
を見ていました。

山形から、進路の仕事で上京。しかし「We」  
のチラシで知った公開ゼミに参加することを  
最大の目的で来ました。日頃「We」の先生た  
ちの非管理的な発想に感動して購読しており  
ましたので「管理教育を超えるには」のテー  
マに飛びつきました。

男らしさ・女らしさを、感覚的にも拒否し  
ているのに、学校においては先生らしくなり  
管理的傾向が年々強くなり、服装検査にも昔  
ほどの気恥ずかしさがなくなりつつありま  
す。必然的に教師対生徒の相互不信が起こり、  
そういう中では「男と女の違いは、産むか産

まないかだけだ」という私たちの考えが、生  
徒に入っていくかいないのは当然のことだと思  
うようになりました。

また、もう一つ自己改革の道が見えてきま  
した。しかし、全然発言もしないで、帰るの  
ですから、とてもナガイイ道程です。各種学  
校で強力になされている女子の礼儀作法、し  
つけの件や、出席率90%の卒業条件の件、教  
師と生徒の関係の件、親子関係の件等々、ふ  
っくらなければならぬことがたくさんあり  
ます。でも、ふっきたすてきな人たちがた  
くさんおりました。無職の人、男の人が大変  
多く、「We」の層の厚さ、東京の層の厚さに、  
おもしろく聞きました。

（山形・教師・30代の女性）

◆子供の時から「おかしい、変だ」と思っ  
て、今もずっと考え続けていることと、ピ  
ツタリ重なる意見をたくさん聞くことができ  
て、心強い思いがしています。私自身につい  
て言えば、若い時から「仕事をずっと続け、  
子供が生まれたら、男でも女でも家の手伝い  
をさせ、自立した人間に育てよう」と思っ  
ていたのですが、生まれた子供は二人とも体が  
不自由で、心ならずも専業主婦をやっていま  
す。男女の役割分担社会は変えていくべきだ

と思っていますが、障害のある子をもった母  
親、病気の老人を抱えた嫁さんという立場に  
いる女性には「期待される障害児の母親像」「期  
待される嫁さん像」みたいなものとたたかう  
のに、ずいぶんエネルギーを必要とします。  
今は「かせぐばかりが自立でもあるまい」と  
割りきって、ボランティア活動という形で、  
少し社会参加しています。

専業主婦の人は、夫と子供の話しもしない  
とおっしゃった方もありましたが、決してそ  
うではなく、専業主婦をせざるを得ないとこ  
ろに追いこまれている人たちもいるのです。  
専業主婦をやっている女の人、ガッチリ会社  
に管理されている会社員とも手を組んで運動  
をすすめていかなければ、社会は変わってい  
かないと思います。

（東京・30代の女性）

◆現状の不平等な雇用条件は、確かに問題が  
あると思いますが、やはり日常生活の身近な  
所から産業社会を見ていく方が共感が持てま  
す。例えば毎日の炊事・洗たくなどについて  
男がするか、女がするか、又やりたい人がす  
べきなどを問題にするより前に、合成洗剤な  
どを平気で使っている僕たちの日常生活とい  
うものを、もっと真剣に見つめていくべきだ

と思います。女性も自由に仕事ができることは、とてもよいことだと思いますが、その前に多くの子供が母乳で育てられていないことなどを、もっと問題にすべきではないでしょうか？

さらに、自分らしく、自然に、肩のこらない、のびのびと生きぬいていくために、男らしさ・女らしさを演ずるのを、すべての人がやるべきだと思います。自分の劣等感や欲求不満を、男らしさ・女らしさに逃げ込んでしまい、袋小路に自分を追いつめる必要はないと思います。(以下略)

◆管理教育と男と女の生き方と、どのように結びつくのかと思っておりましたが、結局生き方、あり方に影響をし、管理教育の中、管理されることになってしまふこわさを考えさせられました。自由に生きるとはどういうことか、そのためにどんな教育が必要なのか、今後とも探っていった下さい。

(東京・学生・20代の男性)

◆女子大を出て、家庭科教諭として県立高校に勤めて、三年が終わろうとしています。女らしさのおしつけに対して、腹を立ててきたつもりで、ちゃっかりそれを利用して自分のやっとなつていくところです。

◆公開授業はつきり言つてつまらなかつた。なぜなのか、帰りの電車の中で考えてみた。中嶋さんが、女は抑圧されているという固定概念を押しつけるところから始まっているからだと思う。これではおもしろい授業が展開するはずがない。私は授業の後でもなお、レポートが書けないという植垣氏に一番共鳴する。

さて、高校生の男女にしろ、大人の男女にしろ、多くの男らしさ、女らしさの夢にまどわされているようです。小さいころから形成されている夢ですが、大多数の人が、それに自分があてはまらないのを知りつつ、演じているような所があります。問題は演じているのを、自分で意識しているかどうか、仕事・

女は本当に抑圧されているのか。だとしたら、抑圧しているのは何なのか。男だつて抑圧されてるんじゃないか。としたら、何が抑圧しているのか、というようなことから考えないで、現実的な話だけするから、討論がちょっと噛み合わない。べんとう作りやお茶汲

みなんて、やりたきややればいい。いやならやんなきゃいい。お茶汲みとレイプを同じレベルで話したのは(根のところでは同じ部分もあるかもしれない)、フツウの男はソッポを向いちやうヨ。(中略)

啓蒙しようとする人は、自分はあるつもりがないから、周りを変えることなんかできるはずがないと思う。肩書はずして対等に向き合わなくては、連帯なんてできない。働く女が「専業主婦はダメだ」と固く考えているうちは世の中変わらないと思う。どんな人とも、相手を理解しようという努力なしには手を結べないと思う。

私はかつて専門学校の教員だったが、人サマを教える「ことの恥ずかしさに耐えきれずに辞めてしまったというだらしない前歴を持っている。だから教員を続けている人はすごく立派だと思うけど、自信持ちやちやてる人より、教えることの恥ずかしさに必死で耐え続けている先生が好き(なぜか、ドイウワケカ、ザンネンダケド、男性の方がそういう先生多いみたい)。(中略)

エラソーなこと言つてすみません。でも聞く耳持った方々だと思つて。

(千葉・商業・40代の女性)



ストップ ザ 男女別

中 嶋 里 美

与謝野晶子は女向けに書かれた本は読まないと言った。

「愛のイェントル」の主人公も男向けの本を買うには「父が読むので」と偽らざるをえなかった。

山本寛斎は姉の『それいゆ』をみてデザイン感覚を磨いた。ある男の学生は聴講したい教授が女子大でしか教えてないと嘆いて投書していた。

世界の多くのエネルギーがこの男女別という壁の中で閉じこめられてしまっている。資源を大切にしましょうというのなら、世界各国の首脳はこの男女別の枠を先ず第一に取り払うべきである。こうした枠がなかったら、私たちはもっと多くの与謝野晶子を生みだし、もっと多くの山本寛斎を生みだしていたであろう。言葉も色彩の世界ももっと豊かさにめぐまれていただろう。

私たちが豊かな感性や知性にめぐまれた世界に生きたいのなら、男女別枠組を一日もはやく取りこわす必要がある。

先日進路の調査をした。男子でも二年間勉強して社会へ出たいと思っている場合もあろうが、短大は九九パーセント女子向け。

近々私の学校でも行なわれる体育祭、何も言わないでおけば、女子は何かを縫う作業に男子はアーチ等の組立て作業になってしまう。来週あたりから準備が始まる。時期を逃さず生徒に訴えよう。

体育祭で私が最も好きなのがスウェーデンリレー。男と女が交互に走り、最後に担任が走る。数年前アンカーをやった時の生徒の応援が「ぬかれないで！ぬかれないで！」でとても切実感と一体感があって思い出す度に楽しくなる。スウェーデンには、男女平等大臣、男女平等委員会をはじめ実に平等の言葉をつけた部門が多いという。それを読んだ時、我が校の男女平等教育係もグローバルにみれば実に安定した存在なのだと思った。

四月号に書いた男女混みの出席簿を一年間検討することになった。争点は機能的・能率的という考え方と人間を平等に扱うという考え方のぶつかり合いになりそうだ。避けては通れない問題である。どう乗り越えるか、どう説得するかがためされそうである。ただ私は今年三年生の担任を持ったので、自分のクラスでは男女混みの名簿を作り、週番の順番はそれを使っている。クラスで初めて受持ちの生徒を前にした時、何故そうするのかを話した。たった一つ従来の伝統を変えるということがかなりのエネルギーを必要とすることがわかった。しかし一番最初の挨拶の中にこうした話をしたので、今の生徒に対しては自分の過去・現在・未来を卒直に語れるようになってきた。実にリラックスして生徒の前に立てる。それが最大の収穫であった。クラスでの進路指導の時も、私自身がたどってきた道を話しながら、自分には何が欠けており、制度的にはどこに問題があるかを語った。進路指導ではクラスの父母や、新しい人間関係を生み出そうと努力している卒業生や知人からも話をしてもらいたいと思っている。

男女平等の学校作りをするというのは、男も女も飾らずに卒直に自らを出すことなのではないか。そこがすべての出発点だ。



## 萬葉の女たち・男たち

### 《紫の匂へる妹を》

井田

邦弘



茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る(一一二〇)

紫の匂へる妹を憎くあらば人妻故に吾恋ひめやも(一一二一)

#### 謎の美女

額田王と大海人皇子(後の天武天皇)の絶唱です。ときは天智

七年(六六八年)五月五日。すでに夏。ところは近江国の蒲生野。この日、夏の陽ざしがふりそそぐ紫野を舞台に、葉狩りの行事が華やかにくりひろげられたのです。

額田王。——魅惑にみちた万葉歌人です。この人のことは『日本書紀』の天武天皇の条に「天皇初め鏡王の女額田姫王を娶して十市皇女を生しませり」とみえるだけです。あとは万葉の十二首の歌を通じてその生涯を推察するよりほかありません。謎の美女です。

#### 紫の相聞

額田王の歌。紫草が茜いろに照り映える御料地の野を行きながら、あなたは袖を振られる。あれ、そんなになさっては野守に見られるではございませんか。かつての夫からの愛のシグナルを、かつては歓びかつは当惑している心おどりが、読む者の胸にひびきます。大海人皇子は、「紫の」という言葉をすかさず返して歌いました。紫草の匂うように美しいあなたが憎ければ、いまは人妻であるあなたをどうしてこんなに恋しく思うものか、と男らしく堂々と答えています。すばらしい相聞歌です。

この二つの歌は、実はそんなに深刻で純粋なやりとりではなく、

宴席での余興の歌だ、という説もあります。当時額田王はすでに四〇歳前後で大海人皇子には幾人もの妃があつた。今さら昔の女性への未練でもなからう、というのです。

#### 心の底の想いは

もう一つ、別の解釈を紹介しましょう。刑法学者瀧川幸辰氏(一九六二年没)の説です(『学問と世間』二一六頁以下)。

通説はおかしい。近江朝時代は、まだ男女の地位は平等に近く性道德も男女の間にさのみ差異はなく、愛するから同棲する、別れたくなれば別れる、という関係にあつた。今や額田王は皇子と別れて天皇の妃となつている。それなのに皇子は人前もはばかり袖をふる。心外である。「茜さす」は「私は天皇の妃である。昔の女に對し未練がましく袖をふる姿を他人に見られて恥ずかしいか」という皇子へのたしなめと抗議ではなかったか。これに對して皇子は「人妻は承知だが恋しいから袖をふるのだ」と弁解したのだ。こうみてはじめて筋が通る。

以上が瀧川説です。同氏は、その自由主義刑法学説の故に、一九三三年に京大を追われた人で、イエスとノーをはっきりいう人でした。専門外の人の着眼点はひと味ちがいます。

いま、滋賀県八日市市の船岡山にこの二首の歌碑があります。さま変わりをしたとはいえ、かつての夏の紫野を見おろす丘です。この歌碑は、額田王の心の底の想いを果たして知っているのでしょうか。

更年期の女性の症状としてよく言われる不定愁訴と今日の中高年男性に多発しているウツ症状とは同じ原因によるものだろうか。肉体的な限界と不調、夢中で登ってきた人生の坂も下り坂、かわいかった子どもたちも思うようには育たなかった等は共通している。でも専業主婦の多いわが国では、子育てや家族の世話以外にまだ十分自分の力を出し切っていないため人生の折り返し点を過ぎてむなしさとあせりを感じて苦しむ女性が多いのに対して、男性は力を出し切ってがんばる中で疲れ果ててしまったというケースが多い。もっと女性も力の限界をためすことができて、玉の輿に乗ることなど期待しなくれば男女ともにずいぶん気持が楽になることだろう。妻子を養ってらんだという男としてのプライドとひきかえに、外では平身低頭、卑屈さばかり身につけてしまった男性も多いし、物質だけを求めて真実をみる目などまるでない女だと夫を不満に思わせている女性も多い。自分をとりまく外側の生活が多岐にわたり、複雑に構築されていくのに比例して、内面の充足もあればいいのだけけれど、男女ともになかなかむづかしい。

そして、とても悲しいことだけれど、若さを失うということは、男女が向きあい求めあう新鮮な好奇心が薄れていくことでもある。だから自分の忙しさだけで手いっぱい夫婦であっても相手の内面を見つめることは少なくなる。相手が何を感じ何に苦しんでいるのかもわからないことが多い。この状態が危機的であることを本能的に察知して、中高年男女の不倫の恋などというものがふえているの

だろうか。そして女性が仕事を持って各職場に進出するようになって、法律相談でも職場での世帯を持った者どうしの恋愛関係のもつれが数多く持ちこまれるようになってきている。現在の中高年男女は、あまり異性を知らずに少しの縁で結婚した人が多いので、今になって合性の悪い相手と一緒にあったと後悔する例が多いのだろうか。今日に特徴的なようにも思い、今後ますますふえそうにも思う。

先日も私の友人が、職場で気の合う尊敬できる異性とめぐりあったので家族をすてて出直したいと思うと言ってきた。それでも自分の無責任さを責め、汝盗むなかと毎日自分に云い聞かせて押さえているのだという。でも心は物ではないので、誰も支配することはできないのだと彼女は言い切る。具体的な種々の制約や困難に打ちひしがれながらも彼女は生きる喜びにあふれ若返っていた。人間どうしが惹かれあい仲良くなるのが悪いはずはない。特に男女が理解しあえるなんてすばらしいことだ。ただ二十年以上もつれそった相手と双方とも理解しあえず苦しめ合うということは、日常的なレベルでは自分自身の問題に立ち向かえないので他に逃げたのではないかという疑問をいだかせる。生活の積み重ねがあるだけ、若い時のように恋する人ができても手離しでは喜べないのである。縁あって一緒にあった夫婦の間でも、相手の心まで支配できないのは言うまでもない。孤独に耐えながら心の交流をというのが中高年の知恵であろうか。

話題はガラリと変わりますが、女優といえ  
ば、イングリッド・バーグマンがいいので  
す……。古いですねえ。残念ながら亡くなっ  
てしまいましたが、その後何本カリバイバル  
上映されたものは全部見にいきました。ほん  
とに美人ですねえ、うっとり。

これは願ってもない本。彼女が親友と共同  
で書いた自伝なのですが、8ポ二段組六〇〇  
頁のボリュームに加えて、四ヶ所にまとめら  
れた写真多数有。ははは、実はこの写真が第  
一目的で買ったんだもんね、この本。

内容も、予想以上に面白かったです。ま  
ず、ハリウッドの有名な監督、俳優そのほか  
の人たちの話や映画づくり（「凱旋門」「カサ  
ブランカ」etc.）のエピソード。いきいきし  
ていて拔群に楽しい（ただし洋画に興味のな  
い人には退屈かも）。

イングリッド・バーグマンの人生はドラマ  
そのもののよう。スウェーデン出身で英語が  
下手だったことや地のままの自然な容姿・演  
技でデビューしたことなど、ハリウッドの大  
女優としてはかなり特異なスタートだったの  
ですね。人気ナンバーワンにまでのし上がっ  
ても、むしろ舞台でのジャンヌ・ダルク役に  
執着し惚れ込んだりして。



ほん

## 『イングリッド・ バーグマン マイ・ストーリー』

小田亜佐子

さて、お仕着せの役柄にうんざりしていた  
彼女は、ロベルト・ロッセリーニ監督の「無  
防備都市」を見て、雷に打たれたかのような  
衝撃と感動を覚え、どうしても彼の映画に出  
演したいからと、夫と娘を残したまま、一人  
イタリアに旅立ってしまいます。世界中のマ  
スコミはこれを大スキヤンダルとばかり、上  
を下への大騒ぎ。ロッセリーニと彼女を盗み  
撮りしようとする手この手、二人はホテルか  
ら外へ出ることもままならない。この辺はロ  
ス疑惑三浦氏密着取材という勝負？

またこの、ロッセリーニ監督という人の奇  
妙きれつさが、もう一つの面白さ。どうお  
かしいかというところ読んでみてのお楽しみ。  
結局、ロッセリーニとの映画は失敗し、彼

女はアメリカ世論から激しい非難を受け（離  
婚はまだタブーだった）、映画界からしめ出  
されて挫折の日々を送ります。その間に三人  
の子供を産み育て、舞台の仕事が続け、つい  
に、再びアカデミー賞に輝くという華麗なカ  
ムバックを遂げます。じつに心にくいばかり  
のサクセス・ストーリーであります。

大好きな演技にありつただけの情熱を注ぎこ  
む彼女には「仕事か家庭か」なんて選択は存  
在しません。この飽くことのない情熱とエネ  
ルギーはどこから来るんだろうとつくづくう  
らやましく思う限りです。

けれども、自己の情熱に従って自我を通す  
強い意志のある人には、他人をひきつける魅  
力がある反面、いやおうなしに家族をまきこ  
む、あるいは省みない危険とのほざまに置か  
れるはず。多くの男たちにみられるこう  
した生き方を、女であるイングリッド・バー  
グマンは取ってしまったために三人の夫、四  
人の子供との絶え間ない葛藤に直面させられ  
ます。機会があればイングマル・ベルイマ  
ン監督「秋のソナタ」をご覧になって下さ  
い。彼女の演ずるピアニストはあたかも彼女  
自身のようにです。『イングリッド・バーグマ  
ン マイ・ストーリー』新潮社、三八〇〇円

のつけからなんです、私は映画をあまり見ません。

別に深い理由があるわけではなく、単に怠惰だというだけです。だからできるだけ見たい映画を厳選して「これしかない」と思った映画だけを、月に二、三本、大枚千三百円を払って新宿まで見にゆきます。

そういうわけですから、やっとこさ見にいった映画、しかも大金を払った映画をけなすなんて、そんなもったいないことできません。どんなに腹がたった映画でも一ヶ所ぐらいいいところはあつたもので、そこを喜んでいればそんなに損をしたという気分を味わわなくてすみます。

逆に試写会なり、招待券なりをもらってタダで見にいった映画は、これでもかとけなしたくなります。どんなにおもしろかった映画でも、どこか気に入らなかつた所を見つけたし、ブービー言います。性格が悪いのです。ところで、この「愛のイェントル」は不幸にもタダで見ることのできた映画だったので、前評判がよかつたので期待していたのですが、期待しすぎだったのかしら。

この映画はバーブラ・ストライサンドという「フーニー・ガール」でアカデミー主演賞

をとった女性が、製作・監督・脚本・主演・歌唱と一人五役で完成させた映画であることでもず話題でした。さらに、女に学問が許されていない二十世紀初頭の東欧を舞台にして、どうしても勉強をしたい娘イェントルがついに男装して大学に入るといふ、フェミニストであるバーブラの女性解放の主張もこめられていて、何でも評判でした。

確かにバーブラ・ストライサンドはすごい。「不可能なことはなにもない」というセリフが何回もでてくるように、バーブラは一人ですばらしくがんばっています。

バーブラを見ていると勇気づけられます。けれど「愛のイェントル」という一つの作品としてみると、バーブラの姿しか印象に残

## シネマ



### 愛のイェントル

遠藤 由紀 (カットも)

らないので不満が残ります。

私は「炎のランナー」という映画が大好きなだけけれど、あれは登場人物と音楽と風景と時代とが見事に融合して、私自身が彼らと共に生きてきたような印象が残りました。

「愛のイェントル」にはそれがありません。ストーリーにしても少女マンガをよみつけた私には、たいして新鮮にうつりません。

映画を見ている間、ずっと頭の中で「池田理代子だ、池田理代子だ……」とつぶやいておりました。彼女はあの「ベルサイユのバラ」や「オルフェウスの窓」の作者で、男装の女性が作中よくでてきます。

少女マンガには昔から男装の女性がよくでてくるようです。それだけ少女という性には制約が多いということなのでしょう。

どう考えても、男子に家庭科が許されていない二十世紀後半の日本を舞台にして、どうしても勉強したい男の子がついに女装して家庭科をうける「愛のオペントゥ」なんていうのはできそうありません。

でも、まあ、一人五役の快挙に挑み、見事にこんなにメジャーな映画にしたあげたバーブラ・ストライサンドには、なにはともあれ拍手拍手でございます。

## ありのままに生きること

沖 永 紀 子



子供たちと泥まみれになって遊べる仕事に就き、日に焼けた顔、あざや傷だらけの足に草履をはいてる私。元気で、行動的で、子供っぽく、小さなことにくよくよしない、といった人間を演じたい。それなのに私は小ぶとりでどうもその体が邪魔になる。「女っぽいね」と言われるのを嫌い、「かわいいね」「おもしろい人だね」という評価に喜ぶ私は何なのだろう。

ある時、おしゃべりの途中、男の友達から「今日、水色のブラジャーしてるでしょ」と言われ、ほろ酔い気分がスーッとさめた。

自分が隠している「中身」を見られた時のいやな感じ、これは相手の自分を見る目が変わることへの恐れであったのかもしれない。

洋服を脱いだ私は、顔に対してアンバランスな体、女っぽいおっぱいやおしり、太い足を持ち、実は気が小さく、毎朝洋服を選ぶのに三十分もかかる、劣等感で固まった二十三歳の女である。

本当は、ありのままの姿で、まわりの男や女とつき合ってゆきたい。男の雑誌にのった女の裸を、男のような目で見てしまう時のいごちの悪さから逃れたいために、世間や男の枠組みから抜け出すために、女としての自分を隠したいのだろうか。

しかし、私が女であることは変わらないのだ。女であることが劣等感とつながるように感じるのは、

実に生きにくいものだ。

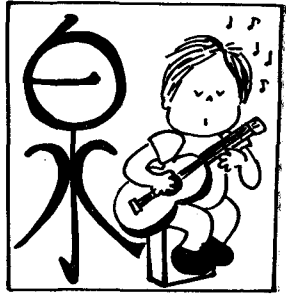
障害のある女性たちとのつきあいで、女としての自分を見つめることを教わった。既存の結婚―出産の図式に組み込まれない彼女たちが、それにとらわれることなく、新しい女像を作っている姿は、私にとって大きな刺激となった。たとえば、初めてタンプオンを手にして、トイレの介護をした時。他人の体を見た経験は、自分の体や機能を見つめてみようというきっかけになった。

もちろんむかい風のメンバーの中にも、既成の女のイメージはらいきれない場面が多々ある。だが、たとえば他人の結婚や幸せにイジイジしてしまったりする本音を語り合い、そんな自分を確信しながらも、もっと住みやすい、もっと生きやすい世の中にしてゆきたいと語る。

彼女たちとのかかわりの中で、いつの頃からか、自分が障害者だったらかったのかもしれないとすら思うようになっていくのに気がついた。しかし、考えてみれば、隠してしまえる自分の「中身」を、隠すことができないなら楽なのに、と言うのは、自分の内にある差別意識をあらわしたに過ぎない。

外面の美しさや世間の常識にとらわれ、小さなことで悩んでいる自分を変えてゆきたい。そして、まわりの男たちと、女たちと、本当に生きやすい生き方を作ってゆきたい。

今、私は、「お年ごろ」と言われ、周囲の言葉にいろいろと揺れ動いている。ただ、結婚なんてしないよ、とつぶやるのではなく、反対に、婿さん募集、なんておどけるのではなく、私が一生働き続け、様々なものを吸収してゆくのに、生き方を共にしてゆける仲間を作り、あわよくば、そのような人と愛し合い、生きてゆきたいな。



汲めど尽き  
せぬ泉の  
ような情報  
の頁にした  
いのです。  
あなたの情  
報、お寄せ  
下さい。

# ◆集会—日本女性会議などや

・日・所 7月21日(土)22日(日)、名古屋市公会堂、三浦会館、鶴舞公園陸上競技場他

・内容 21日「アメリカにおける男女平等と司法」サンドラ・D・オコーナー女史、活動交流会他 22日分科会◎学校教育と男女平等◎家族・地域・子育て◎女性と労働◎女性と福祉◎草の根の国際交流◎ひろげよう平和の輪◎手をつなぎ、生活を変えよう◎女性と農山漁村◎婦人問題行政の推進、全体会「婦人差別撤廃条約の批准にむけて」

・問合せ先 名古屋市民局婦人問題担当室  
☎052-961-1111 内線3134・3135

◆女性学講座—「性役割の固定化・流動化—性役割の形成と教育—」

・日・所 8月3日(金)〜5日(日)、国立婦人教育会館

・内容 「性役割の固定化・流動化—見直しからの出発」井上輝子、分科会「家庭」学校「社会」「文化」、シンポジウム「性役割の固定化・流動化—性役割の形成と教育」、公開講演会「現代社会の女性と法律」人見康子

・参加者 女性学に関心のある成人男女で、全日程参加できる人、三百名。参加費無料。

・問合せ先 国立婦人教育会館 埼玉県比企郡嵐山町字菅谷728 ☎0493-62-6711

◆We夏季フォーラム—「自分らしさをこそ—解き放て、つくられた役割意識—」

・日 8月6日(月)〜8日(水)  
—詳細は96頁のピンクチラシ参照

◆映画—「水俣の甘夏」から視えるもの

「何が楽になったってああた、真夏の暑い盛りに雨合羽着込んで農薬を振らんでも良くなつた。そりゃあ、こげん良かこつは無かですよ!」と汗だくの顔を腕で拭い、水俣病患者、家庭果樹同志会の井川さんは言う。チツソの垂れ流した水銀に海を追われ、出稼ぎを余儀なくされていた漁師たちは、当時流行し始めた甘夏みかん栽培に自らの生活を賭けた。にわか百姓たちは、農協に教わるまま化学肥料と農薬を大量に買い込み苗を育てた。しかし

水俣病に蝕まれた体は農薬に人一倍敏感で、噴霧が終わってから畑で倒れる仲間が相次いだ。なんとかならんかと、無農薬・有機農法を目指し同志会を結成して、丈夫な樹作りと豊かな土作りに取り組み始めた。以来八年余の84年現在、49所帯で70tもの味わい深い甘夏を、全国の消費者の元へ一箱ずつ手紙を入れ産直で送っている。記録映画「水俣の甘夏」(16ミリ55分カラー)は、同志会の人々の一年間の息吹きを追ったものだ。撮影中の83年夏、同志会で禁止されていた除草剤を六人の会員が使用するという事件が起きる。農薬会社の安全宣伝に釣られてしまつたりなど理由は様々だが、会は揺れる。深刻な討論は数カ月にわたり、六人が『失敗の会』と自ら名乗りをあげ全国の人々に事件を公表していくことで会は再び団結して行く。日本中が「水俣」化している現在、辺境の地から発せられた希望のメッセージがこの映画には熱く込められている。映画の御利用を切にお願いする次第です。

(江田民雄)

・問合せ先 青林舎 東京都港区西新橋2-8-13 第一東京ビル ☎03-504-1706 (フィルム貸出3万円、販売30万円、ビデオ販売4万6千円)

半田 たつ子



玉川上水ぞいの遊歩道は、東京には珍しい土。靴裏の感触が柔い。フェンスで守られた水辺には、さまざまな草が自生し、鈴蘭に似た白い花もひっそり咲いている。一週間後には、また別の花が囁き交わすに違いない。心の隅々まで緑に染まって、津田塾大学の門を入る。「女性学」を語らためだ。

講義開始時刻より四〇分も早く着いた日、津田梅子氏の墓に詣でた。三人の学生が蝶のように舞っている広いテニスコートをまわつて、野の花が供えられた簡素な碑の前に佇つた。

TUMIE TSUDA

DECEMBER 31 1864 AUGUST 16 1929

テニスボールの弾む音、少女のような学生の  
の明るい声。津田梅子氏の生誕から百二十年  
—この間の女性の歩みを、女史はどんな感懐  
で見守っていらっしやるのだろう。

森林浴のできるキャンパスをゆつくりと教室に向かううちに優しさが心に満ちてきて、ここは私のオアシスになったなあとと思う。

「女性学」は公開講座で、常時出席者は、学生七〇名に対し、市民九〇名。私は講義内容に、ロマン・ローランの「女性の世代は、その時代の男性の世代に比して、常に一世代の隔りをもって進歩しているか、おくられているか」という問いを投げかけた。

かである」を引いて、「机上の学問として女性学を追うのではなく、自分にひきつけ、私たちが置かれている現実を直視し、掘り起こしていききたい。それが、あなたの批判精神を鍛え、生きる原動力になることを願う」と記した。

特に、前の席を埋めた市民の方の熱気はすごい。「前列の私の母ぐらいの方が、熱心にうなずきつつ筆記していらっしやるのを見て、私の人生経験の乏しさを痛感しました」と書いた学生もいる。

立教大学で教えた最初の年、中国人留学生が十人近く聴講していた。彼らも極めて熱心で「先生の日本語は大変美しい。勉強になりました」とか、「今日、先生は朝鮮動乱と言われたが、あれは侵略戦争です。次の時間には必ず訂正して下さい」と言いに来た。日本女子大でも、出版社に勤める聴講生が、学生には到底太刀打ちできぬ落ちつきで、模擬授業をしてみせた。多様な体験を持つ、異年齢の人によってクラスが作られているよさは、今までも体験してきたが、市民が数の上でも学生を圧倒しているここでは、一層強く感ずる。

学習への意欲と、こちらの話に対応する実体験を持っていることが、これほどに打てば響く活気を生むのか、と驚嘆させられる。84  
年前期、一回こっきりの講義であることも、私の中に快い緊張を生  
んでいるのかもしれない。管理教育、学校非行……一切は悪夢かと  
すら思う。ここは別天地なのだろうか？

しかし、学生の中に「女の先生から、女だけが『女性学』の講義を聞く限界」を指摘した者がいた。その通り。毎回男性の姿も見られるものの、決してベストの学習形態ではない。今月号で、加美芳子氏がエリート女子高校の問題性を指摘されたように。

加美氏の文章で、私がうれしく、強い共感を抱いたのは、エリ！



ト校と称せられる学校で働く教師の口から、「こんな学校が少数存在するためにどれだけの犠牲が払われて」いるか、という言葉が発せられたことだった。私がもし津田の学生だけを相手に「女性学」を講じていたなら、多分私はオアシスとまで思えなかっただろう。

講座が社会に開かれたものであるゆえに、大正生まれの方を含めて、さまざまな年齢の人々が、入試にも偏差値にも無縁に「学びたいから学んでいる」ことで私は救われているのだ。

少年・少女たちが巨大な学校化社会の中でがんじがらめにされ、悶え苦しんでいる。そこに追いつめた「学校」「教師」、はては「教育」そのものについて、批判も告発も出尽くした感があるいま、ではどうしたらいいのか、どこから手をつけたらいいのかの知恵は、容易に生まれない。

四月以来の津田での体験は、これまでの私の教師としての経験の中にはなかったものだ。まだ日も浅く、感覚的にすぎないことを承知の上で、あえて言えば、学校が武蔵野の自然のたたずまいの中に在ること。学校がその門を社会に開いたこと。資格・条件を問わず、学びたい人が集まったこと。この三つに心がうるおうのだ。

津田塾大学には、一般教育科目の中に、総合という学科目があり、「女性学」の他に「現代文明とエコロジー」「学問・平和・人間」を開講している。前者は「年度ごと」に現代の切実な問題をとり上げ、学生・教員が協力して運営にあたることによって、大学における教学の新しいあり方を探る企て」であり、後者は「学生の側からの強い要望にもとづいて設けられたもので、学生と教師がともに学ぶ姿勢で、講義・演習両形式を併用し」と、学生便覧に記されている。

こういう試みが、せめて高等学校で、いや中学校でも、できない

ものだろうか。できないなら、その理由は何か。そこを考えることが必要ではないか。こんなことを考えていた時、朝日新聞五月十七日の夕刊で、進藤栄一氏の文を読み、目の前が開けていくようだった。「構造的暴力」についてである。

「ひとりの夫がひとりの妻をなぐったとき、それは普通の暴力。一万人の夫が一万人の妻を無知の状態に押しとどめおいたとき、それは構造的暴力となる。前者は見えるが、後者は見えない。前者は法によって罰せられるが、後者は法によって保護される。それは法そのもののなだから。

たとえば、富める人々だけが教育を受け、上流階級の寿命が下層階級のそれの二倍あるような社会、特定の宗派や集団だけが権力の座につきうるような社会、そこでは、構造的暴力の頻度と強度は高まる。(略)」

中学のトップクラスだけを集めた高校が存在することに、初めは何と恵まれたと驚き、同時にうしろめたさを感じられた加美氏は、容易に見えない「構造的暴力」に気づかれたのだ。

進藤氏は次の文で結ぶ。

「以来平和を、単に身体への暴力の、つまり戦争のない状態ととらえることの愚かな限界を知った。逆に平和を、単なる暴力ではなく構造的暴力のない状態ととらえ直したときはじめて、頻発する途上国の戦争と先進国の少年非行との哀しい連続体、あるいはマルス(軍神)の影の相貌に気づき、抑圧されしものへの鎮魂歌をかなでざるをえなくなる。」

津田塾というエリート学生の集まる大学が採用した、「構造的暴力」をつき崩す手段に、私は救われたのである。

# 読者の会だより

（We 江東の会）

◆毎月開いている江東の会は、どういうわけか今回連絡不十分で、五月号誌上に載った

「四月二十八日午後二時」にあわせてスケジュールを調整した人も居ました。ところが三日前になっていつもの文集が届き、見ると夜七時になっています。これはいけませんよねー。「電話連絡網を作りませんか」と提案したのですが、世話役さんは「口惜しくて泣いちゃったおかしなPTAの大問題」でアタマも心もいっぱいだったようで――。

「ねえねえ、私のグチ聞いてくれる」で始まったPTA役員会なるもの、最近はお金の使としても派手になる一方のようで、お金の使い途なんかに「納得いかない」なんて言おうものなら、総スカン食ってしまう。「今までもこうして来たんだから」と言いくるめられるのは口惜しいが、さりとて一人で頑張るには力不足でー、というハナシでした。同席の小学校教師Mさんは「どこにも同じような傾向はあるようですが、私のクラスの役員は親

子共々たのしむ機会を一生けんめい考えてくれたよ」と助太刀したのですが、「PTAってどうしても要るのかなア」と、かなり深刻でした。私なら自分の役目だけさっさとやって、「おつきあい」の部分は「御免」と断るけれど、それも行かないのが「ふつう」なかもー。

鈴木まき子さんが他の十数人と共著の『学校歳時記』というすばらしい本をみなさんに紹介しました。江東区に三十数年住んではいても不勉強でほとんど知らなかった江東の文化がひっそりと美しく受け継がれていることを教えられ、誇りに思えるような、小学生高学年にちょうどいい位の本です。是非ごらん下さい。次回は五月二十六日、七時からです。

（武末久子）

（We 武蔵野の会）

◆例会は四月八日。例年なら井の頭公園が桜でピンク一色に染まるはずのところ、今年は大雪でその気配さえなく、花見を期待していたのに残念。半田さん、中野さんを交えて十名ほど。それぞれ近況報告を兼ねた自己紹介のあとは、一月号「84年ことし私はー」を中心に（のはずでしたが、ほとんどテーマを気にせず）、家庭や職場で心にかかるあれこれ

について自由に話しこむ。

いつも思うことだけれど時間の過ぎるのが速いこと。Weに集うということで初めての方とも一応の共通理解や信頼感を持つことができて、前置きが要らず話の核心に入っているのはほんとうにうれしい。人の話に聴き入ったり、それに反応してゆっくり考えながらものをしゃべったり……という時間は、毎日の生活の中で意外と持てていないと反省。特に私など仕事と子育てにバタバタと日を送っているの、この数時間はありがたい。

ところで問題は子どものこと。共働きの我が家では日曜日は三歳の息子とすごす貴重な一日。暖かくて晴れていれば家事もそこそこ一緒に外へ飛び出す。そこで会のある午後はいつもひとめがある。三人一緒に行くか、それとも子どもは外で遊ばせるか……。迷った末、大抵夫が子どもと外で過ごすことになる。Weの会だからこそ家族で共に――という想いも強いが、三歳を過ぎて片時もじっとせず走り回っている彼を見ると、室内で数時間じっとしているのはやはり無理かな……とも思う。そうだ。その内青空のもとでやりませんか。「酒を飲みながら夜に……はどうか？」と傍でつれ合いもつぶやいています。（荒井紀子）

# 〈We 埼玉の会〉

◆埼玉Weの四月の例会は、二十九日狭山ヶ丘に住む坂上さん宅で行われました。十一人も人が新緑のなかの春風に乗って集まって来ました。両手に一杯お菓子を持って。なかでも好評を博したのは手作り「パンプキンブデイング」。当日新たにつくられたWeの会ノートにはそのお菓子の作り方がしつかり記録されました。

半田さんをはじめ、当日は久しぶりのお顔、初めての方などを迎えてか、ワイワイ、アハハ：話の跡切れるひまなく皆さんよくしゃべりました（ねえ）。自分の思うことを、人の言葉でなく自分の言葉で語ることがこんなに楽しいものか、つくづく考えさせられる一時です。開け放った窓からはすがすがしい風が入り、自然と心が解放され体が軽くなるのを感じたのは私だけかしら。これこそまさしく桃源境といった心境でした。運動を広めることとは大変で、差別を口にするのはしんどいこととだけんど、こうして新しく知りあった仲間と同じ時を過ごせるのはなんと楽しいものでしょう。もっともこれも、たくさんの工夫と努力によって成り立っているものでしょうが、こうした創造力ある人間の持つ力のなん

としなやかなことか……。

つたない、私の受けた感動だけを記した報告になってしまいました。次回は六月二十四日、前田さん宅です。お近くに住まわれるWeの読者の方はぜひ一度覗きにきて下さい。歓迎します。

## 〈We 愛知の会〉

◆五月の例会は高校・家庭一般の家庭経営の分野を検討しました。（一橋・東京書籍・実教の三社）。教科書なんて読んでもおもしろいものではないと思うけど、いくつかに比べながらみてみると、それなりにおもしろいというか、各社の個性が現れているのがよくわかるのです。この三社の中では、一橋出版の編集の姿勢が明確で、男女性別役割分担をはっきりと否定していることをほめてあげたい!!

それと「主婦」という言葉が使われていないこと、裏表紙の「ある生活史」の蛇行ぶりがよい。実教出版のは、愛知県では使われている率が一番高いとかで注目したのですが、しっかりと役割分担肯定で、もしかしら女子のみ必修の家庭科教科書の古典になるかもしれない!! 東京書籍のは、なんかこう、もひとつというところですか（ほんととは、もつとて

いねいに検討したのです、念のため）。

さて今月は、半田さんと一橋出版の方（男性二人）が飛び入りゲスト。それに中日新聞の記者さん（男性）も。初めての方三人を含めて二〇人近くの参加者で盛会でした。男性諸氏にもっと話をしてほしかったのですが残念ながら寡黙な方々でした。半田さんから、家庭科共修問題のホットな情報紹介。国会での江田さんの質問の話が印象的でした。（ぜひ議事録を読んでみてください）。

六月は引き続き高校・家庭一般の保育の分野を検討します。（岡本のりこ）

## 〈Weの会カレンダー〉

6・16	愛知 名古屋市勤労婦人センター (052・412・9683 宮崎)
6・24	埼玉 前田宅 十一時半 (0429・42・7560 中嶋)
6・30	江東 二時 (03・682・6401 松本)
7・7	さがみ 神奈川県立相原高校 二時 (0462・24・1983 熊谷)
7・8	山形 山形教育会館 (0263・31・1421(宅)2370 佐藤)
7・14	城北 北区十条出張所 二時半 (03・914・6053 川名・夜間)
愛知	6・16に同じ 二時



わたしからあなたに

◆夫の赴任地、西伊豆の小さな温泉町に来て三年。いつも、よりよく生きたい！と思つて細い糸をたぐりよせていると、必ず片方を同じ思いの仲間が、ピンピンと引いてくれて、そこからすばらしい出会いが生まれる。こうして、私は、十二・三人だが謙虚で真面目な町の女性たちの消費者グループと活動を共にするようになった。

▼私たちは、合成洗剤や食品添加物の毒性を知る。すると、有害物質をナントカカントカ（我々に理解不可能なよその星の言葉のようだ）いいながら平気で許している政府の姿が見えてくる。国民の生命とひき換えに、米国にニコニコ顔をする国の代表者たちが見えてくる。ここで、私たちは、台所と政治が直結していることが分る。又、経済最優先の国の方針と、同時に、そういう価値観にひきずら

れている私たちの生活への反省も生まれてくる。

合成洗剤の追放をする時、私は、今まで、その毒性ばかり訴えてダメダメだといってきた。しかし、これでは敵も多くつくることに、やつと気がついた。石けんを作つて、みんなに配り、石けんの良さを強調する方がより定着しやすいと分った。無農薬野菜等も同じで「自然淘汰で本物を！」をモットーに、もちろん、合成洗剤の恐ろしさも折り込みながら、である。

▼今、「農薬ブーメラン」という、ひにくない現象がある。先進（？）諸国で、消費者運動等によって、使用禁止になった農薬や医薬品が、第三世界へ輸出され、人々の生命

をむしばんでいる。それだけでなく、それらによつて汚染されたバナナやコーヒー等が、又、先進国に逆輸入されているという、笑

話のような本当の話。ここでも、私たちは、私たちの使い捨て、浪費生活は、第三世界の人々の貧しさの上に成り立っている、という、加害者の立場も認識する。台所のバナナ一本から、世界へと、視野が広がってゆく。

▼月に一度の勉強会に、みんなは一軒一軒の家庭で闘つて、そして出てくる。私は、夫と一歳の子供と三人の生活なので、勉強したことが、夫や子供のためにもなるからと、あたり前のように堂々と出られるが、まだまだ保守的慣習や意識の支配的でないかでは、主婦が、夜、出ること、非難ゴーである。

「女は男より一段下の人間だ」「子供を放つたらかして行くつもりか」等といわれて、出られない同性的たちもいる。消費者グループでありながら、私たちは、女性差別

というでっかい壁を避けては通れない。それで、差別はどうして生まれたか？これから私たちは、どう生きてゆくか、私たちの意識の奥深くまで支配している性別役割分担というものを、克服してゆこう、という視点で、女性史を一年余り勉強した。仲間の転出等により、一時とぎれたが、また五月からやってみよう、と準備中である。

▼私たちは、勉強することによつて、みんな怒っている。怒つて、おっかなびっくり重い腰をあげて動き出しつつある。動くともた新しいものが見えてくる。こういうのが、本当の学問であり科学であると思う。学校で教えているのは、アレは何だ？と思う。是非、よりよく生きるための手段となるべき、歴史を国語を英語を…そして家庭科を！

▼私の一番の悩みは、仲間をどう

して増やしてゆくか、ということ。夫が姑がーといって、半分責任転嫁をしている人が、「それでも!」と、自分で自分のおしりをたたいて、出て来てくれるような、エネルギーをどうやって導き出すか? (おこがましいが、適当な言葉がみつからない)、又、差別と感ぜない人々に、どうやって「ハッ」と気付いてもらえるか? 三無主義・ノンボリの私が、今まで、グループ活動を通して、変わって来たように、人間は、どんなにがんばらんと心の持ち主でも、みんな、自分で自分を変革し、共によりよい生き方をしてゆける可能性を持つていけることを信じて、諦めず、しつこく……自分自身を磨きつつ。

(静岡・平井和子)

◆We 五月号でテレビについて書いておいでの方が、私も同じような感じでいましたので、少々思っていることを書いてみます。

テレビを、特に番組をとりあげ

る場合、どうしてもストーリーを追うことになり、そうすると、知らず知らず送り手の論理に巻き込まれてしまうことが、時として起こります。テレビは、やはり一つのテクノロジーとして、その特性及び固有の限界に、常に目を光らせている必要があるように思えます。番組論というのが果たして成り立つのかどうか。その辺のところから再考が必要のように思われます。視聴者側からのテレビ論が確立していないところに、もっと大きな問題があるのでは、と考えます。

これまで評論家といわれる人たちが、映画や小説を論ずるのと同じように、テレビの作品評をやってきていますが、ご存じの通り、今日ではそうした論じ方が、テレビに関しては、とても空虚であり意味がなくなっているのではないのでしょうか。私たち視聴者がテレビをどのような状況の下でみているのか、そしてまた個々の番組

がどのような仕組みの中で作り出されているのか。その辺のところを除外してテレビについて語るのは、大変危険だというのが、このごろの私の感じているところ……いずれ、詳細に検討してみるつもりです。(神奈川・鈴木みどり)

◆私は某大学の大学院において、家庭内の夫婦の関係を、男女平等の思想のもとに考えていこうとしている者です。理念の上では男女平等が確立されていますが、まだまだ日常生活の中にあつては、従来の「男らしさ・女らしさ」のもとの男の在り方・女の在り方が、男と女の生き方の上に大きく影響していることは否めません。

だからこそ、男と女についてのステレオタイプとしての性役割の見直しを志向する議論、性差別をなくそうとする主張運動が、近年盛んになってきているのは大切なことだと思えます。これからの夫婦のあり方、職場での男女のあり

方を変えてゆく力として、我々若者の意識というものが、今後注目されてくるべきではないか、と私は考えます。そして意識形成にはやはり教育の力は重要です。

私が受けた小学校の家庭科の授業は、残念ながらこういっただい意図を形成する内容ではなかったような気がします。(略)性教育についても、何か不自然だなど思うような体験があります。(略)秘密の匂いをただよわせるような性教育が思春期を迎える子どもたちに、性について誤った認識を植えつける要因になるのではないかという気がします。

ある日、母が台所仕事をしながら「女の子が生理になったからと言って、はやし立てたりバカにしているいけないよ」と言いました。この言葉は私にとって、女の子にとっての生理が大切なもの、尊厳に値するもののように感じられ、その記憶はいまだに残っています。(小金井・菊地卓哉)



神奈川・「標準」化の中、青葉台中は

横浜市緑区の市立青葉台中は、県内の公立中学でただ一校「服装は自由」で通している。四十八年春に開校して、標準服があった二校から移ってきた新二年生は、Tシャツ姿が目立つ新一年生を「小学生みたい」「ミニスカートでは掃除ができない」と批判したが、一年生は私服でいいというのが主流。生徒総会が繰り返され、アンケートもたびたび。一年半に及ぶ議論の結果は「私服とする。ただし指導を基盤とする」であった。第十回卒業式はしっとり落ち着いた服装の中で行われ、「決められた制服で通学することは簡単です。難しいのは中学生らしい服装を考えて通学することでしょう……」が答辞だった。県・市教委に規定はなく、文部省も「学校の主体性を重んじる」だが。

(朝日、4・21、山口里子)

北海道・荒れる学校苦悩濃く  
道立教育研究所が五十七、八の両年度に行ったアンケート調査「児童・生徒の健全育成のための地域社会の教育に関する研究」によ

ると、授業妨害がひん発しており、出席停止措置を望む声も多く、校長の裁量で出席停止、自宅学習などができるように法令を変えなければならない整備が上回った。

(北海道、4・3、高橋芳恵)

宮城・女子教員下りカーブ

小学校教員に占める女子の割合が全国的にも減少しているが、宮城県では減少の度合いを上回っている。「出産による『不都合』によって採用が抑えられている」との声も。

(河北、4・12)

・教師の「うつ病」多発

教師に「登校拒否」のようなうつ病、うつ状態が増えているが、これは現代社会のストレスの反映で、校内暴力の多発とはあまり関係なさそう。東北大医学部心療内科のグループの調査結果。年代的には四十代が多い。

(河北、4・19)

・婦人団体がハンスト

男女雇用機会均等法制定に伴う労基法改正の動きの中で「女子保護が骨抜きにされる」として「女の明日連続講座」のメンバー十三人が錦町公園で四十八時間ハンガーストライキに入った。

(朝日、4・21、高橋静子)

栃木・宇都宮 58年度の少年補導状況

市少年補導センターまよめの五十八年度行為態様別街頭補導状況によると、中学生が四割で最も多く、前年比では小学生が41・3%増。行為別では「好ましくない遊び」がトップで次が「盛り場徘徊」。女子の補導は全体の二割、その半数は高校生。(下野、4・29)

・PTA総会は禁煙―佐野市連絡協

市PTA連絡協議会(大畑明会長)はこのほど定期総会の会場を禁煙にすることを決めた。全国的な禁煙運動の盛り上がりと団体の性格上などを考慮した結果。今後は各種の会合も禁煙にする方向で検討している。

(下野、5・2、坂本昌子)

千葉・勇退県幹部、22人が天下り

一日付けで四千人を超す県の異動があり、勇退した部、局長三人を含む二十二人の幹部が県の関係団体に天下っていたことが明らかになった。最低四年間は退職時の給料が保障され、団体間を移動すれば退職金も入る優遇ぶりに批判の声。「千葉をかえよう! 県民の会」の宮川淑代表は「県にはえたいの知れないものを含めて外部団体がずいぶんあるとか。そこに血税を注ぎ、県幹部が天下るのはけしからん」と。

(毎日、4・10)

・小中学生二千人の意識調査

小学六年生の47・9%、中学二年生の55・9%が「家出をしたと思ったことがある」と市教委青少年輔導センターから発表された。調査では家庭生活に不満を持つ小中学生が年々増えていることや、男子より女子の方が大人に対して批判的でクールな対応をとる。女子の非行が目立つ傾向などを裏付けた。

(毎日、4・25、木田直子)

埼玉・「埼玉療育園」は医師・看護婦不足  
寄居町象ヶ鼻、社会福祉法人埼玉療育友の会(蓮江富子理事長)立の肢体不自由児施設「埼玉療育園」(蓮江武富園長)で、医師、看護婦数が満たされていないほか、併設の埼玉療育園建設のため療育園で生じた剰余金を建設費用にまわすという違法流用がとられている。

(読売、4・27、村上悦子)

新潟・「スポーツ塾」誕生  
「新潟体操教室」のチーフコーチ畠野毅さんは「最近、基礎的な運動が出来ない鈍くて消極的な子供が増えている。単に運動能力の問題に止まらず、メンタルな部分への影響が大きき、この面を解決することが先決です」と語る。

(新潟日報、4・13、山口久子)

石川・婦人労働の実態調査―県職安課発表  
職場で女性差別を感じた者が半数以上―

「賃金や手当が男性に比べて低い」「仕事外の雑用をさせられる」「昇進や昇格が男性より遅いか不可能」などを差別内容としている。

(北陸中日、4・22)

先生の悩み解決します

先生たちの悩みを解決しようと石川県文教会館が計画していた教育相談がスタートする。子育てに悩む父母の相談も。予約は☎0762(62)57660 (北国5・2)

・保母が余って大弱り

出生率の低下で多くの保育所で定員割れが生じ、働きたい女性の増加で退職者が減り、保育行政一番の悩みは余剰保母の問題。全国一、二を争う保育先進県が裏目に出た側面も否めない。

(北国、5・9、三石久江)

愛知・「あかん教育」次々に

「かかん会」(管理教育はあかん会)が「かかん祭」を催した。七百人を超す高校生、浪人生、教師、父母らが交流会、法律相談、コンサート、映画会、討論会に参加した。同会の連絡先 名古屋市中天白区天白町八事裏山、エルマノス八事三〇一☎052(831)4544 (朝日、加納とし子)

・不安定つくづく私服黙認―旭丘高校

管理教育名高い愛知県内、私服黙認の唯一

の県立高校は旭丘高校。「研究期間」として十五年間黙認が続いたが、生徒会が私服の公認を要求した。学校側は生徒の意向を尊重したいが、県教委には制服の通達があるうえ、他校への影響も心配され、すんなり公認されそうにない。

(中日、山田和枝)

兵庫・ロングランめざす反戦デモ

平和を願う市民が毎月第三日曜日に尼崎市の阪急塚口駅前で通行人に反戦を訴えるデモ「さんさんラリー」は半年目を迎えた。メンバーは「ずっと続けて行けば、反戦への思いがわかってもらえる」と元氣いっぱい。

(朝日、4・16、由良サダコ)

大阪・全盲の市議が誕生

高槻市議補欠選挙で、社会党から立候補した全盲の山内常行さん(36)が当選した。現職の全盲議員は国会はもとより、県議、市町村議を通じ、山内さん一人。「自分の体験を市政に生かしたい」と。

(神戸、4・16、由良サダコ)

香川・痴ほう性老人引き受けます

高松市はこれまで寝たきり老人に限っていたが、目が離せない痴ほう性老人を最高三十日間預かる。

(朝日、4・27、豊田妙子)

# あいてな あんてな

## ★国籍法改正が成立★

5月18日、参院本会議で、国籍制度を父系血統主義から父母両系主義に改めるための国籍法・戸籍法改正案が可決、成立した。父母両系主義の採用は明治32年に施行された旧国籍法以来、85年ぶりの大改革で来年1月1日から施行される。

主な改正点は、現行の「父系血統主義」を「父母両系主義」に切り替え①父母のどちらかが日本人であれば、その子供は日本国籍を取得できる②二重国籍者の防止策として、22歳までの段階でどちらかの国籍を選択できる③日本への帰化条件を緩和し、男女の区別なく「結婚1年以上、日本在住3年以上」もしくは「結婚3年以上、日本在住1年以上」とする一など。

(毎日、5・18付)

## ★雇用均等法案を閣議決定★

政府は5月11日の閣議で、雇用面での男女差別解消をめざす男女雇用機会均等法案(略称)を決めた。労働省が4月19日に諮問した法案要綱(6月号参照)の原案通りに、婦人少年問題審議会から5月9日、答申されたので法案化した。労働側委員の付帯意見に配慮して女子保護規定を一部手直したものの。

工業的業種についての時間外労働の制限について、要綱では「2週間について12時間、1年150時間」とあったのを「1週間について6時間、1年150時間」と現行規制(1日2時間、1週6時間、1年150時間)に近づけた。また、非工業的業種については時間外、休日労働の包括的な法的制限は廃止するものの、新たに①1年間では150時間以上300時間以下②1週間では6時間以上12時間以下、の範囲を基準に労働省令で歯止めを設けることにした。

労基法上の「生理休暇」規定は廃止された。ただ要綱では「生理日の就業が困難で、本人が請求したときは就業させてはならない」だったが、「本人が休暇を請求」と改め「休暇」の文字を入れることで、現行規定により近い形で存続させることにした。法案は現在の労使慣行は急変させないで徐々に改善する基調になっている。

政府は同14日に国会に提出、今国会で成立させたいとしている。が、「実効ある男女雇用平等法の制定」を強く主張してきた労働団体、婦人側は①募集や採用、配置、昇進を含めて、罰則つきで禁止規定にする②労基法の保護規定の廃止、大幅緩和を避ける一などの基本点について、野党各党と連携、修正を求めようとしている。国会審議の難航は必至。(朝日、毎日、5・10、11付)

## ★ぶつつぶせ／労基法改悪・企業が喜ぶ均等法 かちとろう／女のための平等法／5・20全国総決起集会★

政府が5月14日国会に上提した雇用機会均等法ならびに労働基準法の改悪案の成立を阻止し、効力ある「平等法」をかちとるために、5月20日、東京・代々木公園で上記の集会が開かれ、色とりどりの風船に飾られた会場に親子連れなど約1200人が集まった。主催は効力ある平等法を！女も男も連帯委員会。

経過報告の後、それぞれの職場、地域などからアピール。最後に「政府の差別促進『均等法』の成立を許すな！」「労基法改悪反対！」「婦人差別撤廃条約に基づき、募集採用から退職に至るすべての性差別をかちとろう！」などを決議、宮下公園までデモ行進した。

## ★女性船員の母性保護を答申★

船員中央労働委員会(所沢渡夫会長)は5月9日、女性船員の労働条件について夜間労働の禁止規定の撤廃、妊娠婦の母性保護の強化など船員法の改正をするのが適当との答申をまとめ細田運輸相に提出。

(毎日、5・10付)

## ★離婚の母子世帯急増★

5月4日、厚生省がまとめた「83年度全国母子世帯調査」によると、全国の母子家庭は5年間で13%増え71万8千世帯。内訳では離婚した家庭(35万2500世帯、全体の49.1%)が夫との死別家庭(25万9300世帯、同36.1%)を初めて上回った。未婚の母の家庭も8千世帯増え、史上最多の3万8300世帯に(全体の5.3%)。

同調査は母子福祉行政などの基礎資料を



得る目的で、1952年以来、ほぼ5年ごとに実施。今回初めて父子家庭と両親ともいない家庭をも調べた。

母親の平均年齢は41.5歳。84.2%が働いている。14%強の母親が小学校入学前の幼児をかかえている。

暮らしは苦しく、82年の平均年収は税込みで1世帯(平均3.16人)当たり200万円で、一般世帯(平均3.42人、444万円)の45%にすぎない。夫と死別した家庭は平均240万円なのに対し、離婚家庭と未婚の母の家庭の平均は177万円。

厚生省は現在、別れた夫の前年の年収が600万円以上なら、低所得の母子家庭に対しても児童扶養手当を支給しないことなどを骨子とする児童扶養手当法改正案を国会に提出している。が、今回調査では前夫から養育費を受け取っている母親は11.3%、過去に受け取ったことがある母親も10.1%しかないことがわかった。

父子家庭は16万7300世帯。離別が6割、死別が4割で、父親の平均年齢は43.2歳。9割が働いており、税込みの年収は、世帯平均(平均3.3人)で299万円。母子家庭の1.5倍だが、一般世帯の約3分の2。

母子家庭の悩みが①家計②仕事③住居④家事の順なのに対し、父子家庭は①家事②家計③仕事④住居。

両親ともおらず、養育者が子供の面倒を見ている世帯は36400世帯。養育者の8割弱は祖父母。両親は離婚が4割強、死別2割強、生死さえ不明18.1%。(朝日、5・5付)

#### ★患者の「権利宣言」今秋に起草★

医事紛争を積極的に取りあげている「医療問題弁護団(代表、東京弁護士会所属渡辺良夫氏)は、今秋に日本で初めての「患者の権利宣言」を起草し発表することを決めた。世界医師会のリスボン宣言やフランスの病人憲章など、医師の側からつくられた理念は知られているが、患者側からの「宣言」起草運動は、世界でも珍しく、「知る権利」を盛り込んだものになる。

同弁護団の小委員会は、昨年、依頼人にアンケート調査した結果、多くは医師や看護婦に、いいたいこともいえず、聞きたいことも聞けず、遠慮していたことがわかった。いずれも「心証を悪くしたら、いい治療をしてもらえないのではないか」との恐

れからだった。

同委員会は、調査結果から「本来は医療の主人公の一員である患者がすみに追いやられている」と分析。その改善のため、米国の病院などを調べ、独自の「権利宣言」をつくることで意見がまとまったもの。

4月14日の総会に用意された原案によると、宣言はまず前文で、現実の医療の場では、患者は自分の体に起こっていることやなされている医療行為について十分知らされておらず、また一般市民が自分の症状に適切な病院、適切な医師の診療を受けたくても機会が得にくい、など問題点を指摘。続いて、個人の尊厳、平等な医療、最善の医療を受ける権利、医療内容を知る権利、自己決定権、プライバシーの権利、医療従事者の義務の7項目について規定している。(朝日、4・23付)

#### ★「いじめ」に関し、文部省が初の手引書★

子供同士の「いじめ」を初めて取り上げた文部省の教師用手引書「児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題」が4月23日できあがり、全国2万5千の小学校に配られた(1部220円で大蔵省印刷局から市販)。

いじめっ子をめぐる8つの指導事例を紹介。いじめの背景には、きょうだいや遊び仲間が少ないために対人関係に未熟な現代っ子の特質がある、とし、教師の指導上、①他人の立場や長所を認め、他人の痛みを感じられる共感性や思いやりを持たせる②仲間意識や助け合いの雰囲気を実感させるために集団活動を活発にする一などの工夫を求めている。

又、問題解決には、教師と父母の連携が不可決だと強調。(朝日、毎日、4・24付)

#### ★学校で禁煙教育を★

「禁煙教育を考える会」が5月17日、東京の日本教育会館で設立総会を開き、学校教育面からの禁煙運動を本格的にスタートさせた。同会は全国禁煙・嫌煙運動連絡協議会や日本子どもを守る会、日教組などが呼びかけ団体となって設立。

当面の運動として①小・中・高校に一貫した禁煙教育のカリキュラム編成をすすめる、確立をめざす②禁煙教育推進の議会決議を採択するよう各自自治体に働きかける一などを掲げている。(毎日、5・18付)



## ★Weバックナンバーのご案内★

〈vol.1〉創刊号いでたちぬ、いま

五月号父よ、母よ、教師よ(品切れ)

六月号共に生きる

七月号新しい家庭科とは

八・九月号反戦とは、平和とは

十月号人間の自立とは

十一月号家事労働を問う

十二月号家庭・家族

一月号新しい男と女のかかわりを

二・三月号くらしをいとおしむ

〈vol.2〉四月号教師は、今こそ声を

五月号産む・産まぬ……

六月号はたらくことをめぐって

七月号コミュニケーション

八・九月号老いを考える

十月号今、教科書問題を問う

十一月号食べるということ

十二月号着るということ

増刊号学校はよみがえり得るか

一月号「一九八四年」

二・三月号住むということ

〈vol.3〉四月号PTAって何

五月号いまこそ、家庭科を問う

六月号地域に生きる

## 表紙のこトば—加藤由美子

さてさて思うのだけれども、少年少女という言葉を多用するのは、案外少年少女じゃない人たちなんだろうな。少年少女たちは、では自分のこと何て思っているのだろう?……と、考えているところをみると、きっと私も少女じゃあないんだ!。これは大発見!!

(何で少男、少女ではないのかな?)  
というところで、人間共から「ウサギ」と呼ばれているかの耳の長い生き物は、やっぱり自分では「ウサギ」とは——?

◆先日どなたかの「自由」受話器を

服」という言葉をさわやかにおろして思わず頭を下げてに聞きました。私は前々かしまいました。石川県の三から「私服」を中・高生の「制服」に対する言葉として使のため郵便局へ行けない人うのは変だなと思っていたが多いんですよネ。その人のです。「私」の反対語はにかわって、私が行ってあ「公」、学校をそういう意味で、We連絡所の看板を掲げ合いで意識したくないのです。もいいかとお電話。

「自由服」もいまいちの感がないでもありません。よい呼び方があったら教えて下さい。  
(中野)

♥四方淑子さんはかつて私の講義を聞いた人。昨年児童館の講座で再会しました。講演で、若いママたちに高田敏子氏の詩を紹介。おかあさん/おかあさん一日になんどもあなたの名を呼んで/月日が流れる/ちいさなかなしみもあなたに告げて/ちいさなよろこびもあなたに告げて……。

四方さんは「中学校の卒業式で卒業生の歌として歌い、私が伴奏した思い出の曲です。女子生徒はほとんど泣いてしまつて、男子生徒の低い声ばかりが聞こえ伴奏の私は困つてしまったことを昨日のように思い出します」と語りました。

お願いしておいた楽譜が届いたのは、母の日の数日前でした。

♥次号のテーマは「遊ぶ」ということ」です。(半田)

新しい家庭科—

発行所/(有)ウイ書房

Vol. 3 No. 4 1984年6月20日発行  
¥530(年間購読料・増刊号含¥6000)  
編集兼発行人/半田たつ子

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 振替 東京6—59867

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい  
Weの仲間をふやして下さい

—Weの取り扱い店一覧— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい (5月17日現在)

旭	川	富貴堂	す・えいがさい <葛飾>	江	南	青雲堂	和	歌	山	宇治書店
砂	川	京栄堂書店	宏精堂、中村書店 <世田	豊	橋	文教書店	海	南	南	住岡書店 ジャスコ
島	松	いわた書店	谷>やまべ書店、江崎書店	田	田	耕文堂	神	戸	流泉書房	
鉏	路	矢野書店	<練馬> かじか書店 <北>	崎	崎	鈴彦書店			ヒカリ書店	
函	館	カノウ書店	愛京堂 <墨田> 業平堂 <江	旭	戸	カマクラ文庫			日進堂	
盛	岡	神田書店	東> 文俊堂 <品川> シグ	張	三	活人堂			明文館	
		東山堂	マ図書 <吉祥寺> ウニタ	瀬	浦	三浦書店			文進堂書店	
		みみずく書房	書店 <目黒> 中川書店 <三	岐	島	宝島			育文堂書房	
花	巻	誠山房	鷹>第九書房、たべもの村	新	渕	栗山書店			姫路九善	
水	沢	松田書店	<調布> みづは書房 <武蔵	小	谷	谷書店			弘栄堂	
仙	台	こどもの本の店	野> 中森書店 <府中> 国	三	条	新潟書房			学友書房	
		プーの家	府書店会 <国分寺> 青野書	長	岡	島張書店			今井MC本店	
		八重洲書房	店 <国立> 東海書店 <立川>	富	山	清明堂書店			今井書店	
		ポラン	石井書店、オリオン書房	高	岡	清文堂			武田書店	
		森書房	<小平> 和中書店 <八王子>			イソップ屋			やまびこ書店	
		高山書店	くまざわ南口 <清瀬> マル	岡	杏	笠原書店			いづみ書店	
		金港堂	オカ書店、飯田書店、<町	松	本	新光堂書店			アサヒ書店	
		ホビット館	田>久美堂 <多摩> くま	長	野	吉野屋書店			草間書店	
		加賀屋書店	ざわ永山店	飯	山	牧野書店			岡田書店	
泉	田	八文字屋	横	金	沢	うつのみや			白藤書店	
秋	形	岩瀬書店	川	崎	井	セールズセンター			来去社	
山	島	西沢書店	相	模	原	ひまわり書店			タカハシ書店	
福	山	松文堂	鎌	倉	大	じつぷじつ			雄徳堂徳野書店	
	岡	川島朝日堂	藤	沢	東	吉川隆文堂			依光書店	
郡	橋	アルプス社	相	模	大	春江書店			北九州書店	
藤	生	近江書店	鎌	倉	大	品川書店			白石書店	
前	沼	至誠堂書店	相	模	大	勝木書店			黒崎ひとりわBC	
桐	戸	ツルヤB.C	藤	沢	東	海光堂			金文堂	
水	城	太陽堂	厚	木	内	海老山書店			丸山スコレ店	
結	和	岩瀬書店	綾	瀬	内	旭屋書店本店			江頭書店	
浦		須原屋	座	野	藤	紀伊國屋書店			日新堂	
	口	新井書店	桑	野	ワコー書店	ユーゴー書店			金華堂	
川		水泉堂	小	田	みどり書店	増田書店			文光堂	
		ブックスサトウ	甲	府	榎本書店	樋口書籍			好文堂	
越	谷	日野屋書店	小	府	伊勢治書店	米原十六堂			紅屋書店	
東	山	比企文化社	甲	府	太洋堂	タミーB.C			高校生協	
船	橋	比原かっぱ	静	岡	百町森書店	藤川書店			三章文庫	
松	戸	元山書店	警	田	吉見書店	学友			開書堂	
津	沼	大和屋書店	浜	北	森上書店	ヒバリヤ			今村書店	
鎌	谷	岡田書店	沼	津	あつみ書店	かつらぎ			スズキ書店	
佐	原	多田屋	沼	宮	谷島屋書店	昌文堂			常広畜産大学、東北大学、	
市	川	大杉書店	沼	屋	マルサン書店	豊文堂			山形大学、福島大学、新潟	
東	京	<千代田> ビビビ、	名	古	文正堂書店	豊文堂			大学、群馬大学、宇都宮大	
		日成堂、書肆アクセス、			ウニタ書店	なになに書店			学、茨城大学、埼玉大学、	
		三省堂本店、書泉グラン			ボランの広場	香里書店			日本女子大学、東京大学、	
		デ、東京堂 <文京> 鈴木			日比野泰文堂	コーベックス			東京家政大学、東京学芸大	
		書店、<豊島> 池袋書店			谷口正文館書店	西武			学、法政大学、成蹊大学、	
		<杉並> 木風舎、新愛書店、			稲沢文光堂	松香堂書店			愛知教育大学、金沢大学、	
		ブラサード書店、たつみ			白樺書房西店	オデッサ書房			大阪市立大学、立命館大学、	
		書房、みどり書房 <新宿>			白楊書舎	中島書院			宮崎大学、高知大学、琉球	
		紀伊國屋書店、模索舎、			竹中書店	大久保京都書店			大学	
		ブックスミヤ、伊野屋書			中日書房	井田書店				
		店、ジョッキ <渋谷> すべ				恵文社神足店				

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入  
ができます。お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由  
とご指定のうえ、ご注文下さい。